



里見八犬傳拾四編卷廿九



特別
A13
4304
15



曲亭主人編次

八犬傳

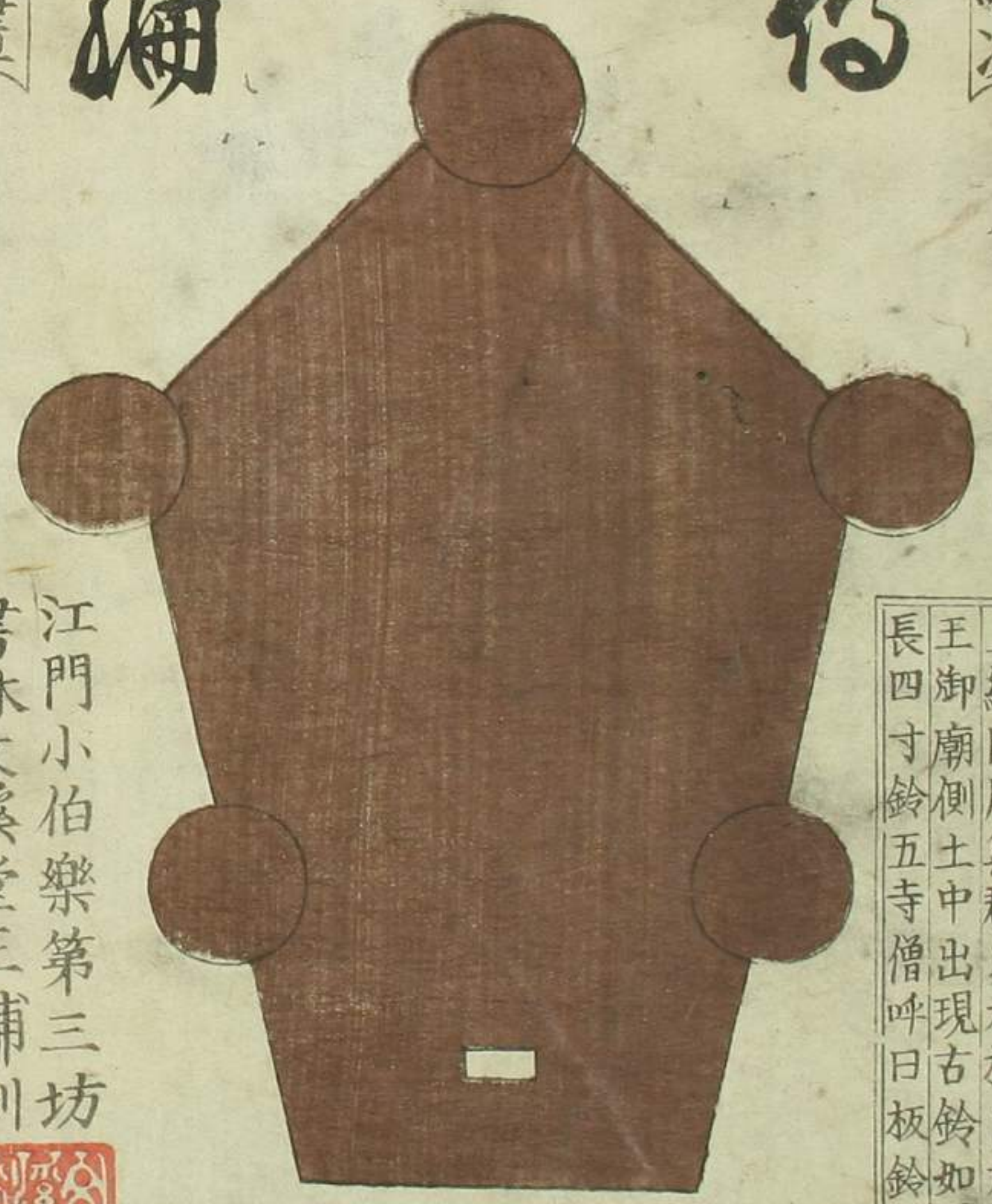
第九

輯

下帙

下中編

柳川重信繪畫



上總國周集郡貞元村貞元親
王御廟側土中出現古鈴如圖
長四寸鈴五寺僧呼曰板鈴云

江門小伯樂第三坊
書林文溪堂正舖刊



(2001-317)

南總里見八犬傳第九輯卷之二十九箇端或説教贊辨
 嚮友人生告といへり。或云本傳第九十九回素藤鬼語とて段より第百四
 十九回一休画虎を度する段まで事々物々怪談鬼話をもめり稀々且上十二地
 藏の利益あり下小薬師十二神の靈異あり又前小狸兎の怪談あり後画虎の
 怪談あり其事都て重復を免れり。互に相犯さむといへども大凡看官の怪談と
 好むと好ざるとあり其怪談と好む者必飽く心地まよといへり。この言當れりやと
 問れり予は口をいへり。古不口然とて。唐山大筆る稗史の縁て。是を思ふべし。彼
 鬼話怪談の言は獨西遊記のをも。壁水滸傳の如く。又是怪談とて。趣
 趣向を建てる見るべし。始小石碣一百十箇の魔鬼君を走まらるあり。又小石碣一百
 八箇の魔鬼君と治めて遂小宋朝の忠義士小做せり。彼が一部の大趣向也。作者の
 隱微ある存り。予嘗水滸隱微發明評。且羅維真人公孫勝の仙術戴宗が神行樊瑞

八犬傳九輯卷之二十九

文溪堂藏

高廉が幻術及九天玄女の靈驗實助。皆是多く怪談に涉れり。然るに金聖
 歎が評に二國志演義を非く。水滸傳の毫も怪談をといひの失ふべし。と
 左まれ右もあれ本傳も亦始より鬼話怪談をのり趣向を建ち。山童九十九
 回以下のあつんや。所云始は役行者の利益あり。又伏姫腹を辟く。竟八犬士
 出世の張本ある奇談あり。是より後。又怪談に涉は者。事比皆勸
 懲の意あり。せある。就中地藏茶師の靈應利益の世の怪談に惑る婦
 幼及事と好む雅俗をいそ。竊覚さん。叮嚀反覆して。終りて。然
 るを怪談よりといひ。右てもいまま。覚る欲辨するとも。かひるる。抑怪談
 雅俗の差別あり。不及る。予が終る。性談の事。勸懲あり。者。あを
 世に在る所の怪談と相似て。同からざる。よく見る者。予が言を俟る。わわわわ。
 この故。吾常云。五言漫物の本。綴り初。此は五十餘年。実は無益の

技るれども。己の老煉。小至りて。ののま。精く。十二分。おせざる。然るに。看官の
 只二分四分の。二の同好知音の評。も六七分の上を。おせ。其心。用ひ力。入る。処
 精粗。同ト。か。ね。い。ある。近。曾。人。あり。予が。舊。作。る。俊。寛。僧。都。嶋。物。語。成
 評。ある。八。犬。傳。を。除。く。外。是。を。第。一。の。佳。作。と。ま。い。り。の。私。言。の。予。の。決。り。て
 諾。る。も。但。予。が。諾。る。の。も。十。日。の。視。る。所。大。く。同。か。る。べ。し。人。各。褒。貶。を。
 其。好。憎。小。儘。ま。り。必。公。論。る。べ。し。與。言。れ。ば。然。る。べ。し。の。人。情。も。已。が。如。此。僻
 者。の。與。言。ら。れ。て。さ。く。恥。く。は。り。あ。り。否。も。あ。り。い。ま。己。と。知。ぎ。て。い。づ。か。せ。よ。人。を。知。ん。或。の
 砥。破。の。美。を。負。む。が。為。光。と。陪。玉。の。争。ち。欲。く。或。の。瑣。々。小。鶏。彼。距。を
 舉。て。力。と。封。牛。の。比。ま。く。欲。ま。る。が。如。此。是。予。が。恥。る。所。友。人。又。生。口。い。へ。く。或。云。本。傳
 第。百。二。十。一。回。八。犬。士。稍。全。聚。ひ。て。俱。安。房。へ。徵。れ。て。里。見。の。家。臣。あ。る。と。の。段。是。宜。く。大
 團。圓。ま。る。べ。し。然。る。に。又。金。碗。の。姓。氏。の。事。と。説。出。し。京。師。の。話。説。十。八。九。回。あり。第。百。三
 十。二。回。の

末より第百四十
九回に至り あり疣敷負のあまを。いふ。嗚乎又此等の言の飲本傳の京師の
事と説く十數回は是始よりの腹高来り。然るを疣敷負とせしむるの思ふ故
をあらわす。何を何とる。八犬士俱の安房の到りて。里見の家臣あるの。大江親兵
衛を除くの外。七犬士皆一介の功なる。是尸位素餐の人あるべ。犬士等かくの如
くあり。可るん乎。且京師の語説微り。俗云田舎芝居の似て始よる説く
所。東八州の事。過に然。然で。話説廣く。大部の物の本。不足ざる所あり。壁言
水滸傳の如に。七十回の後。招安の事。及京師の語説あり。あ。至る。一百八箇の
魔君。皆よく。變りて。宋の忠義士。あり。尙。是。もの。事。も。七十回。を。局。を。結。ぶ。
彼。二百八人。も。梁山泊。嘯聚の。強人。の。何。を。と。と。勸。懲。せ。せ。是。由。て。これ。を。觀
る。水滸。百。下。回。の。羅。貫。中。が。一。筆。を。疑。ひ。る。然。る。と。又。彼。金。瑞。七。十。回。以下。を
証。て。續。水滸。傳。と。して。反。々。酷。く。訛。り。し。他。が。如。に。水滸。の。皮。肉。を。知。る。の。骨。髓。也

治る者。あ。む。を。然。有。人。の。臆。断。本。傳。百。二十。二。回。を。圓。圓。の。宜。か。む。と。い。ふ。と。又
彼。金。瑞。が。水滸。七。十。回。を。強。て。結。局。と。する。と。日。と。同。く。を。論。ぶ。下。も。吾。意。意。壽。桑。榆。の
暮。景。に。至。る。と。看。官。と。て。本。傳。の。結。局。を。い。ふ。故。に。と。あ。り。け。り。予。も。い。ふ。が。あ。ら
ね。も。腹。稿。尚。餘。り。あ。り。其。遺。捨。ん。と。ま。ま。の。九。輯。下。帙。の。下。し。編。十。卷。を。分。卷。十
五。冊。と。して。稍。大。圓。圓。と。する。者。も。筆。次。の。本。輯。卷。の。二十九。第。百。四。十七。回。大江。仁。が
三。回。を。破。る。處。の。出。像。の。画。工。謬。々。作者。の。稿。本。を。違。へ。仁。が。馬上。の。敵。の。雜。兵。を
研。不。捉。擲。り。為。体。の。画。は。第。百。二十七。回。左右。川。の。段。の。出。像。仁。が。跪。々。兩
手。不。敵。の。雜。兵。を。捉。抗。する。處。と。又。第。百。四。十。回。の。出。像。仁。が。馬上。の。德。用。を。抗。抗
する。處。あ。れ。此。彼。重。復。々。且。馬上。の。人。研。仁。が。相。応。する。處。を。看。官。必。難。き。も。あ。り
又。云。画。工。是。を。考。て。聊。改。め。し。作者。不。見。せ。り。け。れ。知。る。の。受。及。右。の。一。條。削。去。す。べ。し

天保十年花月念八

曲亭主人識



南總里見八犬傳第九輯下帙之下乙號上套目錄

卷二十九

第四百十六回

白河山代四郎救小姐
談講谷親兵衛射大蟲

第四百十七回

紀二六月下逢真刺
親兵衛湖上破三關

第四百十八回

頓智之功從者妙利
奸詐之悔執權送還

第四百十九回

石藥師堂賢少年辭朝賞
東山閣老和尚醒驕君

卷三十

第五百十回

照文捧二書還東藩
兩侯聽忠議寬京信

卷三十一

第五百十一回

七犬煉兵夢想行三使
定正連將水陸起大軍

第五百十二回

憲重儀聚兵同使
行包在村忠奸異諫

第五百十三回

毛野呈計八百人
大聽命善巧方便

本輯下帙の下所云下套の乙號編の五巻迄の目録は因と十
卷の中局を結ぶもの内中巻の卅と卅四至を楮敷の目録に
載せ上下各二冊を共其十五冊其十五冊の中五冊夙々彫果る
先出せる右第五百十三回以下も必續ておと云看官亦復俟待べ
南總里見八犬傳第九輯下帙之下乙號上套目錄終

八犬傳九輯卷二十九
四
文溪堂藏



つまね草こまきま
まし買へ大津画
の鬼のま草も
あまの野乃花
羊飼人

大杖入道捨
物

老松湖大丈
惟一

根古下厚四郎
惟一



松柏如天
子
美人似花
花

再出
雪吹姫

秋篠將曹
廣苗



虎とを射撃矢とやのり
けむ今もさ野の石竹
の花

一休和尚
いっけうしょう

義政公
よしまさ

八代傳七郎卷三

文英堂

昔年同氣相求處
今日同憂莫不憐

箕田取蘭二
圓通のきん



麻士郎

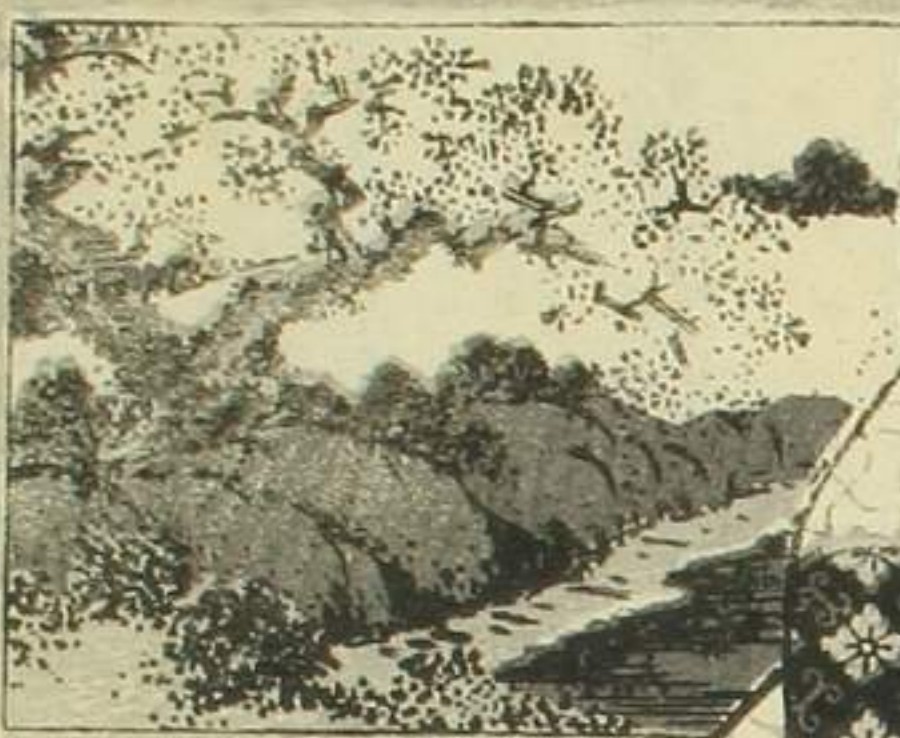


根角谷中二
麗麻

八代傳七郎卷三

文英堂

さよみ國川まきとて後りおのろふ
世をうら橋の甘きけだ 著作堂



下河邊莊司

行包 藤原



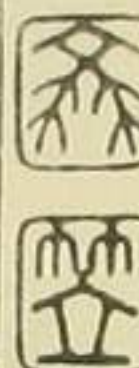
千代丸圖書助
豊俊

八犬傳九輯卷二十九

七八

文溪堂藏

君醉甚多
言壁垣
耳維有



世智介
甘ちま



小才二
シヤシ

ホリ

六丁作方車者三九

三丁作方車者三九

前板第九輯下帙の下甲號五卷校閱遺漏再訂抄録

○廿四の卷 三丁ノ左 九の長歌 河の更の移 同 七丁ノ左 綬 治の誤 同 右五の 懲 誤 同 右七の 蛇 誤 同 左三の 四月中旬 誤 同 右八の 畫 蝨の眉 同 右七の 燕雀の南 治を治と訓

○廿五の卷 二丁ノ左 虫積 積の誤 同 右八の 城堙 堙當小隍 同 右八の 画 蝨の眉 同 右七の 燕雀の南 治を治と訓

○廿六の卷 二丁ノ右 夜叉 夜叉の誤 同 右七の 燕雀の南 治を治と訓

○廿七の卷 三丁ノ右 只虚々 備訓の誤 同 四丁ノ左 餽鬼 餽鬼の誤 同 七丁ノ右 見 誤

○廿八の卷 左六の 優 優の誤 同 二十丁ノ左 二十名 誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○廿九の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○三十の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○三十一の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○三十二の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○三十三の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○三十四の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○三十五の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○三十六の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○三十七の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○三十八の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○三十九の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○四十の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○四十一の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○四十二の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○四十三の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○四十四の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○四十五の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○四十六の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○四十七の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○四十八の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

○四十九の卷 七丁ノ左 小榎大榎 榎の榎の誤 同 右四の 知 知むとのふとる

南總里見八大傳第九輯卷之二十九

東都 曲亭主人編次

第四百十六回

白河山代四郎小姐を救ふ

却説姥雪代四郎直塚紀三と商量果る本日未牌左側は則大江親兵衛の

伴の若黨奴隷と先阪本の方へとて立去遣ひの登時又代四郎紀三

談考を傳聞を那白河身是來虎の獵戸們的鍊砲中及びてとる多小我里那

も何をもとよ防人曩小酒家大江腕子入迹絶方富山の洞穴秘の光陰送

索猛獸毒蛇の害をりて伏姫神の擁護を依れ今尚我姫神の真助心を幸ひ

を免れと思ふの心せざ事あらん折争何せん紀三ちて宣趣定小身を

神の祐を空憑して器械持去疎忽は似る然るそ那虎を我對治の與るも只身を



護るもそれゆゑに、小桿棒を携て、多く蕉火の準備せし、這談の什麼と相譚、代四郎然
 と領く、隨即夥兵、西三石の事、急々たるるを、汝達の檜の棒の宜きを六條とて、列
 卒繩と蕉火材と、言く買のて来ふかと、詞急迫く、吟附て、錢を齎と市小遣、其後逆
 旅夫を召て、代四郎の言、唯も東人大江殿の這地、御用果、れ身の暇を多と、明目歸
 路、赴るは、是より、我々の、這曉、昏より、那果、参りて、手伴、立され、既、く、餘波、さる、女
 饌の外、腰、餉と、人別、準備、せ、その、美を、憑む、宣示、を、其、算帳、を、且、向、く、月、屬、の、房
 錢、を、還、り、さ、さ、程、の、紀、三、六、五、條、を、客、店、に、還、り、去、り、物、整、々、又、來、り、と、と、遠、く、い、か、せ
 自、け、の、左、右、を、程、の、下、曉、さ、り、し、時、候、那、西、三、石、の、夥、兵、の、東、西、皆、買、合、々、か、り、來、り、け、れ、
 俱、小、饌、と、喫、果、と、各、准、備、の、腰、餉、を、受、合、ふ、紀、三、六、分、足、を、さ、り、わ、り、思、ふ、も、餘、店
 小、三、伴、當、門、の、先、も、て、出、り、お、れ、せ、知、れ、紀、三、六、を、加、さ、も、尚、その、盒、子、に、有、餘、量、る、當、代
 四、郎、の、五、個、の、夥、兵、亦、向、ひ、て、曩、の、親、兵、衛、が、遠、慮、あ、り、と、紀、三、六、を、惜、地、に、留、り、別、店、に、在、り

あ、あ、夏、の、顛、末、と、耳、に、告、げ、の、夥、兵、の、筆、で、覺、得、く、且、感、且、歡、び、く、と、憑、く、思、ひ
 け、小、程、の、直、塚、紀、三、六、の、装、初、の、如、く、肱、甲、脛、盾、の、身、を、探、り、兩、刀、を、腰、に、さ、り、五、條、の
 歇、店、も、來、り、け、れ、代、四、郎、並、の、夥、兵、五、名、の、身、装、一、等、を、在、川、風、寒、に、點、燭、時、候、代
 四、郎、の、逆、旅、夫、亦、告、別、と、さ、り、兩、個、の、夥、兵、も、兩、箇、の、甲、冑、櫃、を、分、ち、各、是、を、馳、
 又、兩、個、の、夥、兵、も、蕉、火、材、と、言、ふ、盒、子、を、袱、子、裏、ま、つ、馳、の、と、も、代、四、郎、の、首、を、さ、り、
 桿、棒、を、合、さ、り、紀、三、六、の、親、兵、衛、の、鎧、を、受、合、し、肩、に、か、り、又、只、一、個、の、夥、兵、每、行
 兼、た、搭、駝、し、獨、代、四、郎、の、老、人、甲、斐、亦、背、輕、く、と、笑、ひ、け、れ、信、而、這、人、の、惜、地、に、三
 條、の、大、橋、を、ら、ち、渡、り、河、原、の、守、屋、を、外、見、り、既、中、て、白、河、の、山、路、を、登、り、程、の、宵、に
 尚、二、更、過、り、け、れ、是、より、大、家、由、断、せ、る、め、く、蕉、火、を、相、照、し、疾、親、兵、衛、の、逢、ま、
 思、ふ、不、知、案、内、の、太、山、路、の、而、野、干、玉、の、烏、夜、を、れ、或、は、無、常、樹、枝、に、渡、り、行、或、は、又
 所、に、依、り、峨、々、と、積、れ、る、石、の、障、り、と、ま、り、東、を、路、を、路、を、迷、り、憶、さ、る、夜、深、で

那猛獸と搏ゆや只命運を自然に任せて姑且這里に更達のかの事待つて
 今の大事に姫上不在の身を思へん人も思ふ備又途に非常の事必りとまへるに鄙
 語云僧作魂を入まるとやうに勞して功をたるとまへるに主さ面伏るるあふ後悔
 とも及んや枉て二人を俱へぬと連の甘鷹も己が代四郎竟に這議を容て敢
 又他事速に野兵們のち向ひて汝も自今する如く先左せと右ねと言邊に
 指揮し又雪吹姫の身邊に造りて恭しく禀けり不慮の御伴でか轎子に准
 備いづきそ御座屈るるに復這般若樞小駕の御館へ還し
 いざといそが雪吹姫領を思ひけり汝等の好情は再生の歡びあるを夜山の
 路と厭はもる遙く館へ送りて是れ稀る心操感ざる猶餘あり汝等の主
 る飲那大江とやら忠信義勇の崖路へ人の噂も隠れも開き從事甚だ汝等
 義侠徳をあらけれと今更思ひ合はる是れ就くも憎むべし那徳用と取前

ろる他の館に俗縁あり素是恩顧の者あり清白持戒の男僧を思ひ
 今宵の淫悪破戒を斬の業報靦面目暴虎小喫れくも脚を喪ひ
 現天四訓をあらむ館に是等の顛末を言え上はる汝等も賞禄の異日の
 沙汰あり先きのうとあらるてと答ぬを代四郎の言も果を眼を睜く否小可
 毎に下司でいも得ると見く義を思ふと云教と守る本性るれ御賞禄を願
 かき只この月来親兵衛が官領様と云小亭なり報恩の一條もあるねと思召
 とる飲むの上やい死としく出させぬと薦る程に兩個の野兵を携り来り列卒
 繩を般若樞小膝着け吊緒を執拵へ捍棒二條を合し是を杖代々卒を斬
 早寄され一個の野兵を蕉火二把を合し合り拵ある其一把火を燃して左の
 捍棒を突建く外に立て待く在り當下代四郎と紀三六も雪吹姫を杖駕りて敢又
 其蓋をせも兩個の野兵を見て這敗堂の縁頼より拵下り両肩入れて徐々



八十八卷九百九十九

十五

大英堂藏



諸惡勿
作
衆善奉
行

八十八卷九百九十九

大英堂藏

程一個の親兵と蕉火を振照し先小代四郎も桿棒を突鳴し引添て
 西陣を投ぐいとせげり。小程紀三六を送さし。兩個の親兵と俱小雪吹姫を目送て
 果て故処は退く時。肚裏不思議。焼雪煙の敷き憑り。今這神茶をり。徳用
 と堅削を活とも。明々地。我名を告て大江主の伴當といひ。這奴名あて。事の實を
 吐出さんや。要とわれと尋思をあら。航と親兵は固様々。と事情を耳に示せ。兩個の
 親兵ありて。倒俯し。徳用と堅削の左右の腋も挿入せ。耶と仰さぬ。掖起せ。紀
 三六則。茶籠る神茶と聊々合ふ。この悪僧の口中に放入。更亦石
 傍を掬ひて。決飲あるま。程亦奇效時を移さ。徳用も堅削も怒馬と
 我も復り。敢又脚の痛楚を覺を。俱紀三六を見り。何れ。什麼和玉も。那処の
 人ぞ。訝り。向へ紀三六答て。長老達心地の甚麼。面認。我の西陣。館
 仕まる。走卒。其甲某と喚る者。柳小身達の逐電の。折香西大人の

密意を兼る。我黨二十餘名。八方へ部せ。死身をも。趕鬼。中。咱。三
 名の。這。白。河。越。へ。と。差。向。り。て。來。あ。け。れ。も。這。頭。の。那。果。茶。虎。の。害。怕。あ。り。殊。難。義。の
 大。役。も。負。之。箴。を。脱。る。路。を。か。そ。く。這。山。路。と。十。餘。町。登。り。來。り。程。這。敗。堂。の
 頭。も。死。身。も。血。塗。れ。倒。俯。ゆ。い。を。見。出。ら。う。ち。教。導。を。喚。活。て。も。勸。て。も。氣。息。を
 けれ。術。あ。ら。ざ。り。一。幸。い。て。我。懷。小。金。瘡。の。神。效。も。奇。某。あ。る。思。ひ。て。隨。即。是。を
 用。ひ。果。一。甕。生。の。歡。び。あ。り。世。間。の。昔。も。今。も。と。喪。心。脚。を。削。ら。と。死。る。者。を。死。か
 ら。も。疾。不。愈。る。何。う。あ。ら。ん。命。の。芽。出。さ。な。か。ら。心。つ。く。思。ひ。ぬ。と。實。を。な。す。慰
 る。を。徳。用。听。り。點。頭。し。開。き。各。大。義。を。却。我。親。の。意。に。甚。麼。の。れ。あ。り。と。言。ふ。と
 向。へ。紀。三。六。然。と。我。們。の。公。卒。隊。追。隊。の。香。西。大。人。の。宣。け。り。徳。用。も。が
 猛。可。の。亡。命。の。路。費。る。の。不。便。さ。ん。若。們。悄。地。の。趕。鬼。も。他。も。不。逢。り。這。金。を。遞
 與。て。其。投。方。へ。送。届。け。て。か。り。來。り。又。只。悄。地。の。我。の。報。よ。然。る。時。宜。し。我。必。若。們。を

執登て宜に職役と授金と仰らば、甲斐あり。逢ふる會多う、身も
 那虎小次も、喫れ脚を断せ。投るべくもあらず。天も明館より、蒐させぬん
 真の追隊の這頭へ来る。争何のせん。是不便のゆゑと辯儘しく欺け。堅削
 も共侶小次、徳用と云ふ。長老よ、這人々、是我們が身方なれば、隠さぐもあ
 る。那小姐の恙もきて、今も猶那里居るや。心許るまふそ。いふ徳用然る
 と忘る。喃人々、御小我這堂内、一個の妙を捉籠く措け。今も尚那婿、其頭
 在る。汝甚麼とや。と問へ。紀二六頭と掉く。否。然る人の無無と、いふ。兩個の悪僧を共
 侶小歎口氣して、噫、最惜や。那小姐も亦暴虎小銜去られ。今、屎もや。小けん
 悼む。とと、軟頭と、默然と。姑且、徳用、又紀二六を見え。喃人々、左ても
 右ても我薄命なる。事の秘睫を今更親の使介と和郎、隠さぬ。あつた。これ
 其崖略を告入、听ね。我、那里見の使者、大江、奴、舊怨のあ、所、以、小、屎、密

懇志、これ、館を破り、鈍も、那奴と愛しく、我言を信容られ。刺、試、殺、の折、那奴が
 為、我、さ、不、覚、を、取、り、う、然、我、小、齊、一、死、河、原、勤、役、の、頭、人、種、子、嶋、中、太
 正、告、紀、内、鬼、平、五、景、紀、鞍、馬、海、傳、真、賢、を、敵、齋、齋、經、緯、も、今、宵、悄、地、謀、合
 多、俱、小、這、山、路、潛、入、り、只、那、犬、江、小、猴、子、奴、を、思、ひ、隨、小、敷、果、し、我、這、徒、弟
 堅、削、を、領、て、遠、く、東、走、ら、と、逆、思、へ、堅、削、が、意、見、よ、り、雪、吹、姫、を、搔、攪、い
 櫃、藏、して、走、り、馳、て、這、里、あ、一、霎、時、鵠、存、り、一、程、寃、家、未、し、我、五、虎、の
 勇士、們、も、逢、て、反、く、那、真、虎、小、撞、見、ら、堅、削、が、准、備、の、火、銃、我、六、寸、の、鍊
 杖、も、逆、敷、も、甲、斐、を、た、ま、駈、惱、さ、れ、朽、惜、く、も、俱、小、脚、を、喫、断、せ、と、氣、絶、や
 去、け、ん、後、我、も、あ、る、存、り、け、る、小、原、來、我、意、中、人、も、虎、小、銜、去、ら、る、ん、然、と、も
 小姐、の、惜、む、不、足、と、和、郎、も、猶、太、の、上、の、好、意、我、們、を、肩、引、被、り、早、く、阪、本、赴
 け、悄、地、那、里、の、客、店、を、告、預、置、て、立、か、り、我、親、小、約、莫、是、當、の、秘、事、と

人傳るるも報けよか。路費の與へ餽られる。金子幾許の知らねども。多くもれ寡くま
 色髪分ふして和郎を不取せ。憑むくと請求も。堅削も共侶小堂合して。拵む像
 く。紀三六等。おうち向ひ。喃親方。連今師父のれいど。這頭。真の追隊。蒐らる。既
 是脚る。兎鮮虫も。た。輟る。今。我。們。が。い。ふ。て。免。入。懸。京。師。は。牽。戻。され。て。縛。頸。を
 敷。も。る。と。も。和。王。等。何。の。益。あ。ん。猶。俠。氣。を。り。我。們。を。阪。本。へ。送。り。も。山。割。とい。ふ。と
 た。金。子。の。和。王。の。懐。あ。る。と。名。を。恣。觀。面。る。利。得。い。あ。ら。い。と。い。う。と。詩。復。ま。紀。二
 六。等。冷。笑。ひ。く。鳥。辭。へ。這。惡。僧。等。が。非。道。の。本。性。さ。も。あ。べ。我。豈。香。西。復。六。の。鬼。の
 使。の。走。卒。る。ん。や。実。の。里。見。家。の。使。者。を。り。け。蚤。崎。十。一。郎。照。文。の。伴。當。也。直。塚。紀
 二。六。即。是。へ。曩。の。犬。江。王。の。密。意。あ。ら。う。て。京。子。別。店。小。潜。び。居。り。又。那。姥。雪。代。四
 郎。の。里。見。恩。顧。の。家。臣。な。れ。も。假。ふ。犬。江。の。伴。當。と。稱。做。し。て。其。母。と。共。侶。小。三。條。を
 客。店。に。在。り。今。日。犬。江。王。の。虎。獵。の。事。を。り。今。宵。の。先。途。に。逢。ま。く。欲。さ。ぬ。姥

雪並に我輩志ある者都々七名。情地は這山路。亦來つて。主の逢ふて。若
 が。這。処。よ。脚。を。喪。ふ。と。い。ふ。と。又。那。一。個。の。麗。人。の。布。囊。を。銜。せ。れ。死。て。堂
 内。に。在。り。と。見。出。す。ち。も。置。ま。し。神。某。と。も。先。其。麗。人。を。甦。生。せ。り。事。の。仔細。を
 諮。問。ひ。し。其。麗。人。の。西。陣。を。管。領。左。京。北。の。娘。女。是。則。雪。吹。小。姐。也。若。們。が。竊
 出。ま。し。兎。惡。の。事。の。趣。其。崖。界。を。穿。知。り。姥。雪。の。五。個。の。伴。の。數。兵。を。二。名。從。へ。り。
 雪。吹。小。姐。を。西。陣。を。館。へ。と。送。り。我。の。亦。若。們。今。宵。一。霎。時。命。を。借。り。て。
 做。り。惡。事。を。つ。て。爲。す。又。神。某。の。奇。效。を。り。と。の。い。ふ。と。は。さ。し。ま。も。胡。意
 眞。の。姓。名。を。告。ぐ。德。用。が。親。香。西。の。密。使。と。欺。け。り。若。們。鈍。く。も。謀。ら。ま。す。那。五
 個。の。猛。者。を。助。助。と。て。犬。江。王。を。害。せ。んと。欲。あ。り。さ。口。走。り。爾。出。て。雨。返。の。是。正
 天。罰。の。致。ま。所。修。て。も。思。合。せ。是。我。の。曩。の。左。右。川。の。役。も。蚤。崎。の。伴。當。多。り。能。化。の
 敗。院。に。在。り。時。既。若。們。を。認。る。の。ら。那。時。正。可。面。を。對。し。て。の。い。ふ。と。あ。る。今。亦。夜

一霎時別れん其惡僧多左義右左出沒不測の暴虎也。小心せむあべつ
 ら。這頭の諸木の枯枝ゆらん。通宵焼明して。由断を去めひそこのが野
 兵も點頭を開き既ふらるる。咱毎多和殿を山路の小心緊要なれ。紀
 二六少捨て然やがとたより蕉火を乗りゆ。踵を旋り。北白河のへりて死にけり。
 話分兩頭。その日大江親兵衛の途不紀二六別より。そ儘馬の脚襪を早
 め。然て宿所かから送り。隸される兩個の青侍を。勞ひ返り去あて。却
 宿所の隸若黨。那馬走帆を指示して。這馬の箇様々々と思賜のしを
 告知し。宜く勤り。あとの若黨。則あつて。奴隸毎吩咐。奴隸毎時を程
 さま馬を背門の牽入。秣を飼を。方程親兵衛の徐ゆる。毎小居る坐席か
 ざ坐して。那兩個の管を召く。面談せむ。思ふ折由。管を親兵衛が
 今宵白河山のり登り。虎獵をその事の趣を。早知りて。早くもあふ来ければ。

親兵衛隨即兩個の管。對面しく。御向の管領家の親命。辭ふ由。那
 虎對治の事情を生。口は。管を答て。其義の方。僅有司より。傳へられて
 い。都て。あつて。虎獵。少弓。箭。鏃。砲。の餘も。欲り。多。器械。あつ。何。ま。れ
 準備。あて。取。せ。と。あ。下。知。は。れ。美。り。い。え。仰。せ。さ。せ。あ。い。ひ。と。の。を。親。兵。衛。う。ち
 少。開。も。承。く。い。へ。も。我。山。獵。の。身。單。る。東。西。三。人。の。互。て。要。る。只。良。弓。一
 張。と。獵。箭。前。十。二。條。あ。く。足。れ。り。と。ま。の。餘。の。豆。草。一。囊。と。乾。飯。一。盒。子。を。准。備。し。て
 あり。べ。い。ち。中。の。前。は。聊。好。と。あり。十二條の内。中。十條の。箭。前。の。皆。其。鏃。を。後。去。り。て
 代。る。形。狀。粉。團。の。如。く。木。丸。を。の。く。ま。べ。い。弓。も。角。弓。を。好。と。せ。ん。去。の。美。を。憑。心。と
 ゆる。の。と。い。ふ。管。も。あ。つ。て。遠。く。退。る。約。莫。一。晌。許。か。し。て。兩。個。の。管。を
 復。來。て。親。兵。衛。に。報。る。御。向。に。誂。ひ。ぬ。獵。弓。獵。箭。を。准。備。仕。り。ぬ。と。い。ひ。後
 方。を。さ。る。と。あ。く。と。喚。立。ま。り。則。兩。個。の。隸。若。黨。件。の。弓。箭。矢。箭。まで。執。整。て

きて末ゆを。一個の嘗管受合ふ。卒とて親兵衛が身頃、あつち措けけり。登時親
 兵衛の飲びを陳旁ひく。先其弓と合を扱て素齋して試つ。又其前と見る果、のれと
 獵箭の二條の。其他の十箭の皆鏃と抜去。代る木丸をめてある。孰も是良
 工のなる成をりとかちて。都々意を稱ひ。謝して嘗管を合ふ。東西既の整
 いれ。這暎日。我身單中。馬を那山找む。抑這回の虎獵。我存亡不定
 る。倘不幸。虎の逢む。山を下る日。又那虎の値ふ。力足とて命を
 殞さん。とて各位。云々。一條の。這月屬管領家の恩賜の衣裳、武器
 調度の。其折々の目録を相添。始りて各位。開け。おせ。れ。い。る。あ。ん。
 我命運を思量。今ゆ。用る所。因返。な。ま。く。欲。さ。日。宜。く。あ。ん。
 ぞえ。上。れ。ん。と。願。ふ。と。い。ふ。を。嘗。管。も。う。ち。ま。く。其。義。あ。ら。は。れ。い。ふ。も。君。が。武。藝。の
 五虎も及ぶ。出沒不測の變化。今獵る所。一虎の。今官對治の大功。あ

ら。前の賜。彌増。安房へ齎。ぬ。ん。秋。介。る。時。世。の。常。言。云。故。御。飾。
 錦。も。と。詞。存。く。慰。む。親。兵。衛。頭。を。う。ち。掉。く。否。と。い。我。幸。ひ。虎。を。對。治。の
 功。成。ら。ば。恩。賞。身。の。暇。を。あ。り。く。安。房。へ。還。さ。る。約。束。あ。り。の。餘。千。金。萬
 金の賜。願。ふ。明。日。の。必。件。の。一。義。を。ぞ。え。上。す。那。久。東。西。と。宝。庫。返。す
 納。め。ぬ。今。の。時。分。あ。る。も。多。議。の。要。ら。る。べ。と。い。れ。て。嘗。官。も。強。は。ら
 由。り。今。先。浴。して。夕。饌。お。就。ぬ。ね。と。応。て。馳。退。り。けり。愆。而。親。兵。衛。の。諒
 僕。の。案。内。儘。一。七。先。浴。室。に。赴。け。徐。湯。浴。果。て。お。き。來。ぬ。兩。個。の。若。黨。給
 侍。て。夕。饌。を。差。度。ふ。合。菜。も。毎。上。の。數。を。増。す。且。中。酒。の。礼。あり。嘗。管。も。又
 出。て。末。て。不。皿。を。薦。ぬ。も。既。し。て。御。食。饌。果。か。ら。親。兵。衛。の。飲。び。を。舒。且。退。け。
 身。装。衣。を。敷。正。る。比。皆。是。安。房。より。來。る。衣。裳。也。敢。京。様。の。新。衣。を用。ひ。肌。膚。の
 南。蛮。鍔。の。鏢。衫。と。被。下。同。生。鍔。の。細。細。肌。筋。鍔。打。の。脛。衣。の。紐。向。さ。る。不。締

加信九轉經

三

懷在る那仁字の灵玉の車十五乘を照らすと唐山下和壁の優
 去向幾許の照る。非や神の真助の不知案内。山路入りも敢迷を
 時代四郎們が二條を歇店と辨去ると然るを遅速をめり路異あ
 れ逢らけり然親兵衛の這宵初更の比及白河の山脚より腰鞘やく
 馬の足搔不任と馳てうち登る。白河の里を稍過と右往左往路の九
 折る嶮岨を厭む。冬の夜漸々深く随萬籟聲を。鐵々と流る溪
 水の音よもの。山回る沙石茸々たる荆棘。皆是馬蹄を惱と路去る
 多る。樹間と漏る星光の時々ぬ螢不むを面を拂ふ夜。山風ハ鋭と
 膝九も勝る。或ハ樹枝交る処鞍伏され竹草を太尊れんを。或ハ落葉の積
 処白く音あり。水を渡るも似たり。既五時分に至ると八月山峽を離れて霜の
 厚さを覺え影ハ路谷ハ限あり。夜の深さを知る。向ハ清静者千仞。白雲

横り野波の帽子と疑れ直下其深谷幽静ゆく。葛藤の長る久目路の
 棧と怪ま山又山を巡り来りける。親兵衛一妻時馬を駐め。四下と熟見れば
 地圖の據りて逆知る。是在昔法勝寺の執行俊寛僧都が山荘あり。処
 當時那俊寛們が。後白河太上天皇の奉為。平家を討んと異身同意の
 毎を其山荘に招會々。悄悄地相謀りたと云故事。憑る後人則と名け喚て
 談合谷と云けり。開左もれ右もれ我通宵山巡りて。既小曉天不及。今ま
 で虎小遇ざる。命運茲ハ薄くある。故御へ還る日るらん。然然るや。我両館に
 威福を戴に。姫神擁護の真助。仰ぐ我忠信のや。その依て安を已。或と獨
 語々憶も。嗟嘆不堪。ね。惘然と。浩処ハ風吹や。ぬ。欬前。面。最。立。枯。草。の
 偃。如。く。ま。く。と。戦。と。と。駭。に。馬。の。猛。可。嘶。に。狂。を。親。兵。衛。楚。と。兼。駐。め。て
 物。を。あ。ら。と。矢。能。る。獵。箭。二。條。抽。合。る。左。も。右。角。弓。挾。と。眼。を。配。る。馬。上。の。身

八代傳九轉經

三

文藝堂藏

構其処ともいふぬ。那時速く。猛虎の一聲。凄しく。峯を振。谷の响。突然として。走り出。来る。毛。屬。の。則。別。物。を。も。回。り。も。多。く。那。是。茶。虎。牙。を。鳴。り。爪。を。張。る。眼。の。光。り。人。を。射。て。面。も。掉。り。も。親。兵。衛。が。乗。る。馬。の。後。脚。を。噬。け。し。と。跳。り。菟。を。親。兵。衛。早。く。馬。を。飛。上。り。縦。横。を。身。小。馳。輪。ら。る。馬。上。の。自。由。の。心。は。け。り。馬。の。名。も。負。不。走。帆。の。順。風。を。ゆる。る。小。異。る。も。虎。の。末。尾。も。未。然。不。知。て。駭。怕。れ。初。小。似。ぞ。進。退。奔。走。主。の。隨。意。也。も。持。ち。ま。り。臥。石。より。嶺。岨。の。印。底。葛。藤。敏。茶。系。松。柏。中。の。歩。を。駐。め。跌。る。心。は。虎。の。心。く。焦。燥。ち。哮。り。も。只。音。馳。ま。欲。ま。れ。も。勢。は。便。宜。と。ゆ。ら。け。り。宣。や。元。人。羅。貫。中。が。水。澗。傳。の。心。と。あ。り。虎。の。人。を。馳。入。り。ま。る。小。備。諺。と。ゆ。ら。け。り。而。二。番。及。ぶ。時。は。敢。又。容。易。く。甚。ぞ。聊。其。身。を。退。り。更。小。便。宜。と。現。ふ。者。と。然。ら。ば。今。這。虎。も。親。兵。衛。が。乗。る。馬。を。駢。倒。し。欲。ま。る。と。幾。番。及。び。小。人。馬。の。進。退。至。妙。也。其。便。り。を。ゆ。ら。け。り。一。と。勢。は。挽。も。道。の。ゆ。ら。ぎ。其。頭。小。老。る。赤。松。の。周。圍。十。圍。小。餘。も。あ。り。則。ち。樹。小。身。と。寓。て。

背を高く。頭を低れ。又其便宜を待。程。親。兵。衛。の。相。距。る。と。既。而。て。七。八。回。早。く。も。馬。を。騎。居。り。ま。る。前。刺。の。程。も。あ。り。虎。の。隄。地。頭。を。拾。げ。て。走。菟。と。ま。る。處。を。能。く。彎。固。め。く。鏢。と。射。る。善。射。の。弓。勢。矢。局。錯。を。虎。の。左。の。眼。を。射。ら。ま。り。鏃。あ。ま。り。赤。松。の。幹。四。五。寸。射。入。り。虎。の。一。聲。高。く。哮。り。其。箭。を。抜。を。挿。れ。く。處。を。親。兵。衛。透。さ。し。二。の。箭。を。發。し。て。又。只。虎。の。右。の。眼。を。樹。幹。逼。て。を。串。け。り。任。て。も。虎。と。兩。眼。共。射。ら。れ。て。其。躬。所。堪。ぬ。立。地。不。衰。果。て。才。小。其。尾。を。動。も。の。親。兵。衛。の。是。を。見。て。ゆ。ら。け。り。馬。より。下。立。り。走。り。近。づ。右。の。卷。を。握。固。め。り。虎。の。眉。間。を。二。四。破。と。擣。り。李。廣。の。弓。勢。馮。婦。が。勅。力。兩。手。を。ゆ。ら。け。り。勇。士。は。勝。由。も。あ。り。虎。の。腦。骨。碎。け。皮。脂。り。て。軟。々。と。て。斃。れ。り。

紀二六月。下。小。直。刺。は。逢。ふ。

第百四十四。親。兵。衛。湖。上。の。三。関。を。破。る。

登。時。大。江。親。兵。衛。の。斃。れ。を。得。と。見。て。短。刀。小。挿。り。刀。子。を。拔。出。し。會。直。し。



神箭差かみせんさ
 虎妖こよう
 對治たいぢせし處

八傳九章卷三十九

廿五

文治堂藏



八傳九章卷三十九

文治堂藏

虎の隻耳を研合々。懐の楚と夾め。刀子を鞘に挿入れて。始々後方とるる名馬
 走帆い走の去と。昔處に在り。合笑々。馬の額を拍々云々。這馬
 進退駿足る。我豈輒く成と。曩我老侯の賜り。青海波の傳る
 との劣るま。今宵月の輝に実功を介。小足も。賞ま。と稱々。馳て其邊
 樹下。繫糸。時月を燭。四下と觀る。小白の像。四る。天然石あり。是究
 竟と掖起。馬邊。推居。鞍下る。裏と解。豆草と件の四石。容
 まて馬。齧。且馬柄。杖。右滴を汲て。又只水を喫。我身。別石。尻。拭て
 姑且憩。居る程。左る。樹間。蕉火。秋鬼。燐。秋火。隱々。遙。見。見。見。見。
 親兵衛。心。小。訝。う。う。ち。向。ひ。て。在。り。け。る。既。や。近。づ。き。其。火。光。を。猶。も。く。ん。れ。ん。
 是。則。一。個。の。人。左。も。の。鎧。を。携。へ。右。も。の。蕉。火。を。振。照。と。面。鏡。紀。二。六。宵。一。と。ら。ん。
 親兵衛。早。く。聲。を。被。て。開。直。塚。の。あ。ら。ぬ。と。問。へ。答。て。然。と。云。聲。の。共。れ。走。り。あ。つ。

親兵衛を見。含笑々。あ。大。江。君。恙。ま。ま。や。那。尾。本。虎。の。甚。麻。を。と。問。へ。親。兵。衛。否。別。義。も。や。そ。後。の。を。解。示。ま。あ。徳。の。山路。は。夜。に。犯。と。和。郎。只。一。個。あ。け。の。故。を。あ。ら。ぬ。と。問。復。さ。れ。然。し。御。老。姥。雪。叟。御。教。諭。を。知。る。あ。ら。ぬ。尚。已。と。い。は。る。や。あ。の。故。は。箇。様。と。か。折。代。四。郎。と。商。量。し。て。伴。若。黨。と。奴。隸。の。皆。阪。本。の。方。へ。と。牛。遣。一。代。四。郎。と。紀。三。と。親。兵。五。名。の。王。の。先。途。不。逢。と。這。山路。不。來。ぬ。又。徳。用。堅。削。の。又。雪。吹。姫。の。事。且。其。死。を。救。い。の。又。徳。用。が。謀。一。合。し。と。云。五。虎。の。猛。者。の。首。上。の。尾。毛。を。送。り。報。て。又。い。は。る。姥。雪。叟。の。那。小。姐。と。郎。へ。送。り。返。さん。と。親。兵。三。名。の。従。へ。昇。り。て。西。陣。へ。赴。け。ぬ。小。可。ハ。那。徳。用。堅。削。を。結。紐。す。樹。下。不。敷。糸。に。則。兩。個。の。親。兵。連。守。り。猶。且。那。五。虎。の。冠。做。ま。り。を。早。く。和。君。不。告。ま。欲。し。不。這。身。單。の。危。を。見。え。亦。復。家。來。お。け。る。事。い。は。あ。て。今。あ。逢。ま。り。て。嬉。し。け。れ。那。兩。個。の。悪。僧。の。天。四。訓。像。の。如。く。な。れ。後。易。に。

似れども尚五虎の大敵あり。只小心にて願はれとのを親兵衛とちやうく姥雪
 並和郎の相計ひ今宵の進退極々好那徳用者ぞ奸虐る我の雙言做ま
 のまうれとも我の那奴者ぞ敷まき欲せむ那奴們反々自滅を取り一の宣足天
 誅とのひつべ。矧又五虎の虚名を高くせる正告真賢経緯們が祖敷きすく
 計るとも怕る不足る者るむ先他を見よか。とのひつ違前面る。樹下不枯志を
 紀三六の訝りるる。又蕉火を振照し其樹下立寄る。これ那景來虎る
 べ。金毛白額せある画圖の虎彪似る一隻の猛獸左右の眼と其樹の
 幹へ射串れて斃せきる在り紀三六の光景胆を渡し聲慌く是は甚麼
 ととの不憶も西二歩返巡し又近死る。左さる右さる得と觀く且次は且
 感あると大らさるむ昔外かふる來て跪け恭あ。親兵衛もち向ひて果
 甘哉和君の神箭射て斃され那虎もむ其折の為体然とと思ふ尚

洩り具示し虎の在処を知りしも憶む方僅這地方ゆく。對治の微功奉
 加と思ひの隨射て斃せし併我武藝のよく致を所よあ。正は我兩館の威
 福るべく且姫神の真助るるむ輒々公死事むむ然りと這馬の走帆と名
 られ。政元主の愛物るると今朝も咱もふるをひぬ惚れが押る馬るぬ
 奔蹄神速我意不稱と。虎を近づけりし思ふ矢局を射るとは。其
 折の為体は固様々々。恁々死ると言詳小あ。又い。意不我馬の自由る
 ある亦姫神の真助るるん欬我始より主張あり。那虎の真虎るる。素是巨勢
 金岡が神筆ゆく。胡意其瞳子を點せざりし。御高は政元主の生賢也。其画の券
 主巽風不強て其虎の目子と點せしめけふより。その画虎忽地不脱也。世は恐流
 素至れども獵戸も京家の武士もら。箭鏃砲其甲斐あ。を勞して功るる。思

なる故るん。夙も心つた。我の虎の眼を射る。既ゆく那虎の両眼共。皆比
 深く射られて。その目子を喪ひ。立地不敵。然れども。那箭を抜る。忽地其
 原幅よか。入るとあるべし。と思ふより。箭を抜る。人に見せ。後まの證據。おせ
 欲するもの。徳而今。再思ふ。今番。虎害。不遇ける。諸人。那。其。風と。や。首を
 或の行客。武士。獵戸。多。是。不良人。善人の。其害。ある。一個。これ。あ。世の
 風聲。お。え。は。は。是。靈。虎。の。暴。虐。の。唯。其。人。不。録。る。の。今。休。那。虎。我。を
 見て。敢。退。く。氣。色。を。只。音。小。駢。仆。して。害。せ。んと。の。欲。あ。い。我。も。亦。人。多。欲。我
 生。平。の。ゆ。所。仁。義。忠。恕。の。外。に。は。欠。る。所。尚。有。る。欲。是。も。亦。我。撓。る。忠。心。を
 憐。れ。神。明。佛。陀。の。自。然。の。方。便。の。ゆ。虎。は。猛。威。を。振。い。せ。我。不。射。さ。せ。這。功
 の。故。御。返。さ。せ。ぬ。る。ん。と。悟。れ。疑。ふ。も。我。始。よ。り。徳。を。思。ひ。お。ふ。小
 わ。ね。も。准。備。の。獵。箭。の。二。筋。の。其。餘。の。十。筋。の。鐵。を。垂。来。り。易。る。小。木。丸。を。め。り。

あり。這。意。を。推。て。見。よ。山。幸。あり。虎。を。獵。る。時。我。矢。局。届。り。初。箭。前。二。の
 箭。前。中。ら。非。如。幾。箭。を。射。め。ると。竟。ふ。の。甲。非。文。ある。と。る。け。尚。亦。時。運。不。稱。以。糸
 二。箭。前。も。足。さ。る。と。必。思。ふ。矢。局。を。射。んと。豫。深。念。を。お。れ。又。這。十。餘。の。鐵。を
 抜。去。り。代。る。小。木。丸。を。め。り。せ。も。豫。より。主。張。あり。徳。用。正。告。真。賢。直。道。景。紀。の
 那。身。武。藝。の。未。熟。と。思。ふ。我。を。怨。る。と。り。あ。わ。れ。今。宵。の。山。獵。を
 知。り。狙。撃。す。欲。する。の。是。あ。死。致。さ。る。あ。比。皆。射。く。付。を。懲。ま。す。あ。れ
 ども。那。僧。俗。の。皆。政。元。主。の。恩。顧。の。者。一。人。も。死。不。至。る。必。又。怨。を。送。り。て
 我。君。侯。の。死。為。の。宜。し。と。思。憚。り。敢。殺。さ。ぬ。准。備。を。あ。ら。ふ。果。し。て。他。們。の。徳
 用の。薦。め。よ。り。て。力。を。勸。し。て。我。を。殺。す。欲。する。欺。遮。莫。今。の。曉。天。不。速。不
 い。ま。他。們。は。逢。さ。る。他。們。が。商。量。一。致。せ。果。さ。る。故。小。七。徳。用。と。堅。削。の。果。敢。ま
 虎。害。不。遇。る。と。心。の。秘。密。を。中。心。と。言。詳。解。示。其。紀。二。六。を。読。む。と。毎。小

只感嘆の聲と断ぞ。听果く。吻と息をつら。定ふ和君の神機妙算。人意の
 表ふ出ざる者あり。至妙と稱えんも猶餘あり。既小徳用堅削。死人ふ弁けられ
 患る。且御稽查錯ふと。那五虎の毎に衆心速ふ一決せ。果さざる
 以然るとも天の明るまで。小心せざるべからず。二箇所の関を踏ぬまで。小可御
 伴仕らむ。といふを親兵衛守更。それも要るべし。と推禁め。天うち仰げ
 今ハ明るも程もあらず。我ハ辛崎阪本の新関を疾過り。且路次をいで。一日も早
 く。歸困せむ。欲まらぬ。汝ハあふ天の明るまで。那虎の骸を守り。政元王の人來
 るとわら。我意示し。虎を遁與し。姥雪野兵衛共侶。徐に歸路を赴ね
 我既小虎を對治の幸あれ。政元王更ふ。我を留め。欲まるとも。言を説る。不
 由る。え。姥雪並ふ。汝も。え。料らむ。と。雪吹小姐の窮厄を。も。救ひ給ふ。主僕
 一致の功を。汝も。後より。來ぬるとも。必障りあるべからず。枉く。這議不儘。終と

論廿六紀三六強る。自由あり。沈吟したる頭を拾け。今ハ左も右も仕らむ。今ハ夜
 長死時。候る。物欲。く。り。あ。ひ。け。其。頭。の。准。備。外。小。可。も。も。餓。ひ。敗。堂。の
 携へる。盒子。も。な。れ。今。の。要。求。達。し。かり。と。親。兵。衛。守。更。否。乾。飯。准
 備。あ。れ。も。開。る。萬。一。の。為。ふ。と。無。と。も。餓。る。あ。ら。む。開。を。何。と。と。る。ハ。姫。神。授
 與。の。神。茶。の。只。病。病。即。效。あ。る。と。も。窮。し。と。飢。ふ。甚。む。折。聊。こ。れ。を。腹。ま。ま。
 幾。日。も。敢。餓。む。凍。む。千。里。を。仍。も。自由。あり。と。奔。馬。不。異。る。と。逆。示。教。と。兼。る
 其。妙。の。い。ま。試。む。今。番。の。必。神。茶。の。奇。效。の。憑。人。と。思。へ。我。既。小。御。使。と。果
 後。の。僞。居。宛。敵。地。不。在。る。ふ。似。ら。ま。の。故。日。曩。の。情。地。不。姥。雪。の。意。衷。と。示
 せ。神。茶。と。分。ち。與。へ。申。斐。あ。る。今。宵。料。ら。む。雪。吹。小。姐。の。必。死。を。救。ひ。て。我。與。ふ
 光。り。と。増。す。幸。の。さ。ら。今。より。て。神。茶。の。奇。效。ふ。より。餓。む。凍。む。偽。走。る。不。及
 び。て。神。速。く。亦。可。ら。ま。と。解。諭。廿六。紀。三六。愈。感。服。と。原。來。事。皆。姫。神。の。影。不

立貌不添たかく隈かり守まもるを余あまの所以ゆゑに危あやまりも及および安やすく如意にるまりも
 成なりまりとある其その數かずもな小こ可こもまと和わ君きみの伴とも車くるまればと祈いのるま那な實ま助すけのあり
 けのさてもくとならず鉄てつのなりけ當あた下した親おや兵へい衛ゑ身みを起おこし馬うまの傍かたにまり
 程ほど不ふ紀き二に六ろくと遠とほく絆はを解とく鑣くわを合あはさるまと待まちを親おや兵へい衛ゑのなりけ口くちの
 衝つ馬うまのなりけ又また紀き二に六ろくを喚よび被ひくま直ち塚づか和わ郎らうのなりけ且かつあの居ゐるま姥おば
 雪ゆき更さらも我われ意いを傳つへる後あとより俱とも来こよかと紀き二に六ろくをあるま其そのまりの
 いのぬづや我われと来きる是これの鎧よろいを争い何なんのな推おきまのなといへる親おや兵へい衛ゑ頭かぶを
 掉おろす否いな我われ身みより前まへのな是これは優まさるま案か山さん子しのな鎧よろいのな推おきまのな猶なほ其その身みの
 衛まもりのせら然しからずとならず心こころの鞆たもと寛ひろまるま日本にっぽん魂たま唐から崎さきのな路ぢを投なげく徐あらくと
 馬うまの足あし撥はを找ためり後あと而して大江おほ親おや兵へい衛ゑのな紀き二に六ろくは相あ別わかれる湖こ水すいのな方かた赴おもへる談だん
 講かう谷たに今いま俗しやく談だんよりして南みな辛から崎さき又また唐から崎さきのな不ふ届とどまらず捷あげる徑ぢのなと豫よ聞きける私し徑ぢのな且かつ

其その山さん路ぢの峻たけ岨さるま馬うま蹄ひと疲つかれるとあるま思おもへる胡こ意い遠とほくをあるま針はり伏ふ大だい縣けん
 るまと山さん里りをあるま過すり山さん中ちゆう村むらにまぬる程ほど天あまの將まさ明あきと俗云い山さん中ちゆう越こへる
 るま。這この山さん脚あしの南みなの方かた新あたら関せきのな是これを辛から崎さきのな関せきのな唱なめる南みな辛から崎さきをあるま
 思おもへる余あま阪ひら本ほん大だい津つのな新あたら関せきのな其その間ま遠とほくなは這この山さん関せきのな相あ構かまへる相あ
 共とも輔すけ助すけけると非ひ常じょうと敬い言げんと親兵へい衛ゑのな風かぜ念ねんのな東とう海かい道どうのな大だい津つのな外そと其その
 地ち々々の守まも護ご城じやう主しゆの構かまへる新あたら関せきのな不ふ届とどまらず我われの辛から崎さき阪ひら本ほんのな路ぢを志し
 津つ嶽たけのな方かた取とりて岐き岨さより安あ房ぼうへ還かへるま豫よを思おもひ決きめる回わい話だ休きゆう題だい既すでに
 大だい江かう親おや兵へい衛ゑのな馬うまを早はやめる件けんの関せきのな近ちかづく程ほど天あまの晴はるま明あき更さらくま茂も林りんを
 離はなるま鴉あのな聲こゑ遠とほくな登のぼりて親おや兵へい衛ゑのな関せきのな頭かぶのな則すなはち馬うまより下くだりて
 馬うまを柳やなぎ下した敷しき系けいのな身み單たん門もん内うちにま入いりて守まも屋やのな士し卒そつのな向むかひにやう晚ばん生せいを
 安あ房ぼうのな里り見みのな使し臣しん大だい江かう親おや兵へい衛ゑのな仁に是これ今いま番ばん室しつ町ちやう殿てんのな御ご用よう果くわいのな身みのな暇ひまを

ハハ作カ轉糲三カ

今もその那里に在るや。ゆたか虚実を檢せよ。いそいで遣せし。このみより。あそらら。素より小胆病者なれば。只得其山路に赴く程。僅小三四町なり。俱小樹蔭に立。在る。悄やく小商量するや。那累虎の变化る。後生の武藝不捷。と。伴りたる。輒く射殺さる。兎獸あはれ。意小那大江とやら。計り。関を過。到る時。及く虎に撞見。誰う免る者あらん。所詮あま。時を移して。立久。稟。免でも。是あるを。是必大江とやら。伴誑。小。と報る。小。優。程小大江親兵衛の。倭る。伎倆を知るより。も。其。實。檢。使。の。か。う。未。ぬ。と。約。莫。二時許。已。牌。近。く。り。心。連。り。小。焦。燥。く。門。を。喚。り。催。促。さ。る。小。只。心。な。り。

わ。許。さ。く。も。あ。ら。ざ。れ。心。悄。地。不。疑。ひ。又。関。門。小。立。ま。り。耳。を。傾。け。息。を。龍。く。裏。面。の。形。勢。を。視。ふ。小。馬。の。鞍。措。く。鑢。子。の。响。鐘。の。吊。腿。の。音。響。え。り。原。来。那。里。小。異。変。あり。我。を。捕。人。與。る。歎。と。思。ふ。の。う。毫。も。諜。が。も。柳。下。小。又。退。り。解。捨。馬。小。ち。跨。り。箭。前。を。合。り。弓。を。挾。く。身。構。を。做。を。程。も。あ。ら。は。関。門。の。内。忽。焉。と。戰。鼓。の。音。響。く。門。戸。を。颯。と。ち。啓。く。を。こ。れ。本。関。の。頭。人。老。松。湖。大。丈。惟。一。鳥。草。絨。の。身。甲。小。段。々。筋。の。戰。袍。を。ち。披。り。腰。小。兩。刀。を。跨。へ。桃。花。馬。の。雲。珠。鞍。措。あ。ら。ち。騎。り。小。麻。毛。を。採。り。旗。を。進。せ。夥。兵。一。百。二。三。十。名。を。前。後。左。右。小。從。せ。威。勢。猛。く。見。れ。出。く。四。下。小。响。く。聲。高。や。小。聲。を。れ。大江。親。兵。衛。我。既。小。隊。兵。を。談。講。谷。へ。遣。く。虎。の。虚。実。を。檢。さ。せ。小。那。里。小。相。似。小。山。貓。も。あ。ら。と。る。意。小。爾。伴。誑。を。り。関。を。輒。く。ち。過。く。逃。げ。て。安。房。へ。還。ら。ん。と。欲。し。た。不。疑。い。る。小。是。上。を。欺。は。し。罪。死。を。容。さ。る。懸。危。見。り。あ。を。り。我。今。

八尺專九冊卷二十九

卅二

文叟堂藏

六州傳記卷之五

爾を擗捕りて。將小京師へ献せんとす。阪本大津の両関も既小太の美を通達
あまふ。身と鶴鶴ふ做を術あり。湖水を渉まあらざらせば。一步も脱る路あり。
その美を知らず。速小下馬して。索小被らば。と。果も親兵衛を。靴然と。酒
笑ひて。鳥澁人。惟一慥小聞ね。那虎の直虎あ。素是名画の变化る。酒
家小眼を射られ。原故の画幅小復り。飲その美の。知ねども。那里小留
置。我伴當紀二六あり。非如紀二六も立去り。那里小在。我射小
る。獵箭二條の必。那樹小在る。索見ざる。飲無といへ。向いでも
あれ。是実檢の疎忽。我を外る。甚麼を。我の本性信義を。旨とす。
縦。曾臆望。郷の歸心。矢の如く。も。豈唐山齊の田文。の故。夏小倅ん
と。謀りて。今。這関を踰ん。我既小虎を對治。左京北小約束を。果と今
這地を過る。若們反。狐疑。一個の行客小物。緝捕。三昧を。做さる

る。惟一怒て。塵をり。鞍の前輪を。うち敲ら。ある。捕捕れ。兵毎
緩。と。咽。喘雄の。夥兵。三。名。鉄槍。又。父を。打振。く。掖落。え。競
ひ。蒐。親兵衛。く。ら。小。箭。刺。く。敵。を。擇。ま。射。く。小。其。箭。小。鐵。を。死
の。う。矢。接。亟。の。も。煥。煉。の。あ。る。れ。強。小。志。く。七。八。人。矢。場。小。撞。と。倒。さ。け。り。這
ら。勢。小。辟。易。し。て。找。難。さ。る。勢。の中。へ。親。兵。衛。馬。を。衝。と。乗。入。り。て。敵。の。父。を。掖
る。會。り。中。る。不。儘。し。て。打。散。を。勢。小。向。前。を。け。れ。親。兵。衛。も。ゆ。り。惟。一。も。駭。怕。れ。林
を。馬。小。拍。を。逃。走。れ。去。向。小。出。來。る。一。隊。の。人。馬。是。則。別。人。も。も。阪。本。の。関。に
頭。人。根。古。下。厚。四。郎。鶴。宗。が。隊。兵。一。百。有。餘。を。領。く。惟。一。を。援。ん。て。馬。を。走
り。來。ぬ。人。惟。一。是。小。力。を。引。返。し。揉。合。し。共。侶。小。親。兵。衛。を。擗。捕。ま。欲。ま。れ
も。親。兵。衛。の。物。と。も。せ。馬。を。縦。横。小。馳。而。り。敵。を。左。右。小。討。靡。け。て。活。を。死。に。挑



親兵衛
軍騎
撃の
令を
走ら
し居

大坂の陣

廿四

大坂の陣

大坂の陣

大坂の陣

折忽地阪本の関の方へ猛火高く燃升之湖水の風吹靡く煙這方へ沖りて
 鴿宗之を瞻仰す。原来裏伐の者ありて火を放ちるらん兵毎半分走りかたり。疾
 滅止と喚れし兩隊の親兵驚愕慌々相擇せる者も多。敵の多少と料の難く阪
 本へ還るるも大津を投て逃走す。鴿宗も惟一も逃る隊兵誘引して敗れし一
 路逃しける勢い已に余りなれば親兵衛の逃るを迂り那里までもとや程大
 津の関の頭人より大杖意鬼入道稔物も亦隊兵二百有餘を投て力を惟
 一鴿宗も勅見與馬を早めり。出て來りける其甲斐も多。逃る身方小入群打て
 一柱も柱はせし只一團不頼と謀る大津を投て退走るを親兵衛の敵の息も
 類れ難立々々趕まれば大津の関破れけり畢竟大江親兵衛が二関を
 うち破りし後の話説甚麼と云。開ら又下回不解分るを聴ぬか。
 南總里見八代傳第九輯卷之二十九終

南總里見八代傳第九輯卷之二十九

東都 曲亭主人編次

第四十八回 奸詐之悔 執權還を送

再説。この日大江親兵衛が辛崎阪本兩関の頭人花松湖太夫惟一根古下厚四郎
 鴿宗等兩隊の士卒二百十數名と姑且挑戦し折猛可阪本の関の方へ火敵起す。
 煙天を沖りし。鴿宗も隊の親兵衛も自家裏伐の者ありて火を放ちるらん兵も
 慌て敗れ走るふより。惟一も又後來りける。大杖入道稔物も惣頼もるし。這火の
 那関の士卒も裏伐の者ありて又失く自焼るるふあり。この事も亦合量の
 故あり。那親兵衛が伴若黨と奴隸毎六七名ハ昨日姥雪代四郎が指揮に従ひ
 猛火三條を客店を直去りし。辛崎阪本も過り。関の那方へ親兵衛の來ぬるを

思ひ者も有金重であらざる詳なき文も必先後あり言一朝あふりける本末よく照し見よ
 同話休題却説大江親兵衛の三箇の國の緝捕の士卒の二箇不倣りて敗れ走を趕り
 其投を路をぬ天津の國に來りければ本國に存する士卒の數馬に慌走り出で來り身方を
 引入れて門戸を閉んと欲する人受けに相逼りて左右より門扇の合を疾入るるやと喚ぶ
 程親兵衛の趕續は馬を國門に馳入れける柱を敵を各入りて打拂ひ退げし那方門
 も衝とぬ九津津の方を赴くと大杖入道見ゆる堪を思ふ聲を震立て噫を斬る
 る兵無哉三隊の士卒がも束ねて一個の敵と林をぬる孰の後難と見ん志あらん者
 我續けと鎗拵々馬を拍れ追蒐れ惟一鶴宗のハハハ三隊の親兵衛今這一句ハ
 氣とぬ競ふ百十數名噓て近人馬の足响既ハ程好倣り時親兵衛ハ馬の
 鑢面を乗旋らしち向ひて若門白人先度不憚りや恥と思ひ皆蒐りぬらるるも敢
 意鬼の檢物鶴宗惟一相並々鎗を拵り親兵衛を刺んと俱々競ふ折る後方ハ馳

來る馬蹄の音ありやれ兵毎疎忽るせと大江生も姑且止れ相公みづから來りしや
 在戦ふへぐと喚り林の近習の聲ハ檢物惟一鶴宗の徒ハ三隊の親兵衛も吐
 嗟とぬ驚き齊一急不見がれ果して是別人をぞ京都の管領左京大夫
 源政元ハ政元の目れ打扮の頭ハ菓子鳥帽子を戴て純緑の蛇龍の赤狄錦
 綉の狩衣ハ精好の奴袴を張を綾衣を上服と膝膊の白小袖を下襲ふく身甲
 肱衣縫綴を撰領ハ黄金製衣の大刀ハ阜皮の尻鞆單を腰佩く圈子青の太
 遲ハ馬ハ韓鞍措して優はら跨り此糸の漆鞆を左ハ不操る馭法正しく馬の足
 搔を早めて來ぬ前後左右ハ從ハ伴當十餘名俱ハ皆是山鶴衣裳あり各ハ
 並前を推考らる他の士卒幾十名歎後れらけ相續るを只燒雪代四郎直塚紀三
 火家の親兵五名と阪本より來ぬ漕地喜勘太門大江の伴當七名と政元ハ從
 齊一越ハ聚合ける今這事の光景ハ三箇の頭人親兵衛共ハ驚きハ怖る者も左

友早く辟き果を稔物惟一鶴宗ハ馬より控と蜚下り。地上に跪坐し相迎に親兵衛も馬を駐て向容る色多く扣えり。當下政元馬を駐め。信と三関の頭人ふらち向て若們を理不棄大江親兵衛を搦捕んと。及て三関を破られる。最鳥嶺と叱懲せ。老松惟一を多く。頭を拾け。稟を奉り。相公上御坐を。小可毎事と好ま追捕及びみ。親兵衛射て殺せ。云虎の虎実を見人與人を談議谷遣せ。其證迹を故不遂。抑留の及及び。親兵衛敢美伏せ。及て狼藉を。已と。親兵衛を。搦捕する。折阪本大津の両頭人。鶴宗稔物。加勢と。隊兵を領て。来り。程。阪本の関。在。士卒。裏伐の者。あけ。火を放ち。敵。入。刺。龍。衣。あ。け。れ。之。隊。の。士卒。驚。慌。と。摠。敗。走。る。み。以。と。啣。言。か。き。く。陳。ま。れ。大。杖。稔。物。根。古。下。鶴。宗。の。や。ゆ。く。ふ。春。蠶。は。出。て。目。今。湖。大。夫。が。稟。上。り。と。御。前。其。告。あ。け。け。加。勢。は。り。ひ。ひ。那。火。の。故。合。期。せ。不。覺。の。脚。外。に。集。り。あ。れ。る。罪。を。免。る。み。路。を。あ。り。

始より親兵衛を射て落し。斬り殺さ。か。く。も。わ。せ。い。へ。も。生。拘。め。る。故。不。覺。に。た。る。後。悔。の。畏。れ。入。り。い。の。せ。も。敢。て。政。元。の。堪。忍。聲。を。奇。ま。す。這。相。似。う。白。徒。を。其。非。飾。の。命。鳥。嶺。の。時。方。大。江。親。兵。衛。射。て。斃。る。那。虎。の。我。も。山。路。便。宜。を。り。今。朝。目。撃。せ。り。一。惟。一。遣。せ。と。云。実。檢。の。士卒。何。を。見。る。や。开。か。不。有。と。い。ふ。と。も。同。も。實。に。親。兵。衛。を。搦。捕。す。欲。せ。り。寔。は。沙。汰。の。涯。也。又。鶴。宗。稔。物。陳。言。す。も。謂。ふ。那。阪。本。の。守。屋。の。火。災。の。野。心。の。者。の。自。焚。け。る。を。失。せ。り。は。扶。け。い。ま。詳。る。な。ら。も。其。折。那。里。に。抑。留。せ。れ。地方。の。社。客。行。客。們。が。炯。不。起。れ。逃。迷。ひ。幸。崎。を。投。近。く。來。り。若。們。疑。心。暗。鬼。を。生。じ。龍。衣。來。り。敵。を。思。ひ。後。是。も。亦。沙。汰。の。涯。と。い。ふ。の。も。親。兵。衛。伴。當。七。名。昨。日。歇。宿。と。言。ふ。と。阪。本。の。関。の。這。方。在。り。主。の。厄。難。と。知。り。い。の。先。途。不。遇。と。い。ふ。走。り。方。僅。く。よ。來。て。我。不。信。と。告。る。と。又。那。莊。客。の。客。の。訴。も。と。具。不。知。れ。有。徳。は。是。若。們。其。罪。既。分。明。を。又。異。日。の。脚。沙。汰。

在能立ねと叱れて唯一と鶴宗の唯々とその上心多々各親兵を従へ塩尻近山塩の
 塩の辛崎阪本の関路を投て退る中丈入道松物八生三勇角折れて撞木に似言
 鉦鼓の虫の若く負ふ露の身奉加帳の如き祈り佛を憑り果敢をふ心の鬼に我と
 蓋て丹塗のつらかり世を不嫌しふ事ゆゑを依此下退れ親兵共侶主の後方
 聚合同伴の士卒の不足を權且補ひ登時政元又聊馬を找め馳て関の下
 兵親兵衛も亦持る又及を後方托地と投棄て下馬と找近は程小丈杖松物
 是を見て親兵を守屋へ走らせ則て登見と草烟を主客の與儲るを政元急推
 禁め今日送仍の私事豈貴賤を分えや俱小登見を用ふとを親兵衛敢
 甚連の固辭を找りて政元強て饒り親兵衛只得矮登を乞得く才小尻城
 檄けり徳と主客傾蓋の野席中定りて親者悄地不相稱くせり之を榮榮
 有徳一程の政元に従ひ來りて燒雪代四郎直塚紀二六並五個の親兵衛七個の伴

當澤地喜助大們の皆遠く身を起あて走り親兵衛の後方小造りて或馬の
 鑓を合の天矢鎗と建甲曹樞の杖と解半と齊整とて跪坐り徳而政元は完
 女小親兵衛うち向ひ類稀多安房の石臣約束違はぬ那虎を對治の事形
 我既小目撃もあれその飲びいんと追つて小末ぬん介も小之関の頭人等勸不親疑
 去て擲捕も欲する其罪孰も輕らけり異日謝断見の我面を顧て權且用捨
 甘んかとのこれ親兵衛登見を放て謹と兼て答る分小過る御懇命面目これ優優
 工事既不知せある上稟解及び小人談講合の頭を那虎を射と擊ち折尋來
 ける伴當紀二六を那里に留り守り且小人今朝早夫小身單辛崎の関小造り那関
 符とて東路過らむ欲する豫證據の與中虎の隻耳と研合を懐中てゆいふ
 送し見あつた日小実檢使を請て遣せ其人よも見がり欲及て我言を伴とて
 再問れ益可阪本大津多西関令小謀合多擲捕も甘れ久已とて絶不擊

八木傳九郎卷三

文叟堂藏

散して逃るを赶ぐ本津の園を過りてあまき来ぬれども一個の敵も敢害せざるは實に
 と矢腹不送と一條の筋を抜きて其本末を示してさう小人逆用意あり獲前を
 才か二條のも其他の都てかゝの如く皆其鏃を抜棄して代る木丸をりてせし緝捕の
 士卒を射れども懲りなき中死に至るも又那又及を奪會て逆さす勢も又掃すの
 か又只那身を馳傷らし備へる中傷見あつ同士敵もあつ然令も己が刃傷ら
 くるは然我知る所ゆひは言定もせり。自他の好歹其用心の同どもぬをいひて
 是か。と言委まき鮮諦と政元ゆり感嘆して今初ぬ和郎の仁心帝其武勇の
 千萬夫不捷れるのまき智計も亦百陳平の勝るるといひて死事の便宜いふる
 和郎の伴當姥雪們が忠信徳義も亦必り。言長とも听ねが。昨宵の禍事
 多くわの性目より暴虎の防衛とく。河原の勤役を課せる種子嶋中大紀内鬼
 平五鞍馬海徳を敵齋齋經緯ハ澄月香車小師弟の怨もよめて鬼平五經緯の

矢場小敷も果され中太海傳師弟と香車小師弟の勤役の野兵們が逆心の鏃
 砲小敷を殺されて甦生の自他の弟子二名も過も野兵們が奸虐も亦立地不露覺れ
 あり威召捕せし牢獄に在り事の異変も加多。昨宵九鼓の時候より我
 女兒雪吹姫の臥房に在りぞと云訴あり。其臥房の形迹を檢せし枕添小傳
 ぞと云兩個の女房の絞られ。次の間小死あり且ぬ比より暴虎調伏の樂後堂の
 法壇に在りて堅削の疾病あり。昨日宿所小辭し去りて徳用の那里に在り
 る。と云えり疑ひ他も在り遠くゆり追鬼よと猛小士卒と部して四境半
 遣さるる我心も不安り。雪吹の我養音の女兒也。実今出川殿 垂相義親の御
 胤も不陸落の兎僧徳用も邪淫の辱小遇し必我上るべと思ひいれ落着
 るも。あまき。の。を。あ。の。ん。の。我。み。か。ら。立。出。て。求。獵。る。不。如。と。尋。思。を。あ。又。遲。擬。せ。近
 臣波々伯部十郎等皆是夜勤の士卒との。甲乙と相從へ。曉りておれも投て去

八木傳九郎卷三

文叟堂藏



ノノ集九陣巻三十一

ノノ集九陣巻三十一



大津の驛
 稍盡處
 親兵衛
 政宗
 別

ノノ集九陣巻三十一

ノノ集九陣巻三十一

向を定め、漫の三條大橋の邊まで來りける時、和郎の伴當、姥雪代四郎與保を、雪吹姫の死を救ふ、載て邸へ送り來ぬ、逢ひけり。あまの、徳用堅削、虎狼野心の事の顛末、且他名の姫を竊出して、白川山を、敗堂、媳ひ折那虎小撞見と、徳用の隻腕、堅削、隻脚を、喚れ、仆とて在り。雪吹姫も氣絶して、又活るもあらず。和郎の伴當の内、中、重なる、姥雪直塚、們六七名、和郎の先途、小遇んと、昨日、歇宿を、立去り、白川山、夜を、深し、尋も、逢む、憶さ、那敗堂の頭、小來り、量、代四郎が、和郎を受、うと云、神某、ど、姫の死を、起し、又直塚、紀二六、もの、其、本、ど、り、個の悪僧、小の、い、を、謀りて、他、日、屈、詭詐、毒惡の、趣を、知、を、云、後の、這一椿、事、敗堂、留置れ、兩個の伴當、が、怒、と、生、告、り、我、も、亦、知、る、と、云、る、抑、徳用、堅削、和郎、が、舊、怨、あ、る、を、辱、詭、言、を、我、一切、信、容、れ、ど、然、り、けれ、も、其、言、の、皆、伴、當、の、思、ひ、つ、和郎、を、疑、ひ、小、量、果、結

城遣、る、那、兩、三、個、の、間、謀、見、が、昨日、曛、氏、自、か、り、來、り、報、一、那、地、の、實、説、を、思、ふ、徳用、が、言、巧、る、密、訴、の、都、々、談、を、開、を、和郎、が、以、解、ま、と、り、合、せ、る、と、然、る、と、我、淺、慮、る、徳用、の、俗、縁、深、に、始、母、子、れ、が、萬、更、不、就、い、と、憑、く、思、ひ、る、惑、ひ、醒、々、憎、さ、も、百、倍、明、日、の、那、奴、が、罪、を、糾、て、乞、と、懲、え、ん、と、思、ひ、の、い、ま、そ、の、及、び、け、其、夜、の、中、が、又、幾、層、の、惡、事、を、做、る、真、四、訓、觀、面、同、惡、の、徒、弟、堅、削、と、俱、平、體、不、具、ふ、り、て、尚、死、が、一、の、儆、戒、を、世、に、垂、ぬ、神、慮、佛、意、の、奇、事、小、や、あ、む、む、と、此、は、是、我、行、心、を、和郎、が、勸、解、る、急、状、の、要、畧、且、か、の、如、し、却、昨、宵、我、の、中、途、あ、く、姥、雪、代、四、郎、が、逢、ひ、時、隨、即、伴、の、老、當、不、雪、吹、姫、を、受、合、さ、る、と、士、卒、と、分、ち、冊、け、と、邸、へ、遣、り、猶、又、思、ふ、れ、が、路、疾、走、る、伴、の、近、習、小、分、付、と、量、小、虎、の、脱、去、を、那、翁、軸、を、相、と、共、疾、の、て、來、よ、と、い、そ、が、と、又、西、陣、へ、走、り、せ、け、の、徳、而、我、身、の、自、餘、の、伴、當、を、從、へ、代、四、郎、等、と、御、導、ふ、と、那、白、川、山、を、敗、堂、小、來、て、見、る、果

徳用堅削の隻も隻脚を傷り喪れ。結紐られ樹下の居り并をもち守る代
 四郎等の火家の伴當二名在り。這餘の伴當直塚紀二六が箇様々々の算計を
 けく。件の兩悪僧の奸虐を竊盜の顛末を招了致せりと云且紀二六を和郎の上を
 陪の事の趣を告す欲しく。索して山路を入りぬ其の崖を略す告す我則伴の
 士卒七八名を若し這徳用堅削を西陣へ吊りて有司告す牢獄に敷きて
 せら分付れ其者則其頭藤を找合り早編の壞籠造て躬て
 兩個の悪僧を載し四個の奴隷を昇せて西陣へ領り有悠程我西陣を
 主僕の盒子を偏提の酒前茶を餽る士卒五六名を索ひてお來しけれ我
 件の敗堂を偏提を啓す夜寒と凌冷且姥雪代四郎們都と和郎の伴當の當
 晩功あり酒を合せる我伴當の盒子を受合て是を喫代
 四郎と其火家の五個の準備の盒子を開きて夜食を登時我又

思ふ御向徳用の謀一合れ仁を相敵まと正生景景紀真賢經
 緯の直道同士敷せて反す其隊の親兵衛の為小斬る親兵衛が上取りて
 どの後易けれ我偶々來る親兵衛が虎を對治る不口を見ゆ
 せか去入の送憾非如天の明る山又山小つ入ら逢人死を思ふ
 小代四郎們我伴當も宣示る遂敗堂を立出て馬を山中越る我找
 程小白川村中天の明け浩処前向より來ぬ里人路傍上跪我伴當告
 相公の西陣を管領様と見せる景上死一椿事侍
 方僅談講谷の邊中大江殿の伴當直塚紀二六と喚做若當黒不憑き
 其所以箇様々々悠々ひまの曉天小親兵衛が那景茶虎を那里射す
 敵死と云事の光景を隨小告訴又宣示す那直塚のいれハ汝早く西陣の
 御館への告を告なれ大江主咱們を留め虎の骸を守らぬ主と既小歸東

急に敢天の明るを待む平崎のくまに赴きぬ。其の送るも上よりいれり。幸の上
 然る感とて走りくまを來ぬ程折も又よく相公様の出まけり。逢逢あり。幸の上
 幸の上とてさうちやうく代四郎門が歎け涯のりあぐ。我も亦怡悦不堪。疾談講谷
 赴き。驚れ虎を見ま。思ひ先伴の青侍二名を召く。若們的舊路を走りか。昨
 宵我中途より伴の近習を呼返して那菊軸をもく來よと分付る。其某甲の來ぬ
 亦逢に俱して談講谷へ參る。とありぬ。いそぎ遣。又伴侍る近習の二腸波
 波伯部十郎真忠を召く。爾の這白川村の莊客とす。召聚合。談講谷へ領て
 參れ我其夫役の虎の骸を早く京師へ齎して兩御所。室町。憲賢の歎け。且
 浴内浴外も貴賤を見せ。後々まの話柄も做す。疾速せよと分付て殘し留
 る。我亦連り馬を早む。代四郎自他の伴當も心男とやま。後々其若の
 り我伴當の寔は羊介と雪吹姫の隸遣。其後亦路次中。所要を謀り。

既にして我の亦件の里人を御道守や。朝日山峽より昇り。時候談講谷へ來り。

燒雪代四郎先走り。則紀二六より生る雪吹姫の歸館の。我早く來て虎を
 檢る事。便宜なる。紀二六を開をら。雪吹姫の相迎へ。馳て我馬前を見
 參。登時我馬より下て紀二六訴を聞き。和郎の射法の今古類稀なる。其智
 慧も亦當意即妙。虎の兩眼を射れ。故矢場不整れ。云我其言を听果て。隨即
 件の虎を檢まる。其小大犢等。一开が左右の眼を。鏡膳と赤松の
 幹。緘れ。仰反在り。且其頭を注める。如し和郎の撲れ。痕る。但其隻耳なる
 去。我訝り。又その美を。紀二六則。悠々と答ふ。因て。筆て。知りぬ。开も亦人の及
 道所。和郎の遠慮の深に。感ず。我の。代四郎伴當都て虎を。親つ。又其言を
 側。愕然とて。敬驚く。感嘆せ。る。而紀二六。火家の伴當の。赤
 なる。盒子と一箇受令て。樹下へ。退く。我急召返さ。他功を。譽言且。芳ひ。持

甘偏提酒餘の尚餘あるを令るごとく夫役毎の束ねを族一に既中く已牌左
 側不波々伯部十郎真忠の白川村多莊客と三十名許俱して来り又昨宵所要成
 分付く途より郎へ還り近習某甲の那菊軸を携り白川村より迎の爲に走
 るる青侍某乙と俱来り他ごとく遅りい我去向を尋らり六索托ちと
 ろふ至り虎を視る件の近習青侍白川村多夫役們もうち教馬坊和郎の射
 藝を感し稱て喋々ち登時我又波々伯部真忠不課虎の眼を射て串れ
 二條の筋を抜き其筋の松の幹係り入ると極て深ければ輒に脱ぎし真忠
 人敏捷に筋力ある壯士なれば恥くや思ひけ矢筈を左右に合緊して隻脚を虎の匈
 前へ踏掛け身を反りく曳々と曳く程と丁と抜抜く卻金と打れて那身も其二
 條の筋を持き仰さぬ背を撲して撞と滾べ大家咄と笑ひけ當下夫役の莊客
 五六名列卒繩を解紮ね杖寄り虎の四足を一絡め合せて拮結んと来り程怪む

件の虎の忽馬とくわくぞ作りぬ壁煙の滅る如く往方も知ぬ奇異不可思議の
 是のふあふとして近習が持る菊軸の相宛絹を裂衣如に其音腕响けん憶む
 箱を令る落共衆人教馬に且怪てあなな何ぞ麻へ糸とるふ呆れて俱に忙然と姑且
 きて我思ふ那虎の故画の变化は初眼の點ぞ故の靈備とて出雲茶をれも既も兩
 眼と射串れて瞳子と喪いさらければ其靈鎮りくる心も其形像尚も儘めて
 あつらひ勇士の弓勢神に通て妖ふ勝つ徳われむむ是成就も大江仁九夫あふ
 この奇の奇を信と前知せされも我宿念あるごとく昨宵中途より近習を返して那
 菊軸を令る来せり萬一の時疑ひ解とあらん欲とくるれと思ふ心をちて衆人不宣
 示し我らとの違ふや否疾を菊軸を用ひて見よとふ近習のあふるて菊軸を懸て
 其頭を樹の枝に掛けし主僕齊一ら見る果して虎の画幅の復りて形状初異なる
 るとて其眼も亦初の下白眼をして瞳子も亦和郎が那時斫合を喪と云佳又

耳の嚮ふ見し時いさろく虎の画幅復る不及びてそり一耳も亦れわりの其刃の迹
 多し一雙耳の刀痕あり聊連續せざる似らざる至り愈悟りぬ和郎が懐かし
 虎の隻耳のあざざり一は定所所以あり那隻耳の逸早く南軸の復りしを刑見
 誰の知るも後其全體の入り及び連續あける證據は隻耳の刀痕あり亦是大
 奇とのつべ一是をえける自他の伴當代四郎紀二六真忠若士卒夫役小至るまで噫
 とろろ感嘆の聲を合し散動けり登時我と思ふ約莫這大奇大幸の皆是
 和郎の武徳や上下安堵の思ひを做す小開が儘東へ遣り愈我を誣ま居者あ
 る恩怨賞罰を差別の誣を免れさるべし非如大江の関を過り東へ馬を找るも
 後れ伴當あつたれいも遠くゆく我追蒐く是等の奇異を告もあべ功不答
 る送仍の美を果さむと既小尋思をあり久要るなり一莊客も則身の暇成
 取せし白川村へかへ去らせり近習の件を南軸を持せり代四郎並自他の士卒と相
 從へり馬を早めり山中村まで來ぬ程に土民歎兩三名路傍小立在り語り譚ふ言の
 耳へ入りし伴の近習を問せし自今辛崎阪本大津の関今も一個の三男少
 年を搦捕んとす三隊の士卒と合して閉戦及折間阪本の守屋失火あり敵の
 野為と思ひけん件の緝捕の士卒の鬼胎を抱き棧を返り孤敵を破られて
 大津のく走り云兵火の煙見えは是れ敬馬の我のるる代四郎紀二六開が火家の
 伴當も胸安くも共侶の我が馬先も山中越より湖水の方へ蒼蒼直下走下り
 我も亦馬を走せり早く辛崎よ來て見れば阪本の兵火の煙を滅せし因て士卒を
 分ちて那火を滅せし遺る其里より我相從ひり代四郎と我伴當波々伯部
 十郎真忠若八個の近習これありて這方馬を輩り瞬息間小軒のり來つ三
 関の頭人等を叱り林示ゆ和郎の對面の本意を遂し抑和郎が大功は是前未聞の奇
 事なれ萬金をりて賞するも尚足れりとも知や又和郎の伴當姥雪代四郎直

事なれ萬金をりて賞するも尚足れりとも知や又和郎の伴當姥雪代四郎直
 事なれ萬金をりて賞するも尚足れりとも知や又和郎の伴當姥雪代四郎直
 事なれ萬金をりて賞するも尚足れりとも知や又和郎の伴當姥雪代四郎直
 事なれ萬金をりて賞するも尚足れりとも知や又和郎の伴當姥雪代四郎直
 事なれ萬金をりて賞するも尚足れりとも知や又和郎の伴當姥雪代四郎直

つらうり。雪吹姫の死を救ふ。悪僧徳用堅削。竊盜奸虐の趣を造る。招了
 致さる。這大功も萬々金皆我。その良平史。賞禄を數ふ當れも。和郎が
 本性の清白も。我屢取せる。名刀衣裳珍器も。其時毎。當り當り。敢
 一箇も用ひ。別な位で。當り當り。志を舒して。我を返せ。これより。當り當り。訴ある
 必受く。這義の異日。將軍家。小少え上。御制度。依ん既。相別れて。各天の一方
 心操の。同輩對坐の。笑み因る。是。是。萬一の。褒賞。先那。勅軸を。展覧せよ。と。お近
 習。あ。件。の。勅軸。を。相。より。中。て。用。ひ。卒。と。う。ち。向。る。を。親。兵。衛。の。唯。々。と。う。り。お。言
 兼。あ。る。画。を。観。る。不。現。其。虎。の。耳。不。刀。痕。あり。名。画。の。彩。筆。活。る。像。く。白。眼。ふ。と。瞳
 子。る。け。れ。猛。虎。の。形。勢。正。是。是。靈。魂。あり。け。れ。も。偶。然。然。る。を。思。へ。口。願。ふ。感。嘆。ま。あ。の。時

政元の後方侍り。大杖入道。その隊の野兵。件の奇談。と。靈画の證據。を。見
 け。聞。け。駭。然。感。て。勅。惟。一。と。援。けて。大江。を。搦。捕。ま。欲。あ。疎。忽。を。今。ま。羞。て
 悔。く。思。ひ。け。る。徳。而。近。習。の。件。の。勅。軸。を。巻。け。り。箱。不。藏。れ。親。兵。衛。の。恭。く。政
 元。も。朝。ひ。最。詳。る。御。示。談。を。君。が。御。好。意。の。過。分。を。兼。り。且。靈。虎。の。絹。入
 見。せ。ぬ。一。期。の。欽。ひ。何。事。欽。是。不。優。ま。然。れ。も。虎。を。對。治。の。一。椿。事。ハ。則
 臣。等。が。所。為。ホ。て。臣。等。が。功。あり。の。故。向。最。も。畏。れ。今。上。皇。帝。並。將。軍。家。の。御。聖
 徳。と。仁。義。忠。信。を。宗。と。せ。る。寡。君。君。義。実。義。成。父。子。の。餘。澤。を。且。名。馬。走。帆。の。進。退。如
 意。の。幫助。の。ゆ。ひ。け。ひ。然。る。を。御。賞。美。の。當。り。也。但。姥。雪。代。四。郎。直。塚。紀。二
 六。們。が。不。用。意。の。姫。上。の。御。窮。厄。を。極。ひ。ま。り。一。掙。に。仁。が。光。を。増。え。く。や。ひ。聊。其。功
 あり。似。ら。那。代。四。郎。與。保。の。大。山。道。節。が。舊。僕。る。り。小。宮。義。不。も。大。功。あり。の。由。て。瀧。田。の。老
 侯。執。立。く。當。君。不。諫。め。ひ。六。則。仁。と。同。藩。藩。の。士。の。い。へ。も。仁。が。與。傳。母。に。似。る。因。あり

者の小の情の地の這の回の後の見しては俱に京師へ参りて又は直塚紀二六ちの秋安房歸
さるの副使蛭崎十一郎照文小從事せる若堂でひひと十一郎が別の速ひく仁の上上
心許りて他を京師に留在せりて代四郎の詞敵ありりのもひひけ余る小件の老
壯二八景義小之河の奇子崎中海賊の肆撃あり時仁と照文と相枝けて賊徒と對治の
功ありし昨宵又は姫上の死與ふ亦は做ますのひひ仁小立も優りぬる百目小をひるとと
公を政元ち所へ膝拍鳴し感嘆多く開け亦は思ひなげされとの備を多くなすては之件の
兩從者とも一個の近習心とも遠く身を起して代四郎と紀二六君
命を德へ推立して卒と連りし找ますと政元も招けとては代四郎和老里見の
家臣也這回親兵衛が上京の後見でありり又は紀二六ち蛭崎十一郎の上目とも
よ親兵衛の幫助ありり心操さ素生さる小筆て夢知て其人柄を思以る小奇
子の本事ありり二度の大功宣定りあり異日將軍家小立上る御感大なる先

あの上目とあるゆゑと町寧尉に代四郎阿容の氣色を紀二六と共召唯々との
 言葉にして舊處へ退けり當下親兵衛の立替り找寄り為小找を京まき誠小相合
 御懇命他も上及せぬ故郷へ飾錦小優れり猶の上願ひ一日早く安房
 へ退りて使价の役も果さすま放ち還さぬかと請れて政元嗟嘆堪堪左ても右も餘
 波の竭ねど又留る由もあるとの腰錦の裏の緒を緩め合せてや親兵衛これ
 是官府の急遽脚小用ひる驛路の鈴即是我毎外も當日は必是を腰佩て
 火急の公用小充るの然五畿七道小配當りて其數才小十二あり一箇も是を私小用ひ
 かり至寶されども今不用意小して和郎と送れ餞別小做さる東西も則これと和郎
 借さる東海道去伊勢小北自あり尾張小斯波あり駿河小今川甲斐武田伊豆小北條
 相武小上杉も孰も其封疆小新圖を置きと敵國の備とまの故小諸國の使者他
 御の行客往還不便の時えも遮莫の鈴を佩る者則詭使小准せざるあせも那

関令も抑留せざる恒例とて和郎是を去向る其地の関令們示さる路次の
 凝滞あるべしと解論し取られ親兵衛の遠く杖寄り受戴せざる思ひ
 御賜那厨公指南車勝る便宜なる鉄の百言千言も盡すはべし今
 事も時程の及ばず別れ身らん卒御馬の乗らばと薦め此下退せし
 身の政元の尚発見を放さば親兵衛衛中既のいけり今日の送行の賈賤の差
 別る和郎も俱の馬に乗らば我も沿騎らんと強て立気色きけれ親兵衛始困
 果て今も御立息に従ひまらん這籠遇お就て高願一矢の三國の頭人の失策の虎
 実檢せられ其使者の等閑せん恩免をまほしけれを政元も其後既ある
 たり卒共侶ふと身を起して牽寄り馬を跨れ親兵衛の些退せ徐馬に乗らば
 當下代四郎紀三六も親兵衛當齊々と一霎時政元も自送る波々伯部十郎代受て
 主の後方に従ふ西と東へ別れ路最大栄の勇ま功を感せぬ者なるなりけり

第四百九回

東山の銀閣小老和尚驕君を醒せ

大目大江親兵衛が天津の関の真邊を管領政元小辭一別亭午過る時
 走り今石部小遠々ぬ雁南山麓路より高野林の名小負ふ大野の六地藏
 堂の頭小老より登時親兵衛馬を駐りて左右小立る代四郎と紀三六も小
 老我へもあれ各ハ昨通宵山路の峻岨を歴り這里まで来ければ然し其の疲勞
 今宵の這頭小入馬の脚を休め逆旅の準備と做さんと小代四郎紀三六も
 隨即親兵衛若黨と相謀り又幾町も程小白屋まで中
 廣かる客店ありけり其庭門より觀入る馬を敷糸ぐ宛処もあれ則這里宿を

投め主僕奥多。坐席二間を借得居。奴隷の名馬走帆と昔門を既懸牽
入れて。豆草を飼ふ程。小日の暮けり。徳而主僕迭代。浴一俱。夕饌を果せ。親兵
衛八代四郎と紀三と五個の親兵七個の伴當。身邊へ招集令。久く京師の
在り程の心疲れを向慰め。且昨宵の掙を賞まる。代四郎並親兵伴當們を
昨宵親兵衛と談講谷中。虎と對治の為。及那緝捕の関令。多と敷走
らける事の顛末。も知らる。御前管領左京北政の親兵衛と回谷。其
其崖略と被され。側聞をされ。あ小造り。猶其事の詳。を被知り。い
奇特を感しける。開中。小伴當們。紀二六。昨日。京師。不在。事情を誂
く思ひ。小足も亦親兵衛の先見遠慮。あもの。情地。他を照文。借得。別
店。在。せ。其。秘。事。を。知。り。駭。く。も。不。嘆。唱。を。疑。の。霧。巫。放。り。け。入。り。
よ。ゆ。り。親。兵。衛。と。含。笑。り。紀。二。六。を。見。か。り。直。塚。の。思。ひ。知。

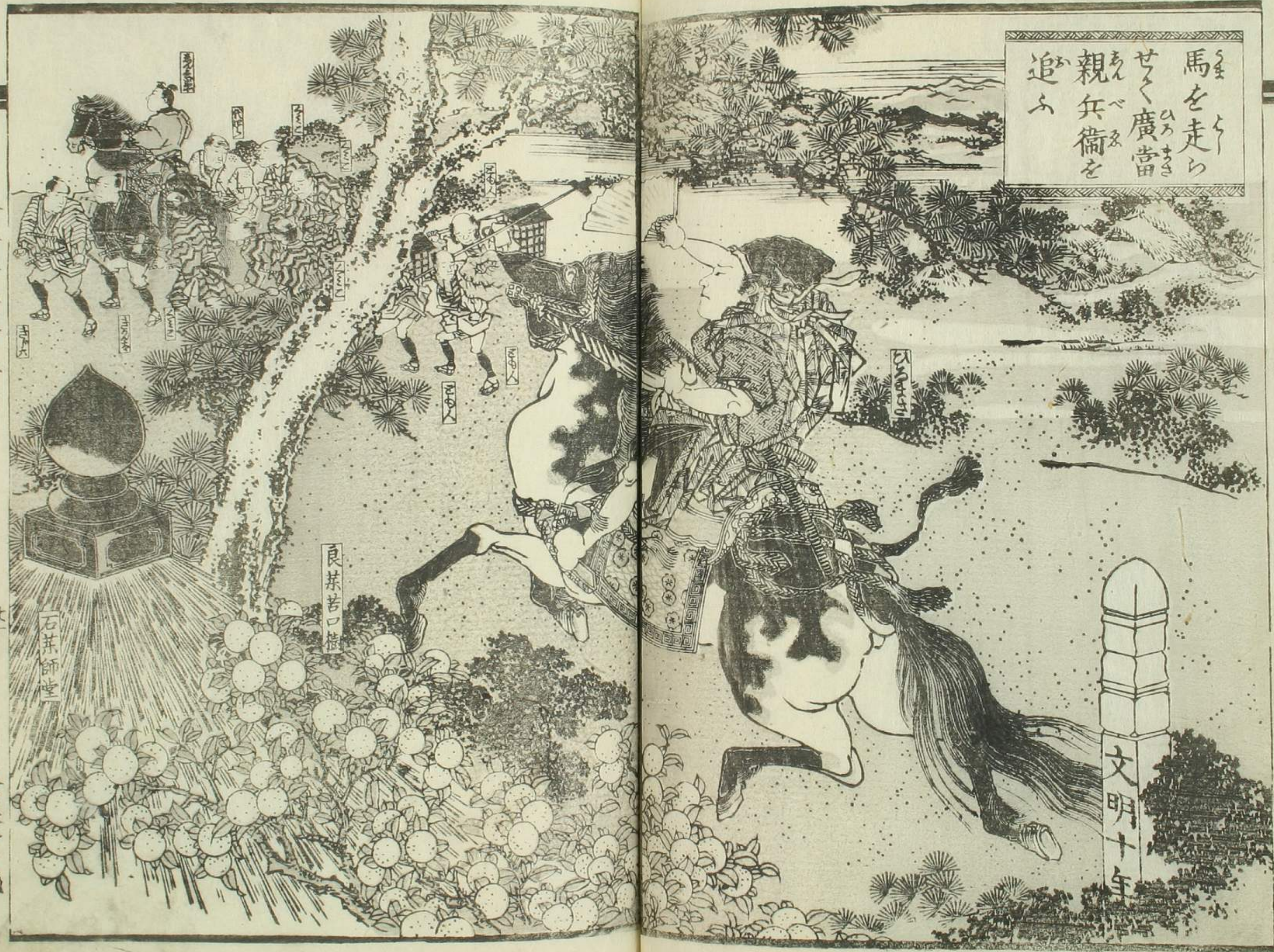
郎の久く那郎へ賣買の為。出入。され。雑色。足。輕。奴。隷。の。毎。大。く。さ。る。面。善
られ。入。御。前。改。元。主。の。伴。當。認。り。者。の。多。く。後。と。同。紀。二。六。然。し。那。官
領。小。從。ひ。小。可。大。津。小。造。り。時。主。の。伴。當。分。散。し。近。習。八。九。名。の。過。ぎ。り。け。し。バ
面。善。の。さ。ら。へ。其。已。前。談。講。谷。中。小。可。見。參。る。折。し。走。卒。奴。隷。あ。り。い。ふ。も
虎。の。奇。魂。胆。を。洗。し。皆。混。雜。の。中。に。け。れ。ゆ。も。心。や。屬。ら。け。我。も。認。得。他
亦。怪。む。者。の。あ。ら。う。と。を。代。四。郎。ち。や。事。の。淺。合。幸。あ。折。の。幸。あ。む。と。い。ふ。の
る。昨。宵。雪。吹。姬。を。送。り。時。直。塚。の。那。郎。小。憚。あ。れ。小。可。が。姫。上。の。伴。小。達。け。る。
料。も。中。途。中。主。小。逢。ひ。一。箇。の。幸。へ。徳。而。敗。堂。小。造。り。折。直。塚。と。那。里。小
在。る。談。講。谷。中。奇。異。煩。雜。の。中。に。見。參。入。り。雑。色。も。走。卒。奴。隷。も。心。の
在。る。直。塚。と。見。て。見。さ。か。如。く。其。七。と。知。る。い。ま。一。人。ん。定。小。幸。ひ。ま。り。れ。と。い
は。も。亦。聲。を。低。め。喃。大。江。主。の。直。塚。の。下。司。や。生。れ。る。下。司。あ。ら。む。實。の。蛭。虫

崎主の怪とてつるよのひたを故の徳と之箇様々と其けが親兵衛屋敷點頭て然
 むむもあつて思ふ倍る這回の揮は才畧都て那機稱まよく成ぬと事
 ち。異日稻村へかゝる参ら必よせえ上恩賞思ひの隨多べとのふ紀二六羞慚そ
 頭を低々黙然と當下一個の伴若黨行燈の背より膝を找め親兵衛告
 やういませるる也。昨日小可毎の姥雪主の指揮もて早く三條より歌店立去
 であ。その臆昏自那木牌をり。辛崎の関を過り一程もあ日暮れれば阪本に饒
 されど只得其頭露宿して夜を明しひ。這朝阪本の関の頭人士卒が辛崎へ
 加勢あつて御身を搦捕んと。人馬を出さ事の紛ふといふ備を見たり。是を漕
 地喜勘太が巫の算討に従ひ守屋の背火を放り忽地自家の勝利は做て
 関の士卒と約客門の逃るを趕り來あける程に憶も姥雪直塚と親兵衛の政元主
 従ふ。大津へあふ逢ひか則主の伴の近習大江の伴當と告ぐ。俱せられり。

るれとあふ喜勘太語を接す。那時関の爲体を思ふ早く辛崎の関より謀合せ
 ちやあはれ已牌あ及ふま。人の往還を饒ま。関の用と待不候。客及地
 方の莊客の聚合さるる。然人馬の出る及。稠入る者の拍擇せ。自家の
 便宜ふひたと告る。ち四郎紀二六親兵衛の親兵衛深く感と。七
 喜勘太小向ひく。肇て歩知る。和郎が良策をも直塚の亞流さ。一時の大
 功。且自餘の毎の能と。婿ま立地。密議一致の大功成り。賞さ。尚餘
 であ。その異日。兩館へま。上京。脚沙汰あ。恩賞孰も疑ふ。今を諦
 せ。我の只那火。便宜をゆる。一。則是。姫神の眞助。思ひ。野夫。信
 功の者。あ。悟。由。微妙。口。是。直塚。云。漕地。云。始。馬
 脚を露。後々。那。毎。必。知。る。あ。嗚。呼。妙。哉。と。悄。め。感
 嘆。斜。る。代。四。郎。親。兵。衛。も。感。て。已。ま。紀。二。六。喜。勘。太。伴。當。も。面。目

幾身餘の。當りかゝと思ひけり。姑且て親兵衛の勒肚の財囊より一裏の金
 一百十數兩を合半して是を代四郎等分してのせう。這御金の裏に我使命を
 奉り一時事あるむ日の準備せよと。老侯の賜りし久く懐かきものも政元
 主の抑留せられて那郎在り一日の衣食の匿しうされが敢用する所にて舊の俵
 少く今も不あり因て意の明日より一々のままに京師へ遠く送り候が那郎の
 事の後易く去れども去向の猶新関よりと聞き幸ひして政元主の路の次員は
 とて貸のいる驛鈴の我曹の在りある勘合の印のひとく路を放見関を過ゆ
 朝勝の上よりといへども。応仁以降諸國乱れ。諸侯割居の今の世の天子將
 軍の命令もゆれざる所あり。然れが又去向を不測の異変あるべは。是も亦知る
 べからず。倘去向も又事あり。我主僕相續を四落八散するともあはれ何れ
 のく食を求めん。負む所の盤纏の各も然らざるの準備はこれに候べけれども。

を宜しとせ。然れが今この御金を配分して各の盤纏にせしめ。亦館の御恩のゆゑと
 のゆゑも裏の啓の金を數へ。先代四郎の干金。紀二六十五金。喜勘太の十金。五
 個の親兵衛と一個の伴若黨。各七金。其餘の伴の奴隷。毎中各五金を半取
 せり。尚幾金を残るを。そは。俵財囊より。又懐かきもの。あらは。當坐に
 賞祿を。悟るも。悟りぬ。ゆゑ。そのゆゑの理り。素より。廉直を。宗と。せ。代四
 郎を。辭。由。恭。く。受。戴。和。子の。遠。謀。宜。あり。今。六。權。且。預。り
 措。路。用。る。所。異。日。安。房。へ。歸。着。の。日。必。返。ま。る。べ。と。答。懐。來。ぬ
 けり。代四郎も。かの如く。誰。亦。推。辭。皆。共。侶。受。仕。め。感。謝。堪
 ぬ。當。下。親。兵。衛。又。今。宵。の。歇。店。の。廣。き。中。且。斯。歌。の。行。客。も。
 主人と奴婢の居処と。犬牙相接る。あはれ。密談を。做。ま。し。と。い。へ。洩。る。と。ま。ら
 ぬ。然。れ。去。向。政。元。主。の。上。へ。京。師。の。噂。を。是。謹。慎。の。第



馬を走り
せく廣當
親兵衛を
追ふ

八代傳九郎卷五拾

八代傳九郎卷五拾

九

石井師堂藏

文明十年

是も故も依もるらん騎拍せん快くも。一霎時あやうく魂んぞと詞の言ひ
 らせ。本後方小騎馬の武士あり足掻を早め追蒐來つる馬蹄の立日近
 つく程小忽地聲を震立て大江生權且住と救使々々と喚被けける是あそ
 敬馬く這方の主僕ハ弁一佐と見うれが但見る其武士の京様ゆる頭ゆる
 立烏帽子を戴たる縹緋の大紋の直垂の両袖を巻紋りも。金座の上
 純ね長袴の下と印く引折る腰小螺鈿の両刀と瑞長小佩做し。桃花馬の
 梨地の鞞の銀ゆる磨出た。波濤小知鳥あふ真紅の長總曳せ乗た
 ける是則別人ぞ。秋篠將曹廣當へ親兵衛の思ひける。豫面善る廣
 當が遙けも今追蒐來ぬ事のあるをいれども。救使と叫ぶをいより早
 も馬より降立ち路上小迎れ代四郎と紀二六と喜勘太の其後方小居り
 兵並小伴當們的皆一列は跪坐する并中か鎧奴の。甘津の中る松の像鎧

御達ぞぞゆりける既ゆり廣當の間十丈許小あり時徐る馬の勒を緩め
 招小便面を腰小夾ゆる徐々と近づれ來る石某師堂の頭ゆる馬より閃りと
 下り代四郎則伴の奴隸其馬の鑣を合せさせ樹下は敷系まま紀二
 六と腰ゆる馬柄杓を抜出して某師の石の水盤の水を汲と馬小飼ふ。長
 途の疲労を勤せける當下秋篠廣當の親兵衛うち向ひ。一會以來犬
 江主恙もあらずと芽出。今番勅詔をりまよより咱等火急の御使を
 奉り。汗馬小鞭を鳴らして來りあやう追着れり正小公私の幸い。まると
 いども路次ゆる勅詔を示さる見。各人の佛堂あり時小取て小便宜ある
 んといふ親兵衛跪居る頭を拾け答るや。思ひけるは救使の光臨自京
 へ召させぬとも辭ひなるをいれ。小例單る中途の傳達望御の情已と
 死を憐せある歎幸ある上の幸小をい誘ふといひも。後方を急小えられ代

四郎紀二六あるる。俱も身を起こ立たりて。茶師堂ちしやうだう建たて。簞た子この両ふたを掛かけ。推おしりにく。左右さゆう別わかれて跪ひざ坐ます。登のぼりて時とき秋あき條ぢやう廣ひろ當あり。長なが袴はかまの下括くわを二里りの下毛も解とゆるり。佛ぶつ堂だうの上座ざにあり。徐ゆる々々四よ下げと見送おくらる。躬かみ々々上かみ座ざにあり。親あ兵へい衛ゑいも推おしりにく。找たづね入いり。朝あひつ居ゐり。這この堂の廣陝せん九く尺せき。二に間まの過給たまはす。則すなはち正回まわりの臺たい座ざ也なり。石いし像ざうの藥師じ一いつ佛ぶつ立たり。其その佛ぶつ前まへの臺盤ばん也なり。左右さゆうの花瓶びんに茶草そうと寒梅まい花かを供へる。中ちゆう央やうの青磁じの香爐ろの烟絶たり。又また方かた素す長ちやう脚きゃく托たくの滾落こんて賽錢せん櫃ぐいの側在あり。是こゝの餅を供へる。燧たい石いしの像に欠る餅也なり。固かけるが一兩りやう箇ごの頭にありけり。をまりて這この方に左右さゆうの板壁ばんに色々いろ々いろ画ゑ額がくをまり打つが。故ゆゑに新にあり大ききなも小ちひなも各おの々おの願ねがひ主敬けい白はく病びやう厄やく平へい安あん祈いのちと録ろくしる。余あまの餘の堂の簷下げに鰐口ゐの鉦を吊るる。看み主しゆうの僧の在るる。及またて便宜べん也なり。思おもひ廣當あり威儀ゑい儼げん然ぜんと親兵へい衛ゑい小せう告こるる。大江たいやう生せい美みね江這こ

回くわい和わ殿てんが奇虎こを對治ぢの大功こう並ならび奇異いの事の趣也なり。昨きの日ふ政せい元げん官くわん領りやうの浩湖この室町むろ殿てん則すなはち奏聞そうあり一く敬感けい特とくに淺く也。倘たう那な親せんと兵へい衛ゑい微ゐの下都との良賤れんいふも今の安堵あんの思ひを做なす也。宜よろしく勸くわん賞しやうあり一と仰出おほするふよりと公卿けい猛まう可か詮せん議ぎあり臨時りんの除目じゆとりれ也。則すなはち和殿わ小せう從じゆう六りく位ゐ上じやうを授ける。兵へい衛ゑい尉ゑい成せい者しや也なり。其その皇きやう京きやう召めい復ふくして仰渡おほするべき也なり。他たの政元せい小せう柳りゆう苗めうせりて久く在京きやう也なり。今いま又また召めい入いり不便ふべんの至りて早はやく御使ご遣せんされて中ちゆう途とに恩勅おんを傳へと義ぎ尚しやう公こうの執奏しゆうあり一と躬々ごん其その不ふ儘たまはせり則すなはち御使ご遣せんされる者しやと擇む也。救きう心しん不ふ廣ひろ當あり。和わ殿てんと射藝げいの日一いつ面めんの文あり一と望見ぼう且かつ馬ま上じやう達たつ者しやと擇む也。其その撰せん擇たくは充れり。往むか復ふくの間五ご位ゐの揚名やうを假しり。寮りやうの御馬ごを賜ふ也。宣せん旨し也なり。足そく利り殿てんの御教ごう書しよを受會うひり。今いま朝あも皇京きやうを騎出せり己の初對しゆの時候とき也なり。政せい元げん主しゆ辭じ別わかれり。亭てい午ご過かす時候とき也なり。

和君の進止を査する。君子の風を知る。勅を五虎の中。數まらざる。あは尾條。不難る片玉。思ひよ。の果して違ふ。然るも或は今日の御使。尚別人。云々。我云々と道理を陳ぐ。辨ひ稟す。も聞き。權威を以強め。然るは是非。及ぶ。及び。又と頭。加え。死して志を果さぬ。亦せん術の。あつむ。其。鏡。暴。亦。も。遇。が。我。命。運。の。致。ま。所。歎。併。君。が。賜。る。最。忝。く。工。と。云。感。謝。他。事。の。さ。り。を。廣。當。所。の。點。頭。然。と。と。の。め。れ。道。理。は。前。非。理。の。和。殿。の。推。辨。稟。さ。る。私。似。と。公。之。开。を。只。我。身。の。罪。を。怕。れ。て。听。さ。非。理。の。人。と。さ。る。最。も。畏。た。今。上。六。聖。君。御。座。を。且。室。町。殿。賢。相。の。恩。賞。は。々。の。ま。と。り。ゆ。れ。ど。稟。さ。る。反。々。御。感。あ。る。が。む。の。ま。の。易。に。似。と。の。め。り。尚。心。許。さ。る。今。上。和。殿。の。去。向。を。信。濃。路。へ。赴。り。東。海。道。より。還。り。ゆ。と。問。て。親。兵。衛。然。心。逆。の。岐。岨。路。より。と。思。ひ。那。則。今。の。事。の。

より。料。大。津。に。到。り。時。政。元。王。の。廷。と。東。海。道。より。還。れ。る。佩。る。驛。鈴。を。借。賜。ひ。其。故。の。箇。様。々。々。信。の。便。宜。に。依。る。主。の。誨。の。め。れ。と。生。口。を。廣。當。ら。ち。ゆ。そ。も。故。る。は。あ。わ。ね。む。我。思。ふ。い。ち。あ。る。も。東。海。道。の。伊。勢。尾。張。の。外。皆。是。京。家。の。敵。地。之。縱。驛。鈴。を。と。ま。る。も。我。恐。り。尚。饒。さ。は。所。む。且。其。驛。鈴。の。朝。廷。より。室。町。殿。へ。管。の。ひ。其。數。則。十。二。あり。一。も。欠。け。る。は。至。宝。る。小。政。元。主。私。一。箇。を。和。殿。へ。貸。さ。る。も。歸。東。の。後。早。く。還。さ。る。其。罪。和。殿。の。上。あ。ら。ん。嗚。乎。危。哉。々。々。の。れ。て。親。兵。衛。ら。ち。驚。え。我。疎。函。の。知。が。心。麻。痺。い。ち。あ。る。好。ら。ん。と。問。ふ。答。々。然。と。今。思。意。を。て。後。の。患。あ。ら。せ。と。さ。る。その。驛。鈴。の。我。受。命。と。政。元。主。還。さ。る。信。濃。路。を。只。和。殿。の。為。後。れ。患。ひ。る。は。我。も。亦。和。殿。へ。逢。て。勅。答。を。饒。さ。る。證。据。を。做。す。後。易。け。然。は。又。和。殿。の。尾。張。より。路。を。横。ぎ。り。信。濃。上。野。を。歷。る。安。房。へ。還。り。ゆ。は。尾。

張ハ斯波の領地之美濃小土岐の信濃の村上木曾諏方の祝部の上
 野武藏の扇谷定正王の封域也。皆是京家の御方地之事の便宜也。
 猶且これあり。今番我御使を奉り。和殿のからゆを拜ふ。孰の地也。逢ふ
 べや。其遠近料をこれに官府の関符を賜り。懐ゆる。今在る。今いする
 北東西るれば是を和殿の與ふ。那御方地にて。這関符を去る。向障りあ
 る。先よりその意を治め。と諭せ。親兵衛感謝の堪む。送る限る。
 知音の好情を。教の從ぎ。えや。ある。と答。馳て腰を撈り。
 驛鈴を合出。裏の隨の遞與。亦亦廣當。懐より関符を出。與
 る。當坐の交易閑談。果よけり。登時廣當天。ち仰せ。今い。時程
 了。頃者の日の短。暮る。程の。卒。別。今い。時程
 身を起。大江の奴隷。直。草履。牽。寄。馬の邊。今い。時程

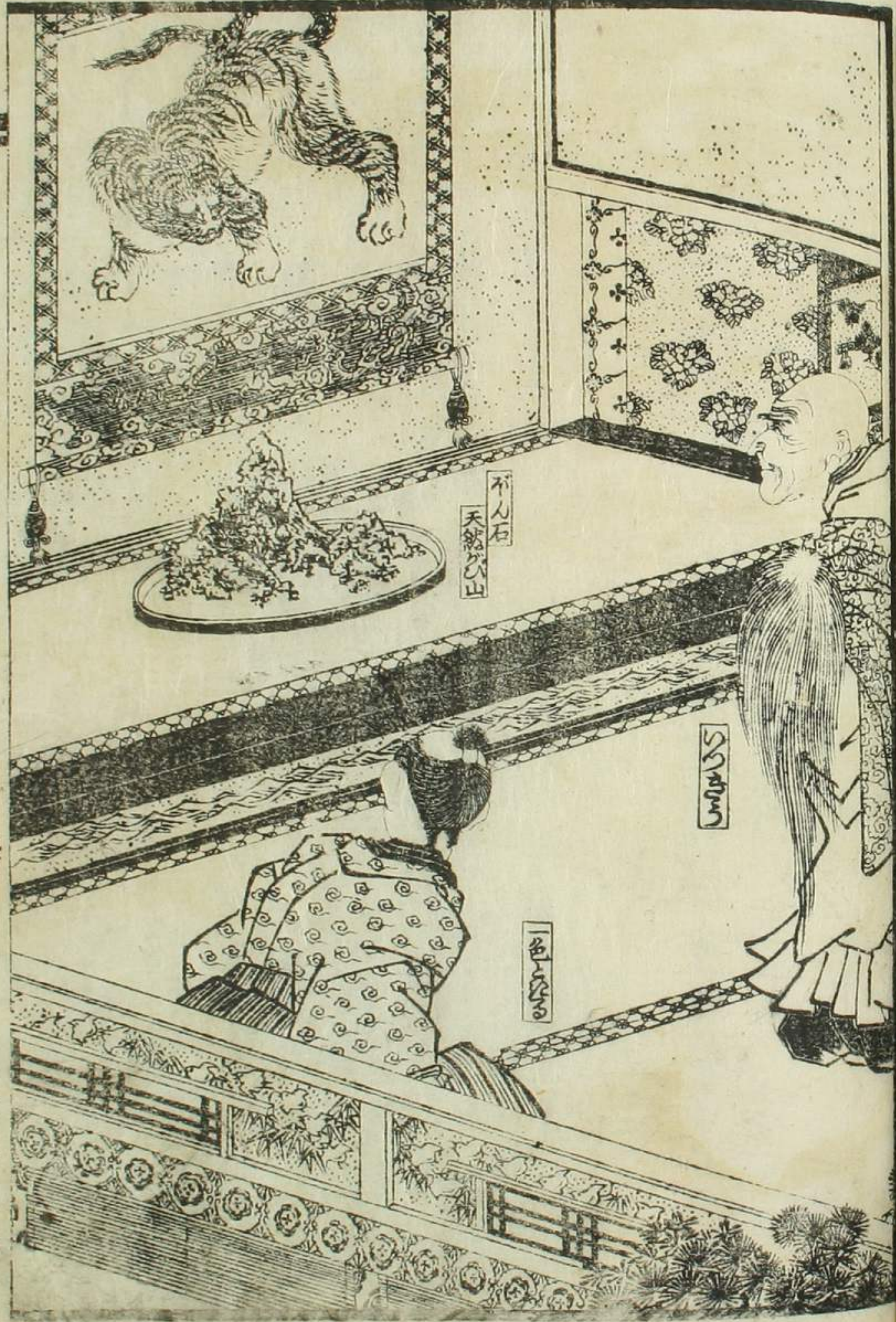
親兵衛も亦送り出。秋篠王の伴當の後。後。我伴當
 中。西二名。途。送。廣當。今亦一騎。後。末。其地方。人
 馬を。明日。皇京。参。馬。閃。踏。
 鞭中。走。走。一。時。目。送。親兵衛。代。四。郎。紀。二。六。い。巾。之。野。兵
 伴當。推。並。只。願。心。感。己。錦。上。花。を。添。雪。中。小。炭。を。餽。情
 義。兩。る。う。り。ける。鳴。平。御。使。多。哉。思。就。親兵衛。榮。利。を。欲
 せ。忠。信。の。又。一。段。の。餘。聲。香。高。り。那。賢。る。這。大。賢。を。よ。知。る。を。治。べ
 けん。と。知。智。あ。の。嘆。賞。あ。り。ける。話。分。兩。頭。介。程。小。管。領。左。京。大。夫。政。元。を
 大江親兵衛。別。了。更。又。馬。を。走。せ。即。日。京。師。か。か。り。馳。々
 花の御所。参。上。り。將軍。義。尚。公。小。少。上。る。小。里。見。の。使。者。大江親兵衛

仁虎妖對治の大功あり事の顛末又澄月直道が賀茂河原の勤役の頭
人若と同士殺の事且那野兵們が逆謀の事又惡僧徳用堅削が階落兇
鼠の趣まゝ其條々を漏れしむるも就中大江親兵衛の智勇類る功を稱て
須復り虎の筋軸を憲覽入れり義尚公駭嘆し大々たる隨
御管領畠山左衛門督政長をのり件の筋軸を禁裡御所へまゐせり
覽ふ備あひり王上故ら御感のあまり則敬慮不依る所公卿猛可詮
議あり件の大江親兵衛仁宜く恩賞ありと詰朝秋篠將曹廣當
御使とて仁を路次へ赴しめり既に上より如く徳而其次の日
廣當皇城へかへり來り則大江親兵衛が忠義の爲罪を思へて官爵を
辭ひなりける言切りし箇様々として宣旨を返し又室町殿
へも件の義を告宣し御教書を返却せし王上と首なり義尚公親

兵衛が違勅をい外ありて反く其忠信の心操を御感念愈淺く重く
安房へ御使を遣さるべしと議せし東國も亦久く乱れ人馬の通
路不便の咄あり然り百里の命を寄ると輒らざる所は朝議果
さざるたるを惜し者も言りける徳而廣當の日政元の郎小造り
面を請ふ告るなり昨日在下御使を奉り那大江親兵衛を赴けり石碁
師堂や對面の折他へ馮れる夕のひに其故の君が親兵衛へ貸ぬいと云驛
鈴をのり他東海道をかへりとも歸國の後速く返しなると其か
かり然りとて這官鈴を留措久く返しまゐる我身の罪あるに
相公も亦の義ありとて之を妙なる返りもあらん然是も亦知るべし
危は東海道を過らんと信濃路へも赴くべし願ふに這御鈴を相公へ返
まらぬとせぬとて會出る在下下遞與ける大江が遠慮宜し以て第一

相公のめん為るれば在下則受命多。他代りて返上を收めさせぬねと正首小
 かの意を傳へ。驛鈴を合出く返上る。政元の苦味して開る心つ死
 たりた。とて。恥を受命て。囊を啟る。と見。紐を締めて。腰吊り。その
 折。政元の親兵衛が。辭勅のよ。と。廣當。少知。及。び。死。を。恥。る。色。あり。
 政元の。廣當。敢。又。言。言。言。を。遠。く。別。を。告。ぐ。伴。當。と。宿。所。に。退。る。
 這項。又。政元。の。幸。崎。の。頭。人。惟。一。並。不。阪。本。大。津。の。頭。人。鶴。宗。稔。物。
 等。が。疎。忽。の。罪。を。讞。断。して。上。目。を。室。町。殿。離。小。伺。ひ。なり。則。老。松。惟。一。の。所。領。を
 召。放。す。那。身。を。所。親。の。関。け。れ。虎。を。実。檢。せ。り。士。卒。三。名。俱。禁。獄。の。後
 一。百。竹。口。て。追。放。さ。る。又。根。古。下。鶴。宗。大。杖。稔。物。の。屏。居。稍。久。く。多。才。罪。を
 饒。され。け。り。是。等。も。亦。犬。江。仁。が。仁。慈。の。餘。波。ゆ。で。在。け。り。然。る。は。是。後。件。の。三。関。を
 停。廢。し。又。関。令。を。置。れ。北。國。の。敵。和。順。し。境。を。犯。さ。れ。ぬ。の。時。又。政

元。の。有。司。の。命。で。御。高。の。牢。獄。の。閉。籠。る。徳。用。と。堅。削。を。牽。出。させ。其。積
 悪。を。責。問。ま。る。這。惡。僧。等。の。い。ま。も。死。る。も。且。御。高。の。紀。二。六。の。謀。ら。れ。て。か。ら。惡
 事。と。告。げ。ら。れ。今。ら。頼。陳。さ。る。由。り。て。又。阿。容。々。々。と。招。了。さ。り。故。不。徳
 用。堅。削。の。竟。首。を。刎。ら。れ。て。河。原。の。鼻。首。せ。れ。徳。用。が。親。香。西。復。六。を。主。君。と
 恨。て。出。仕。せ。む。遂。に。老。病。の。假。托。致。仕。退。隱。を。請。ふ。政。元。則。復。六。が。二
 男。香。西。再。六。政。景。と。本。領。阿。波。より。召。登。り。親。の。家。督。を。取。せ。り。然。る。が。政
 元。の。終。ふ。所。事。公。不。似。れ。も。約。莫。這。回。の。殃。孽。の。皆。政。元。の。奸。邪。より。出。り。初
 徳。用。が。讒。訴。と。信。容。ま。る。犬。江。親。兵。衛。を。豪。留。る。小。台。命。を。以。て。君。を。伴。る
 罪。を。思。ふ。且。奇。を。好。む。虎。を。走。ら。し。貴。賤。の。真。愛。と。惹。出。し。或。は。又。惡。僧。と。推
 門。小。近。つ。けて。遂。に。雪。吹。姫。を。六。綱。ら。ま。暁。得。ら。ぬ。人。の。罪。を。責。れ。ぬ。那。身。の
 罪。を。い。ふ。ま。る。と。議。ま。る。若。き。り。け。ま。り。當。中。の。首。尾。愈。宜。か。ま。政。元。是。を



八代傳九郎家三

三

文藝堂藏

不人石
天然の山

三

一



八代傳九郎家三

熊公後

一休偈を
説て画虎と
度と
を

憂怕れて遂久く出仕せざる亦病着し假托し管領職を辭し京ありて
 其顯職を罷らざる。政長一人管領たり。是よりして後三松を歴る。文明十
 八丙午の年小至る。政元復管領たり。やうやく出頭せりける。あは是後の
 話へ余程の那む腫の虎の画幅の獻覽を経く後小義尚公是を御父
 東山殿政へあせぬひ小義政好事の癖されば愛復り珍重して常小
 坐右小櫛さそ。其奇は誇りのひけり。悠り程小有一日此紫野る。大徳寺の
 一休老和尚と珍るる小杖を東山小曳く。路次の便宜あよりけん獨銀閣小
 伺候して。義政公と要法禪機の暗譚數刻及びけり。畢竟一休老和尚
 東山殿小見参あける。その目の話説甚麼を也。出像をる小載きりぬ。猶
 詳不知く欲くば開ち又下回小解分るを聴ねがし。

南總里見八犬傳九輯卷之三十一終

南總里見八犬傳第九輯卷之三十一

東都 曲亭主人編次

第百五十四回 照文二書を捧て東藩小還る 兩侯衆議を聴て京信を寛ま

再説一休和尚名宗純紫野大徳寺の宗曇花叟の嗣法也。出藍の
 才弥高。禪機悟法小長。るより世小誌をのあせり。人の知る所へ或云
 這活佛の後小松天皇の御落胤と云をり。自恣小して敢權貴を避け
 ぶ。與小儘まれの朝野小遊びく。衆生を濟度し。與盡れ深く執事して坐禪の
 床小在り。年歳既小幾膺る歴て。教化小煩くやありけん。近曾ハ錫を汗
 陌小曳とも夢をまり。小の目甚る風の吹れて獨突然と東山殿を訪むり
 ける。義政公ハ兩雅を宗と好と愛ハ至るると云とも。屈請を乞。一休和尚の

このいとも、あつと、いともあつと、いともあつと、
這々瞳の画虎の人其眼の點せより。忽地不果出る。世の人を恐嚇せし。或
よく思へ相似するあり。譬言ハ本性奸佞なり。且邪智ある者或ハ亦庸才
るも。愁不漢学して眼其用を倣せし。心高慢り已不惚之。博小誇り俗を欺
利を尋ね名を鬻鬻せり。反て身と倂め心を正さく。家を成し道を修め其れ
学問の疎や。只世俗を非と賤めり。身ハ是魔界在ると思ひ甚し。此
至りてハ乱と起して刑せられ。衆と争ふ兵せらる。かの如く白物の悪名と貽せ
如く。瞳子るり。這虎の眼の點して。遂に那禍事と惹出せり。亦年と同くを
論ま。嗚呼造化の小兒の多段玄妙。禎祥も徒ら。與ら。妖孽も徒ら。起り
事勸懲不係る所。誰う這深意と知んや。是れ由り。これを親れば。這虎実ハ
巨勢金剛の肉筆なり。神明佛院の灵画なり。飲人も知ら。我も知ら。知
ぬを強説を倣して。原故を究んと欲する。是惑ひの。蓋虎の猛悪も。瞳

るければ人を傷らむ。人の性の美らう。ぬも。見ざれば。倒れ易ら。然れ。驚者ハ
及々具眼の俗ハ勝りて。富戸あり。博識ありて。家と與ら。勘ら。眼目の資
助ハ人より。君果して妖艶の幼童の出処と。瞳子の虎の画工の用心を知
ち。思召さる。君が年来の御行状を。少自あ。あ。と。疑ひ。あ。と。席と
拍ち面を犯して。忌憚る所。談義數刻。及び。義政公ハ。愕然と。醉
如く醒る。如く且怒り。且羞る。默然。と。半晌許。熟と。克思ハ。智識の教
化。至妙。して。是ハ優。方。鍼。破。り。思ハ。復。ら。怒。を。盤。一。休。ら。向。て。感
謝。不。堪。る。宏。論。明。辨。老。和。尚。ハ。あ。ら。せ。せ。我。を。と。諫。る。犯。して。かくの如く
言。と。盡。さ。ん。是。則。我。が。為。釋。氏。の。比。干。と。覺。さ。ん。珎。器。故。物。を。排。斥。け。奢
侈。を。省。け。儉。素。と。宗。と。あ。り。て。瘦。る。民。を。肥。え。然。る。も。這。々。瞳。ハ。虎。の。角
軸。を。の。後。ま。を。在。ら。せ。ん。好。事。の。者。又。眼。の。點。して。復。禍。を。惹。出。さ。ん。飲。ら。れ。も

八代傳九郎卷三十一

五

文藝堂藏

亦段上
九百
榜像と
併見る

亦料りかゝり。あまいうりやうらんや。と問き。一休笑いけ。君御志と改めて。道ふ
稱せぬ。この。這虎自然と滅却。復たかゝる。あれども。正可。性方を見
猶御疑ひと送ま。似たり。這虎筆下の墨迹。されども。既。是。狀體。形
體。ある者。法を。听く。成佛。せむ。と。い。て。済。度。仕。む。と。答。て。軀。拂。子。成
合。身。と。起。り。徐。や。う。勸。軸。の。虎。打。向。ひ。く。則。偈。を。説。く。道。く。

噫。王。眼。木。佛。無。學。之。人。視。而。不。讀。讀。而。不。通。勿。笑。無。筆
與。文。盲。水。母。無。眼。蝦。子。技。之。多。目。鰓。體。眼。不。為。用。江。湖
億。兆。賢。不。肖。誰。知。無。眼。之。勝。於。有。眼。汝。元。來。是。何。物。也。
筆。下。墨。迹。無。瞳。畫。虎。狡。兒。點。眼。忽。說。世。神。童。射。睛。則。人
媚。妖。乎。怪。乎。神。乎。鬼。乎。一。來。一。去。休。索。出。處。入。面。獸。心
人。非。入。獸。面。人。心。有。此。虎。造。化。小。兒。多。機。關。以。心。傳。心。

是偈句
不押韻
便是做
翻譯佛
經之例
云

不立文字。寫真寫生。畫亦非也。有像無像。本來空。鼓腹
管心。無一物。苦海愛河。迷孰之深。一盲導衆。盲彼岸。遠
群犬吠於聲。此岸閻中流。風濤不可涉。迷悟在人。豈有
干汝耶。今我採一炬。以為鳥有始。可與人無為也。喝。と。説
訖。一息。吻。と。吹。か。れ。其。息。忽。地。心。火。と。做。り。く。虎。の。画。幅。小。移。る。と。見。え。け
依。那。時。遅。し。這。時。速。し。勸。軸。の。立。地。不。燒。亡。く。軸。さ。わ。る。と。義。政。公。の
吐。嗟。と。む。り。小。見。ゆ。敬。馬。の。程。一。休。早。く。坐。し。復。り。く。義。政。公。の。稟。ま。さ。り。目
今。亦。肉。せ。り。野。柵。那。虎。を。教。化。し。て。既。是。無。為。入。の。誰。う。又。眼。を。點。し。て。世
間。を。由。あ。ん。願。の。愚。直。の。諫。言。を。後。々。を。も。た。れ。ぬ。で。費。を。省。け。儉。約。を
旨。と。く。民。の。塗。炭。を。憐。れ。ぬ。怪。異。是。より。滅。息。く。鹿。を。走。ら。せ。悔。ま。さ。る。べ。し。
稟。え。よ。只。是。の。ぞ。做。さ。る。も。做。し。果。つ。身。の。暇。を。あ。る。べ。し。と。い。つ。軀。を。身。を

八代傳九耳卷二十一

六

文英堂藏

起して飄然と退りけり。義政公の又その一奇も呆れて一霎時忙然と見送りぬ程に忽地心つた。御後方おゆるる。近臣熊谷後二郎直次一色駿馬幸通等とてえり。若們の思ひに兄那休の隔昨歳十一の冬十一月正一遷化の夢えあり。今亦那身あふ来り。我を諫め成さるあり。夢現欲怪しけれと訝りぬ。直次幸通言語弁一稟まき。臣等も亦那和尚の宏論明辨を憶て聴聞仕り。隨喜渴仰の思ひを做せる。遷化のゆゆの心も屬る。仰よりの思へ。実世を去りぬゆより。今茲の既三稜のゆる余る。近曾樵まわり。洛外より北山中。一休和尚逢ひぬ。と公者のひり。虚説るんと思ひ。原来那和尚の今尚死で在る。然るゆり。答ちる。世の義政公の然るゆり。と領る。其言思ひ合さる。あり。往日我語次。博士小槻雅久おせり。唐山より仙術を伝る者。死する及びて。実の死

悄地小松を蟬脱して深山幽谷に躲きて人間を還らぬあり。自足を名つけ。尸解と公佛者も亦公の事あり。達磨の如し。即是人在昔菩提達磨の流支三藏小毒殺せられ。遷化して三稜の後魏の宋雲が使を奉り。西域におりける。帰路に葱嶺を過り。達磨の履一隻を推り。編々として来ぬ。逢ひけり。師の那里へおたぬや。と問へ。西域へ還ると云。且汝が王の既お世を厭りとて別去りぬ。宋雲本土へ還る。及び。明帝の既お登遐。考莊位。即後考莊達磨の事をす。怪とて。壙を啟。見る果。一。那身。在る。一。一隻の草履あり。と云。そののの高僧傳及傳燈録。不見え。とす。其後達磨の入東して。權且我邦に在り。聖德太子と贈答の歌とす。片岡山の飢人の達磨の化現と云。這小説の載て。虎園が元亨釋書。在りと云。是れ。小由。これを思へ。一休も亦尸解。遷化の實。死せり。と云



八犬士姓
 氏勅許
 就て照文
 賞禄を
 賜り給ふ
 共々
 候
 の
 見



驚愕の如く。あつて徑小龍田へ参りて早く老館議へ告げれといはせぬ。照文隨即龍田へ参りて。義実主小生口なる。その言異るべも申せぬ。言省々具おせ。約這一椿事へ只照文の口状の事をも親兵衛呈書あり又七犬士と大母妙真を尉の消息もその時小届りて義実主を首多妙真音音曳の單節等らえ七犬士も俱小眉を頻單々胸安かと思ひけり。是より第三日に至りて龍田の老候義稻村の城へ來臨あり。その義我昨日よりその安ありて兩家老東六郎辰相荒川兵庫助清澄並小杉倉武者助直元等奉りて。御食応の准備あり。その日犬塚信乃成孝大山道節忠與大川莊助義任大村大角礼儀大田小文吾悌順犬飼現八信道大坂毛野胤智へ。大法師と俱おられ。各公服を敷正。辰牌より伺候し。又蛭崎十一郎照文も召きて

龍田の老候小從ひまがり。あち己牌時候小参りけり。恁而兩侯義成同席より辰相清澄等奉り。則、大と七犬士召をけり。登時義成主の件の一僧七士向けり。今番願ひのまゝ八犬士の氏を金碗と勅許あり。且宿祿の姓を賜ひよを宣示し。辰相則宣旨と御教書より。啓聲朗らる讀聞し。且其二通の寫本と、大と七犬士等小遞與けり。當下七犬士の俱小謹々拜聴。詎一様小席と避け。兩家老辰相清澄向けり。欽いを京も尚親兵衛が來修今の席足らを送憾も思いけり。開中の、大法師只唯々との言義成、七犬士共侶遠侍へ退りけり。恁て又義成主を。蛭崎照文を召せ。嚮上京の使首尾宜く正副兩役を兼帶あり。遙け水路の障りなく。かる來けるを。特大義思召と。其勤功と譽を時

八代傳し耳録三十一

文義を載

義の外いひなき非如政元主他を最愛とく。則食も亦大祿をり。係
 多欲するとも他いふや。丹を甘みて二君仕る者るんや。其の美と御心
 安く又し。と云を大角諾るひ。臣もが愚意も異るると云。昔者前漢の
 蘇武が如た。胡國へ使し。拘りて十九年。厄解く還るふ及び。麒麟
 閣の功臣。數まらるると云。故事さ。思ひ比ひ。今の親兵衛。同く
 ぞ。京師は淹留。兩三月。いま久し。いひなき。信京廿六。薄義。似され。鳥
 だも龍中。有友を慕ふ。周公且。いひなき。誰う兄弟。の急難。悲きん。
 心の憂。の仲々。なるも。思へ。時を俟。ふ。窮達。時あり。得失。命。縦
 那身。水火。の中。置る。とも。親兵衛。の恙。る。蘇玉。の神護。あり。又。蛇
 雪代四郎直塚。紀二六。の補助。る。いひなき。其窮厄。蘇武。が十九箇年。の
 似る。べも。いひなき。と。いへ。現八。の語。を。継。げ。臣。も。只。那威勢。を。憚。る。いひなき。

とも。実。小。を。平。ぐ。た。意味。ある。故。右。の。如。し。昨日。衆。議。仕。り。も。大。際。と
 是。不。過。然。と。も。猶。御。心。許。り。思。召。さ。る。間。諜。兒。を。遣。して。那。里。の。要。を
 撈。り。御。計。ひ。も。あ。る。た。便。り。を。給。ま。る。外。の。外。の。異。局。様。小
 議。一。け。を。兩。侯。つ。ら。く。ら。の。ひ。と。義。成。主。宣。さ。る。現。間。諜。兒。の。一。條。の
 那。里。の。吉。凶。を。知。る。捷。徑。あり。徒。に。物。を。思。へ。ん。より。慰。る。より。も。あ。る。べ。但
 毛。野。の。知。智。裏。の。ゆ。え。あ。る。今。一。言。も。出。さ。ぬ。の。另。外。思。ふ。より。や。あ。る。と。同。き
 毛。野。の。額。を。衝。れ。る。否。臣。も。亦。前。條。小。異。る。べ。も。い。ひ。なき。遊。莫。回。諜
 使。の。一。美。の。便。り。あ。る。似。れ。る。も。陸。中。の。処。々。新。関。あり。水。亦。亦。風。傳。の
 障。り。多。し。と。ま。へ。る。む。往。復。坂。東。道。一。里。九。百。里。餘。り。也。京。師。の。機
 密。を。撈。り。とも。其。使。翼。ある。い。ひ。なき。今日。の。ゆ。え。明日。告。ま。る。樹。あ。る
 づ。も。い。ひ。なき。加。旃。事。小。觸。る。京。家。の。人。の。知。れ。る。い。ひ。なき。親。兵。衛。が。還

る死路絶く。且御為妙なる取らるる死飲料の如き。然るを今現分
 件の一議不及び。是已工を治るるの。他が本意のひり。と云を義成
 うらやめひ。あつらふ今亦いふせんや。と問れて毛野又稟を言。徳兼のひ
 死に素藤を征伐の日只寛の一字をりて。御方の士卒を損ふこと
 全勝を治るひける。賢慮を仰せしむる。這回も亦寛の一字。あくとやひ
 死臣も今朝も周易の馮り。親兵衛が歸國の遅速を情地考
 ひいふ遅くとも年の内必や信あらん。姑且閣せ久と云七士一致の外
 るは側陣せ照文も理りとを稱えける。その時までも義実主と黙
 然と少果。義成主をアツへり。安房殿も同意多べ。我親兵衛が還
 るを俟つと一日も千秋の思ひされども。見樹を争何せん。といひ。嗟嘆ふ
 堪ぬぬを義成主の云云といと正首の慰め。別議不及びひける。

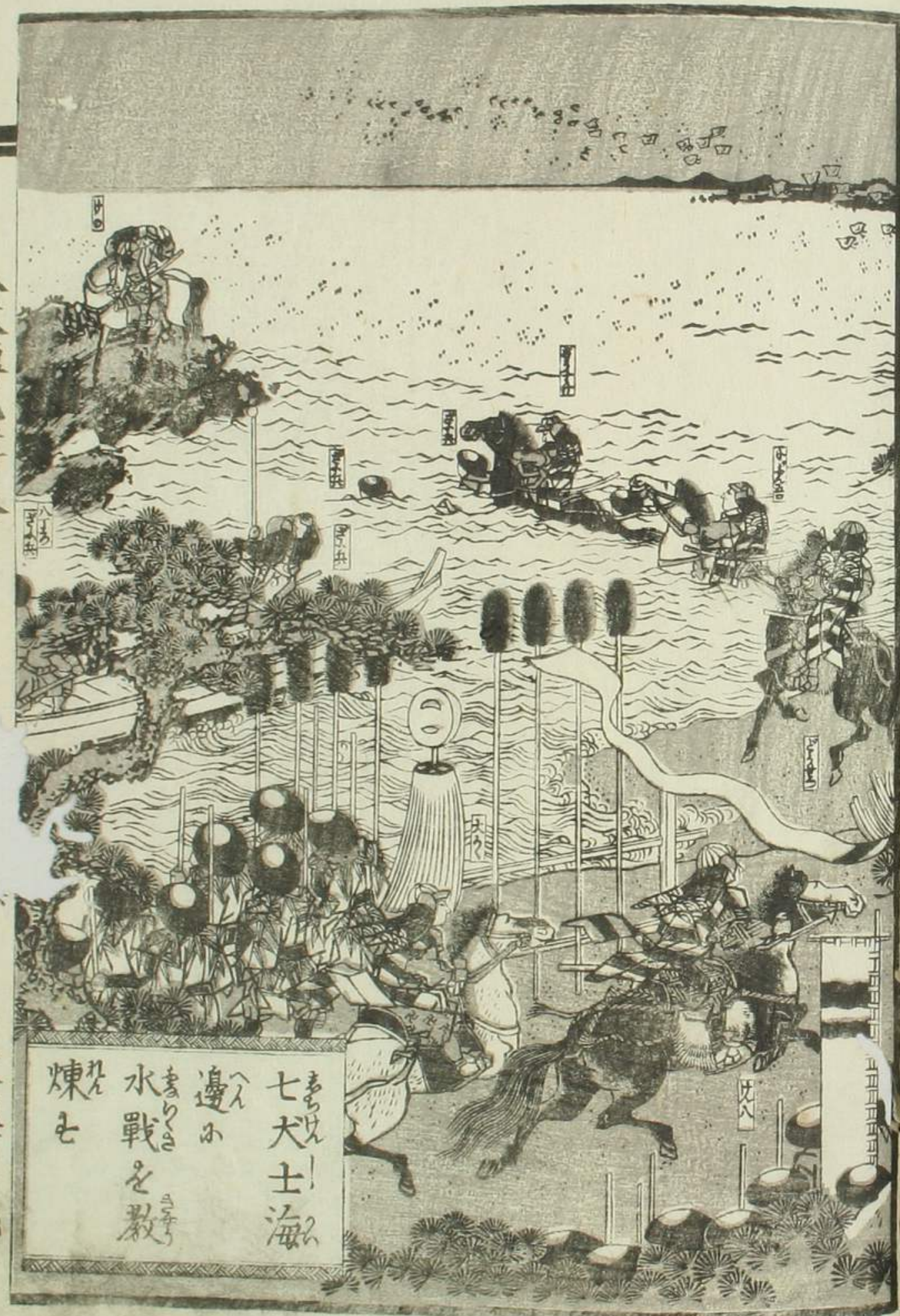
第百辛回

定正將を連て水陸大軍を起す

姑且して義成主の又大士をうち向ひ。親兵衛の事いも。各一極の意
 見あり。再議を寛く。死ん我又別思ふ。あり。是素藤伏誅の
 後封内安は似れども。治居る乱を忘れざる。古今良將の小心る。
 知今戦國の時不當り。一日も燕居をく。安房上總下總。是他
 州小勝り。稻穀の熟早けれ。十月より正月まで。農夫們皆耕稼暇
 あり。教むて戦む。是と云。經文ある。等閑あり。思ひ
 後悔あり。既初冬。幾日もの。宜く民の水陸の閉戦を言むべし。
 あの美上總の諸城主へ。指示して促し。當國の汝等七名七隊。備
 へ。民を教へ。然れども隣國。憚りあれ。陸を獸獵をり。水を

敵の秘密を知る便宜間諜見勝り、謀り易くその心と告
 る義成主ち夢を、井の亦定便宜のめん我の亦那管領の境を犯さ
 るわらん致と思ひさるあつた、この山幸海幸も其頭の非常の備を為
 する。我よく間諜見と使へ、敵も亦間諜見とて我虚実強弱を撈らる
 とするを、然れば武を耀、成を固く、且仁政を宗とし、地の利と人の知
 据る大敵も亦怖る、不足らる然るをも、那河鯉の改木孝嗣及次國太
 郎とやら、鶴の入水の夢えあり、他們的素藤伏誅の時大江親兵衛
 従ふ軍功ありと夢るの、左右川の厄あり、見るとも、さるは、不
 便してと、心なる憶、を、嘆、あ、の、道、節、莊、介、小、文、五、呂、号、の、慰、難、く、惆
 然、信、乃、毛、野、現、八、大、角、も、未、見、の、士、卒、を、忘、れ、ぬ、で、言、今、他、們、の、及、せ、ぬ
 現、良、將、の、仁、慈、博、愛、の、君、を、誰、り、あ、ん、と、思、へ、俱、不、敬、服、して、その

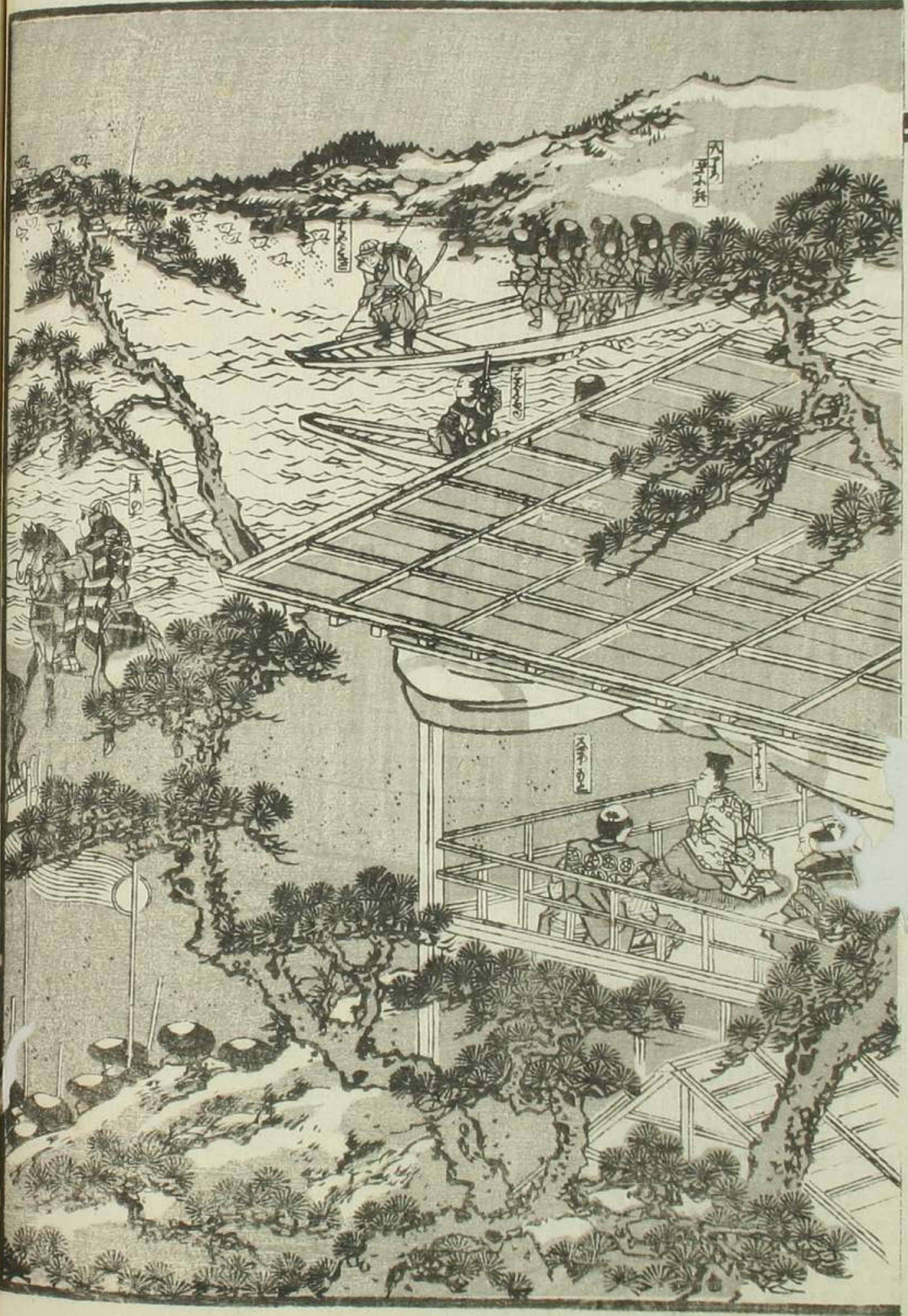
欽びと京一けり、徒而餘談も果、照文の休暇二十日の勲勞と賜り、
 七犬士と相伴、義実主は俱、日昔春れて瀧田、還り、あの日、
 譏を傳、妙真音、單節、の、親、兵、衛、が、安、危、代、四、郎、の、上、左、右
 り、右、也、と、思、ふ、心、有、敷、系、不、慰、難、く、只、音、耗、を、松、の、戸、小、葛、丹、葉、を、秋
 盡て、其、稻、月、を、り、ひ、け、る、徒、り、一、程、有、司、們、の、人、馬、調、煉、の、下、知、を、以、て、安、房
 四郡の村正と、莊客、不、徇、傳、へ、水、陸、共、准、備、あり、山、の、假、屋、を、構、へ、且、鹿
 寨と為り、又、浦、邊、出、く、漁、舟、を、取、取、て、楚、國、の、競、渡、を、擬、せ、
 たり、安、房、の、春、寒、く、冬、暖、る、ふ、然、ら、ず、も、十、月、の、小、春、と、唱、て、昔、春、中、の、優
 日、和、多、け、れ、ば、那、宋、人、の、不、龜、の、茶、を、兵、客、の、徴、め、水、戰、を、差、次、
 馬、を、囚、甘、海、と、渡、り、船、を、競、り、て、先、を、争、ふ、士、卒、の、小、聚、合、を、小
 程、小、義、通、御、曹、司、の、杉、倉、武、者、助、直、元、四、郎、况、戸、賀、九、郎、逸、時、苦、屋



七犬士海
 邊の
 水戦を敷
 煉七

八代将軍

文英堂蔵



八代将軍

文英堂蔵

八郎景能等勇士都々十數名。雜兵五千餘名。皆共侶不從。多件の
 浦邊不中。あれば七犬士も。俱小武器を救正へ馬不跨り。伴當を領て参
 する。その中水戲水馬の大阪毛野犬塚信乃。犬田小文五。犬飼現八
 特小勝。人の視を驚くまゝと云ふ。又犬山道節。犬川莊介も亦
 拙く。獨犬村大角。下野。成長。水戦。疎。その時
 勉く習得て。敏く其技を能く。既。十月も二十日。あまのり
 時候。水戦の調煉果。直元並。七犬士等。又義通。俱。あり。く
 山野。造りて。獸獵。義成。藤下。知。昔。唐。山。湯。王。雀
 羅。小禽を捕る。其。方。張。一方を張ら。入。者。入。逃。る
 者。逃。は。仁。人の。做。所。必。か。の。如。く。る。べ。然。今。番。の。獸
 獵。是。軍陣の習学。る。必。獲。と。會。り。る。益。の。殺。生。ま。く。猛。獸。の

工藤景光
 光を成
 下河邊
 行光作
 東鑑を
 正とま

人を怕と。逆來ぬるを射。斃。ま。逃。る。を。趕。て。殺。せ。但。生。物。か
 第一。或。又。傷。る。も。殺。さ。る。を。其。亞。と。せん。在。昔。建。久。四。年。五。月。二
 十七日。鎌倉の右幕下。畷。獵。小。工。藤。莊。司。景。光。山。鬼。の。大。鹿。不。度。見
 と。射。ける。崇。中。那。身。の。暴。不。疲。死。けり。是。を。思。ひ。か。ひ。ひ。と。言。可
 寧。小。試。め。り。六。七。犬。士。及。直。元。等。も。俱。小。感。服。て。昔。違。り。七。犬。士。並
 列。卒。小。傳。へ。其。殺。伐。を。制。め。り。然。七。犬。士。の。射。る。所。百。發。百。中。る。ぬ。の
 る。故。ら。勇。猛。獸。の。其。四。足。を。射。て。滾。て。是。を。列。卒。小。生。拘。と。せ。然。も
 あ。ぬ。毛。屬。の。或。其。尾。を。射。て。墮。し。其。耳。を。射。断。る。も。諸。獸。小。大
 と。併。て。其。弓。勢。小。駭。怕。走。る。阿。容。々。と。て。生。拘。る。日
 毎。小。數。十。頭。之。れ。直。元。逸。時。景。能。等。の。士。卒。の。武。藝。有。者。も。皆
 七。犬。士。を。師。と。習。ふ。敢。殺。伐。を。上。旨。と。せ。然。其。時。義。成。主。復。下。知

あつ人を害する豺狼稻穀を鼠本を猪鹿を飽まで喫せし後小載て遠に
嶋嶼へ流せし。一箇も殺しぬるなり。伊豆相模の渾夫を。這仁改む
感一慕ぬるなり。左右を程久も既。十一月中旬ありし時候有
一朝瀧田の義実主の猛可。蚤崎照文を召て告め。我親兵衛を憶
ふ故。昨宵殊る夢を見し。譬。大江親兵衛も今番の獸獵の隊に
在り。他皇國あり獲る。か。暴虎と射。斃せし。引提。我の見まると
思へ。忽焉と驚。驚に覺けり。夢の五臟の煩ひ。佛經も世の果敢。わさふ
譬。泡沫夢幻といふ。遮莫周禮。六夢の説あり。則。其官を置く。占
夢。其吉凶を知る。最も故。然。上古。天朝。亦。其のあり。宗
神。天皇の即位。四十八年の春。正月。天皇。則。豐城命。と。活目尊。小。勅。詔
あり。各其見ぬ。夢。縁り。天日嗣の大位を。定め。ひ。書紀。見えり。

その他夢小由。吉凶あり。國史及諸書。載られ。枚。本。小。違。あり
。開。擬。ら。て。の。あ。ね。ど。只。虚。夢。と。の。を。ま。く。は。虎。の。猛。悪。の。獸。人。の
。残。忍。奸。虐。を。則。虎。狼。野。心。と。い。へ。親。兵。衛。今。在。り。京。師。在。り。虎。狼。の
。等。一。の。奸。人。小。苦。一。ゆ。り。く。く。も。あ。り。先。死。欲。あ。る。ま。や。夢。寐。と。い。へ。ど。も
。快。く。も。因。り。我。又。思。ふ。あり。親。兵。衛。が。安。危。と。知。ん。と。回。謀。使。を。遣
。て。後。暗。に。所。の。明。々。地。小。使。を。り。亦。復。調。貢。と。献。り。室。町
。殿。小。請。宣。し。て。親。兵。衛。を。召。取。り。許。さ。る。と。思。へ。も。又。ヨ。マ。く
。資。財。を。費。す。ふ。あ。り。れ。ば。我。口。親。安。房。殿。小。如。此。せ。ま
。と。い。ひ。か。り。汝。先。稻。村。小。赴。り。家。老。毎。小。情。地。小。告。て。他。等。も。宜。か
。べ。と。い。ひ。左。も。右。も。計。ひ。て。亦。他。事。も。多。課。され。照。文。深。く。感。服。し。て
。親。兵。衛。が。京。師。の。安。否。を。任。ま。し。御。慈。孫。と。ま。ら。ま。

八代傳記 卷之三十一
文藝堂藏

もの上やめは仰美りひひ徑小稲村へ参上りて宜く計ひひらむと答
 稟し退れといをぞ稲村の城へ赴けり則辰相清澄の老館の御意
 箇様々々と件の一義を告ぐ相譚ふ辰相も清澄も俱々感佩して異
 議あらず佳きも敦に御賢慮を館の推辨と見えや誘ふ稟上んとて
 隨即照文と共に義成主の身邊におありて件の美を告まれば義成
 徐に听果る且感し且其欲び大くするも則答あまや今美は老館の
 御賢慮の愚意も亦相同し御又京師へ使を遣して請ぐ親兵衛を召
 取ん欲とて大氏等の意見を問ひよ毛野及自餘の六犬氏も皆只寛の一
 字を是として別議るれば黙止せしめそれより一々五十日あまの歴ぬる今
 まぐ信るべし必是故あるべし然に再度の使として親兵衛を請直へとも
 性急とのべへる且陰のみの一義を承るも陽の主上を首をひり室町東

山の両公へ再度の調頁を獻る忠信の我真面目も數千金も惜む
 足らぬ邊の唐山のご事と思ふ般般が境暴る西伯文王美里の囚
 も美女と數千の宝貨とて償ゆる例あり今戦世と云といへども那紂王
 が時よ似む聖皇賢相上不在其管領の私議も亦仍れざる所あらんは
 這回も又五千金と齎して京師へ使をまわらむ十一郎の能還りての美を
 老館へ稟上り大士等の出で郊外に在り然るを今召よせ告て再議ふ
 及ぶくもあらむ老館の御意忝ければ他も感服せざらんや山嶽果々
 來ぬるを告ぐ告るとも遅くといへり就く又一議あり今番の使も別人ら
 要る十一郎の歸國の後いさ久くされば最大義あり思ふべけれど亦復那
 地へ赴けり事よく計りて親兵衛を相伴せよと亦餘美もわたり君
 命の照文の唯々ととなり額衝に美く稟上り仰美りひひも先度の正

八代傳九郎卷之三十一

三十一

文選堂藏

使の親兵衛あり。又代四郎の帮助あり。あつてのく臣等も亦副使の失る。苛
 子崎の賊難。京師の首尾も皆便宜とゆく。いひふ。今度の先度。亦増せ
 る。特に大事の御使。多し。短才。浅慮の身。單々。數千金と齎。あふ。船
 中。海賊と殺攘。陸より。京家の禁錮を解。て。親兵衛を。おと。還。は。
 大任を。よく。仕。らん。や。千里の水行。を。幾。十。回。往。復。仕。ひ。と。も。丹。を。解。ひ。ま。る。ふ。
 あ。む。任。重。く。て。力。足。ら。ぬ。を。知。り。仰。ふ。從。ひ。ま。り。て。失。あ。む。争。何。い。せん。
 賢慮を。仰。せ。なる。と。か。そ。る。く。勸。解。け。る。を。義。成。成。り。點。頭。い。い。誠。小
 其。議。も。謂。あり。其。副。使。も。何。人。を。欲。得。遣。さ。六。郎。兵。庫。助。の。思。い。い。い。
 や。と。向。き。く。兩。個。の。老。每。の。阿。と。応。る。丹。中。の。清。澄。一。霎。時。沈。吟。し。て。最
 愚。按。少。い。へ。今。番。又。照。文。の。仰。付。り。京。使。の。副。使。田。稅。戸。賀。九
 郎。逸。時。若。屋。八。郎。景。能。を。あ。ら。は。へ。く。い。ひ。め。他。等。の。累。素。藤。藤。山。の

城を。拔。き。命。を。免。れ。逐。電。あ。り。浮。浪。孤。獨。の。身。を。托。さ。り。大江。親。兵
 衛。の。隊。に。謀。る。素。藤。伏。誅。の。日。軍。功。あり。あ。と。り。て。召。復。さ。れ。て。本。領。安
 堵。仕。り。一。只。是。仁。の。恩。之。義。是。等。の。故。ゆ。い。親。兵。衛。の。安。危。就
 て。他。等。骨。を。折。智。力。を。盡。照。文。の。帮。助。不。做。り。俱。成。成。る。ゆ。い。
 兄。賢。慮。誰。何。と。問。ま。れ。義。成。主。う。ち。領。領。我。他。等。が。ゆ。を。忘。れ。ら。
 六。郎。も。同。意。る。然。然。の。逸。時。も。景。能。も。武。藝。拙。く。も。て。且。思。慮
 あり。親。兵。衛。中。及。び。と。も。別。人。の。優。ま。り。あり。相。心。く。と。と。心。ふ
 照。文。も。又。稟。さ。副。二。人。の。機。臨。愈。利。あ。り。仰。付。さ。せ。あ。か。と
 願。へ。義。成。王。又。領。り。定。然。然。之。孔子。の。言。も。云。人。行。へ。吾。師。有。り。其
 よ。若。者。を。擇。り。從。り。俱。不。行。心。る。ゆ。い。那。逸。時。景。能。の。徳。尚。不。直。元。等。と
 俱。不。義。通。小。從。り。七。犬。氏。の。人。馬。調。煉。の。獵。所。不。在。と。既。久。早

人を走どく召束にて。分月先這美をといそせぬ折々件の逸時景能
 御普司の御使を立てて。獵所より参入りし。その時その義成主の時
 便宜を歎ひぬと大なるを。隨即逸時景能を縁頼へ召よせし。使の所以を聞
 ぬ。是則別義ふゆを義通君。昨日獵所の山路中。料を靈芝を拾ひけり
 其靈芝の根あり十莖あり。疑ひもたれ祥瑞を。意覽ふ入れぬと云。兩個の
 使の美を舒く。靈芝を近習ふ。逸時と義成のとも見ぬ。辰相清澄
 名ふ宣ふ。靈芝の世稀なるゆゑ。我是を憎む。あねと約。莫人の君なる者
 漫ふ祥瑞を。執へ。奸民屢奇を。早ま。利禄を欲ま。不至なる。在昔唐
 山後僕の光武。中興の時。羊每ふ祥瑞の。言り。皆退け。賞せ。といへり。
 志ある君の。誰も。徳と。思へ。義通の。孝養の。一端。を。靈
 芝の。十一郎の。預せん。老館。見せ。なり。御用。の。是。亦。調。貢。の。一。種。備

六郎兵衛助の件の一義を。戸賀九郎と八郎云渡して。逆旅の準備を
 いそぐ。獵所へ。別人を遣して。反命を致さ。ま。の。餘の。所要の。箇様。と
 言。町寧。命。大家。俱。言。兼。して。打。連。立。を。退。り。け。徳。而。辰。相。清。澄。の
 照文と。俱。逸。時。と。景。能。を。別。席。お。ね。退。り。て。今。番。又。蚤。崎。照。文。を。京。師。へ
 御使。遣。さ。る。小。より。逸。時。と。景。能。の。副。使。を。仰。付。ら。其。故。の。徳。と。大。江。親
 兵衛。を。償。ふ。死。事。の。趣。を。演。傳。れ。逸。時。景。能。兼。り。相。款。び。て。京。を。中。臣。等。の
 曩。小。犬。江。親。兵衛。の。好。意。お。馮。り。會。社。首。の。恥。を。雪。む。とい。へ。の。統。お。附。驥。の
 小。功。の。然。る。を。思。ひ。け。さ。り。信。一。大。事。の。副。使。を。奉。り。一。期。の。面。目。の。上。や
 以。死。繼。去。向。小。難。義。あり。とも。命。を。涯。り。お。仕。ま。さ。ん。相。あ。ら。ぬ。い。と。異。口。同。様。お
 言。兼。して。馳。宿。所。へ。退。り。け。り。故。お。辰。相。清。澄。の。則。兩。個。の。青。侍。を。逸
 時。景。能。の。代。と。し。て。猛。可。お。獵。所。へ。遣。し。隨。即。這。二。人。を。直。元。と。七。大。士。を。

事の趣を告知して義通君へ儀のどと反命を果させけり。介程の發崎照文の件
 靈芝を伴當持して瀧田へ入りて隨即義実主を見参りて御本意の如く京
 遣さる御使を照文又奉りて逆時景能も俱水路を那地へ赴くべしとある
 館の仰及御答の箇様々々又その靈芝の御曹司の獵所の山路を得せぬひん
 かの美の亦箇様々々と都々那意を告まわらせし。躬々靈芝を見せしれど義
 実主の歎びはうもあらず先其靈芝を見玉ふ。實は一根本にして十莖あり。その
 第四莖と五莖と第十莖の短くて周然と一其色異へ故ある哉百十數年の
 後の世は這祥瑞のとも。僅小傳は若者の偶然なるを悟らむ。天機の量
 知るべくもなれ。這時誰か思ひぬ。義実主の奇への稱く惜る心なく。依照
 文の返しゆけり。然び又妙真音音也。單節の親兵衛代四郎の安危境
 のも思ひ不憚り存けり。老館の御慈愛も又照文逆時景能も京師

へ使を奉り親兵衛を債取せぬ。館の仰儀と傳へば知り相賀びて左中右
 も兩館の御恩とあふ。俯て思ひ仰せられた鹿野山の樹根巖も數多し。浦の
 澳もそのうと傳稱く。照文の宿野を見て主人の妻はた日と女の來る日と向
 遙けた水路の行を勞しく且慰めけり。介程有司の京師へ調貢の下知りて
 夜とゆく日と多く急に。僅小傳は。東西成教む。其件々の黄金五千兩
 名刀五口。柘弓二十張。征箭五百幹。鐵砲二十挺。並塩鴉五拾。雙乾鯛五
 拾。樞綿五百屯。麻五百把。是れ。あの日。照文逆時景能の召れて君侯。見参る
 義成則仰き。旨あり。其第一條。今番朝廷。携家並空町。東山殿へ進
 る。貢物の八。大士の姓氏。勅許の朝恩。答奉る。爲す。且大江親兵衛。歸
 東の暇を賜らんと。願ひ。京まへ。あられも機臨。と。変ふ。心も損益。用捨ある
 べし。胡意。貢進の諸目録。と。呈書。の相渡。さ。因て。右筆。大岸。法六郎。を

十一郎も不従一と俱小京師へ遣え上書啓状の諸文書は汝等那地も届
るの日先と時宜を規ひ機微を蒞く書して其を奉るべしと素紙に花押を
墨印を拓ちて幾枚の照文を與ふる。其辰相清澄相傳へて首途見参の
礼儀のど果し照文逸時景能の俱お退せ。有司の黄金と種々の貢物私
用の米錢に至るまで漸々お受合ひ。港口の船積入れを這三使お相従ふ
右筆大岸法六郎並お野兵十名走卒奴隸二十餘名夫役六十名都ての
一百名お近きへ。憊而其通宵東西成許多馬お駝して終日洲崎の港
口へ半く渡海の船お載る程お這三使の所親聚い來く見送るの少く
登時照文逸時景能お人々お告別し主僕其曉天お齊一船お乗る
程お折よく順風おれば航工の纜を解れ帆を揚る西を投て走せける。
その日十一月中氣ののり一お是より僅お三四日を歴て稲村の城に豫より

武藏相摸の方へ遣て敵地の動静を撈らせる間謀見西三名かへ來る一
大事ありと注進を是より義成主其兵毎を庭門より縁頼の下お召させ
みづうその美を穿ぬる腹心股肱の近臣五六名左右お侍の両家老辰相清
澄お其次の間お伺候あり俱お其告をうち穿ぬる是則別義おあるを官
領扇谷定正主の道節信乃も野老の八犬士を酷く憎るよりあて其怨お
堪ざりけん武藏相摸下總上野越後五箇國の大軍とせ。當家魁を伐ん
と議するに云是則一朝の所以るを事情を原るお曩お定正の家臣根角
谷中二の政木頼を魅されて非罪の罪人何鯉孝嗣を阿容々々と通與る
時穴栗專作等と俱お虚氣に隨ひるを醒ねお鮎く五十子の城お封はる
那大刀自の事の顛末を箇様々々と訴へて定正听く訝りるがうちお閣
をたふすねい隨即箕田取蘭二お士卒幾名お従はせ。服大刀自お迎へ

よと前圖遣いける谷中二討皆迹もなき虚言也。あるはあられの取蘭二
 らの徒の五十子の城へかゝる事儘々と告ぐ。定正勃然として怒お堪へず。原米谷
 中二專作も情地不利きよりあつ。罪人河鯉孝嗣と脱るるをあつんきむ。开を
 以瞞え為る風と捕へ影と抱く。大か自の事を訴ぐ。君と欺く罪輕く。罪那
 身のゆゑ相従する。走卒奴隸に至る。緊き牢獄。困窮して。身と中で招了る。各
 と。敦園屋茶く下知あられ。取蘭二是を奉り。則谷中二專作も。結紐と緊
 多。榜向も時。谷中二專作其餘の親兵も。提れ。重覺言。如く。思へ。大か自の
 事。不思議との。餘のあり。狐狸の所為より。歎と思難る。开が中六苦しけ
 る。聲戦か。陳き。其田主を止む。稟も。是あは。所。那大か自の
 事。何で。偽を。稟も。然れ。主僕。銷や。失せ。往方。知。事。幻術を
 や。思。惟。れ。備。是。孝。嗣。親。友。の。狐。を。使。者。あ。は。然。然。と。ち。幻。術。を

仍ふ者。我を魅らり。孝嗣を掠奪り。走るるをあつんきむ。あつんきむ
 我。罪。饒。さ。る。は。あ。れ。ね。ど。願。は。權。且。頭。願。と。假。して。放。免。見。小。做。め。る。專
 作。並。小。親。兵。も。と。俱。小。樹。を。伐。り。草。を。其。拂。き。佐。と。孝。嗣。の。往。方。を。索。す。
 捕。捕。呈。ら。ん。其。事。倘。果。し。ぬ。い。その。折。頭。願。を。召。さ。り。と。も。御。賞。四。割。の。違。ふ
 わ。び。く。の。議。を。せ。え。あ。れ。愚。意。を。遂。さ。り。ぬ。い。と。叫。べ。專。作。親。兵。も。異。六
 口。同。音。中。を。陳。け。取。蘭。二。是。を。う。ち。せ。り。あ。の。日。の。夜。口。を。止。め。牢。舎。へ。遣。り。却。次。の
 日。お。至。り。主。君。定。正。谷。中。二。們。が。情。願。箇。様。々。と。件。の。一。を。せ。え。し。方。定。正
 頭。を。傾。け。て。其。美。意。あ。る。は。べ。然。れ。ど。事。小。假。托。と。逃。亡。せ。死。飲。料。り。か。ら。り。權
 且。谷。中。二。專。作。も。と。放。免。見。小。做。ま。と。も。他。も。果。して。願。の。如。く。と。其。事。も。做。り
 卒。る。ま。宅。眷。を。那。身。の。代。と。し。緊。く。牢。舎。小。敷。糸。く。べ。开。が。中。小。親。兵。奴。隸。の
 單。身。も。妻。も。る。子。も。る。若。の。开。が。男。女。の。胞。弟。兄。飲。小。父。小。母。と。禁。獄。せ。し。事

忽諸小まへにと約ら親して命がれ取蘭二美り退た儀のどく執行ひく。
 却谷中二と專作と隊の兵毎の禁獄を饒して御錠恣々とのい知せ且限は小
 百相をのり。孝嗣を捕補くまわす。倘その功る時其身のゆき宅眷も
 連坐の罪免るべし。勉より。と言示し。皆其縛の索を解允して放免
 児をまゝけ。是より。谷中二專作の同罪を走卒奴隸を分ち従へ。日
 毎不出く。退途とる。孝嗣の在処をまわす。毫も便宜を為さず左右も
 程ふ夏は過。秋も又八月の時候より。谷中二の孝嗣を緝捕の限り百
 日ふ垂とまら。取蘭二就。京を義あり。又百日の日処を願ふ。取蘭
 二も役柄をば。谷中二を惨刻もあられ生平の同氣相求め。俱に孝嗣を
 諳ちたる小人をば。王君の執成京より。又百日の用捨あり。今茲の冬
 十二月を限り功を奏せ。と分付。是より。谷中二專作の二隊あられ野

兵を領く。或ハ親を奪。名と度。武藏相模伊豆信濃上野下野常陸下
 總ま。約三四十里四方の漏を隈。孝嗣並那幻術とよまる者。あるを
 悄悄地不穿。既。十月の晝。照驗と。俱に五十子の
 城のかへ。又近郊を求。程十一月の初旬。料。黒田河の邊
 中。那餘類一人を捕。其故。武藏野の程遠。那
 穂北。落。七有種。今茲の夏四五月の時候。八犬士別れ。後。義
 父氷垣。夏。重病。構。妻の重戸。共侶。一日も暇。け。看
 病の幼。九月中旬。某の日。夏。身。重戸。哀。悼。い。ど
 ゆ。安。事。七。追。薦。又。幾。許。日。過。冬。十月。晦。日。中。陰。積。果
 去。日。有。種。重。戸。向。八。犬。士。の。徴。安。房。赴。親。の。看
 病。暇。あ。一。も。安。不。古。と。向。且。故。翁。の。病。臥。の。時。里。見。殿。と。り。人

夢を賜り義を授けられ安房へ使を遣りて八代氏の人々の公卿の死去を告ぐや
 と思ふに什麼と商量をなす重戸の敢異議をなす。さう候べしといそぐ有種の
 其次の日朝日八代士並ふ、大照文等小御へは消息二三通を書き寫れ且此の
 人情を準備する老僕世智小才二の使を分付く。其十月三日の朝のそ
 が立ち出づ遣りけり。這世智小才二六日暮大角現八の事ありしより八代士
 相識られ且心利する者多れば有種の使を課する小胡意二人を用せしむ。
 他見を憚る書翰多し他路を不慮の急病ありとも一人の先へいん
 為之憐れ心を用ひし然に世智小才二俱に逆旅の準備をあり其朝早天
 より穂北の宿所を立出づ。墨田河原まで來りける程小才二猛可小腹痛ま
 堪りて走りぬる。介る小才の地方の賣津船公多。蟻利八と喚做さ
 者世智小才二小父るれば權且丹里小立寓ぐ。將息して瘥る亦復路をいそ

邊より一度お吐と稠入る耳を串く聲奇高くやされ魁見正可小才二谷殿の
 御説を禀て悪大士の支黨を緝捕の頭人根角谷中二尤栗專作あり在る。索
 被れと喚れ敬馬に怖る世智小才二老波も共侶小跪時酒醒て俱小云と陳
 まれども谷中二を分説を聴く。兎兵小下知して軒々と主客二名を結紐せし。開
 が中二小才二の心早に者多れば緝捕氏のうち入りて小才二方小身を倚ぐ。壁に
 落ちる処より衝と推破り庇向小脱れ出づ。穂北を投ぎ飛ぶ似糸逃亡せし。谷中
 二專作兎兵も事小紛れて知る。けり。憊而谷中二兎兵小下知して世智小
 と利八小十を屢中させし。只那道節信乃の在処を根穿り垂欲りて責
 問ふ。利八夫婦の八代士をよも知ねば。又世智小才二の左右と頼陳ト
 たらければ谷中二敢実とせし。両箇の約裏あるを見出して兎兵小披を檢る。係
 果して六の内小落點餘之七有種が八代士贈る書翰あり。且其書中小河鯉佐

太郎の政樹又政木作 大全孝嗣右龜屋次園 太卿之 共の 結城の 左右川を 入
 水の事と 悼む 見え 又里見の家臣蛸崎十一郎 照文と 大法師寄
 一通の謝書も ありけれ 谷中二專作 們が 歡び 則ち 書翰之
 通を照し 据と して苛 銳く 世智介と 拷問せ 世智介送 脱る 路を 有種
 素生首 道節信 乃們 の八大 士且 義久 落船の 家寓 居て 復讎 言の
 事あり 後里見殿 不徴 皆共 侶安 房へ 赴け 又河鯉の 政木全 孝嗣の
 曩の 死刑及 び折 大江親 兵衛不 解近 其助 助と 伴れ 上總 到る
 素藤征 伐の 日孝 嗣軍 功中 又親兵衛不 伴れ 次園 太卿 之噴 做る
 浮浪人と 俱不 結城へ 赴く 路程 左右川橋 中憶 敵の 鑊砲 不敷 墮る
 されて死活 を知る 一と 云豫 少る 那噂 まで招 了り 又の 小可の 老僕 小才二 喚ぶ
 做者 俱不 安房使 不立 小才の 腹病 發り 路去 の小 可の

小父い げは 這利木八 許立 下り 將息の 為日 と銷 甘の 然那 犬士 の孝 嗣と 之ら 之ら
 小父い げは 小可の 聊由 干渉 之ら 以て 饒を 乞ふ 勸解 る谷 中二 うち中
 原来其 小才二 奴も 皆一 細不 捕る 一知 ぞと 走る 其奴 穂北 逃か ぬ
 告る 有種 之逃 亡し 疾推 鬼て 搦捕 先世 智介 小穂 北の 光景 之尋
 向ふ 世智 介答 然一 邑約 二百 餘電 皆豊 嶋の 殘黨 中莊 客を 武
 藝を 嗜む 有種 之不 屬さ る一 曩大 山道 節の 復讎 言と 助助 る本 事效
 知召 れた 之と 谷中 二躡 躡て 現あ る今 小勢 之推 寄る 之効
 る一 圓五 十子 立り 日足 之事 の趣 を上 御下 知る 依る 專作 諾す
 る然 之夥 兵四 五名 留在 之地 方の 長を 召せ 家守 之守 居る
 人々の 之を 宣示 谷中 二俱 十個 許の 夥兵 們世 智介 之梨
 八丈 婦を 牽立 之蕉 火路 を照 五十 子の 城を 投て 有悠 程小 才

二の甲夜の間に穂北へ来て則東人有種夫婦中途の禍事箇様々々世
 智介の小父梨八の宿所也。扇谷家の緝捕の頭人根角谷中二穴栗專作と喚
 做る一隊約十七八名の猛者の為小柄捕られぬ故の箇様々々と御向黒田
 河の邊で小才二腹の病着渡り故小世智介の小父梨八許立より。權且將
 息ある程小世智介の管待酒の酔不無せ口の外八犬士のあまでも説誇り其
 聲洩れ。那禍鬼不遇と云其事の際略と喘々告知され有種つらつら聴て
 重戸をたたくらる。是亦八犬士の復讐の後那討隊の寄や来ぬと云。大士の毎故
 翁と俱敵と待たも事洩され安らぐ。今番救ふ八犬士の安否と訪む欲
 き。我使休より事發覺れて苗害立地ふら及ぶ。是則天之命討隊向々矢
 種の法防戦免れけり。家火を放て腹を研今怖ら怖らと喘と重戸の
 推林不ゆる。息思欲する勇士の本性理の不ぬれも死する易く生る難く憶ふ其

根角谷中二とやら一隊僅十七八名と云。今宵推寄せ来へる。他は必五子
 へ還りて身勢を乞從へ。出更と成るる。羽音の朝閉る。豫知せぬ如く。總獲嶋
 山院の住持の法印の奴家先妣の弟也。出家不似ける。義侠あり。豫知する據
 たり。且境内の廣といへ。這里人を送る。伴ひは。憑と乗る。必や舎藏れん。權且
 那里の時を俟て恥を雪る便直も。人喘と戦致。あまの勇士の譽言不假る。然
 と詞雄とあ。謙と有種。沈吟たる。頭を拾は。領は。然とい。其理あり。今我躬
 方ハ二百餘名敵の三倍五倍せん。寡をり。敵勝とも。躬方ハ戦致。あまの勇士の譽言不假る。然
 殺して名と成せ。仁人義士の為。所現立退く。あまの勇士の譽言不假る。然
 侶の徑。安房へ赴て。八犬士。憑と乘る。見殿。仕へぬ。易く。あまの勇士の譽言不假る。然
 ると知り。戦ぞ。退は。恥を思。阿容。今。安房へ。一圓下
 總へ退て。後。亦。張。小才。暗號。の。見。吹鳴。七。里。人。疾。集。合。

やとの小才二あるゆゑ柱の吊る法螺掻合を走り出さ吹立らる事の火急を御
 知らせ種北一御の莊宅百十數名多々竹槍連切を引提く時を程は走
 下總皆有種分書院の廣庭へ其茶石の像く來會一有種縁類も立出て那凶
 變と告知せ且敵の英氣と避ん與一圓躬方の衆人を伴て下總其某の山院
 いるんと思ふ事情を詞急迫しく説示せ大家咄けりち牧馬く并が中其某の故老兩
 三名詞ひとく答るや故東人氷垣翁の時より我れ皆御庇を各宅眷と養
 ふく今日お至れるお供の時誰り異議せん死きとも生るとも東人の隨息を
 背にあらんやといへば大家異口同様に別議ありとを答ける有種足るち空ま
 各各の早く宿所不走りかへる要用の家伏財宝と或馬駝或ハ枋掛皆共
 侶今宵の中千住河原へ必去那河原の我船の大平駄三艘ありそれゆ
 足るお供の他船載せるとも便直と以その船の價を船主取とせ或ハ又

馬あつ人々駝して歩ゆより申もよき夜も明け五十子討隊の大勢推寄
 せまべ脱落させるといへば準備の金二百兩あり件の故老等も逃與
 去りて大家孰く感せざる宛相あらゆといふ心も果共侶自身を起し外お出
 宿所を投て走りける登時亦有種の小才二と家の農人の心利を迅行す西五名
 急召とせ若們今も家伏を河原へ運出せ我船載畢り河
 邊遠見して五十子も刃心固の城の士卒も討隊の大勢未だ見ば早くあの
 種北へ走り還りて里の家毎火を放て烟紛れ立去て歩ゆより我投を下總
 那山院へ尋て來て爾後れて敵の爲に慮がせられて後悔する勉めかかと敬言
 下總までの路費を取せども配早く定りし是も家伏をとりぬ重戸が指揮
 従ふる一家兒の奴婢もど虚う者る一霎時の程馬駝或ハ長韓樞藏
 ぬ或ハ窓裏に枋掛て千住河原へ遣りし約束莫二時有餘なりて要物の什物

皆大平駄の多船三艘不載け。小程の這穂北を莊客も各宅眷と共に家仗を
 申來て船不載るども。特小夜長は時候る。當時の河邊の曠々る郊原を
 輩取立たる枯草あるも。人煙猶遠ければ是を知る者有りけり。既にして一村落の里
 人も東西咸出果し。流の徒ふ者高を操り歩も行く者馬を牽て有種重
 戸奴婢と俱下總を投てをけり。吾が中も小才二有種の家の人四五名。河の前
 面立明く敵の討隊の寄せ來身と今扱くと候程も。夜の皎々と明けり。話
 分兩頭當晚根角谷中二兎栗專作の野兵ふ世智介と梨八夫婦と牽せり。路
 次といえども程近くな。丑三刻時候。五十子の城か分來り。躬々箕田取蘭二の
 宿所不覺く慌忙く鼓を喚覺して。則取蘭二那有種が三通の書翰と申す。七
 事の既末略と告ての。御高在下。石里田河の邊。賣津船公蟻屋梨八が宿
 所也。穂北の御士落點餘之七有種と喚做を者。老僕世智介並梨八夫婦と

搦捕ける。よ。河鯉孝嗣が任方。又那大山道節。大塚信乃。大坂毛野。八個の
 惡黨の在処も。事詳不知れ。然當夏前。面圖の法場。河鯉孝嗣と掠畧
 未幻術兒。兀自道節。即も伏家の惡少年。大江親兵衛と喚做を者。と云世智介
 が招了。よ。在処を敵い。皆是仕。里見不在。獨孝嗣が存亡詳る。ね。他
 水馬水技。よ。水を。入水。も。溺れ。七。那親兵衛と共。侶。仕。安房。在。え
 款。是。も。亦。知。る。べ。く。却。那。落。點。有。種。道。節。信。乃。等。と。相。資。て。あ。の。春。當。城。の。乱。妨
 未。け。道。賊。の。一。人。も。下。の。下。人。一。百。餘。名。を。俱。不。穂。北。の。莊。在。在。皆。是。豊。嶋。信。盛。の。殘
 黨。之。の。殘。孽。て。知。り。一。徑。不。穂。北。へ。打。向。て。搦。捕。ま。く。思。ひ。か。も。我。統。る。隊。兵。を
 一。百。有。餘。の。強。敵。を。搦。ん。と。易。う。ね。惴。る。心。と。推。鎮。せ。い。そ。死。か。か。ひ。ひ。た。い。い。と
 是。等。の。趣。を。言。上。わ。か。一。期。の。幸。ひ。御。執。成。を。ね。た。ま。う。と。申。下。慢。心。鼻。鼻。春。蟻
 め。て。説。誇。れ。取。蘭。二。所。其。書。を。閱。し。且。今。宵。月。の。掙。を。差。言。と。大。く。さ。る。に

猛小獄吏を召よむ。世智八と梨八夫婦と牢獄へ遣へる。程不埒の鶏の
 數鳴く。朝霜白く天へ明け。徳而箕田馭蘭二。早天より出仕て。則主君定
 正。有種が書を呈上。根角谷中二穴栗專作們が大功の事の顛末。つ
 づ随ふ漏をとり。生物世智八梨八夫婦の及道節信乃等。八犬士の在る
 身。且河鯉孝嗣の事。又落點有種の事。首より尾まで。谷中二專作們が朝心
 趣を言。詳示告。定正歡び。氣色小見え。則馭蘭二命。根角谷
 中二穴栗專作們の考。嗣を捕む。其往方を穿鑿。且逆
 賊道。即信乃毛野等の支黨。穂北の御士。落點有種。が老僕世智八並ふ
 世智八。小父蟻屋梨八夫婦を。昨宵墨田河の邊。擲捕。早より
 其功莫大。あをり。他第一隊の舊罪を。皆悉赦免。職祿故の如く。る
 べし。就く他。多代。て。禁獄。ある。宅眷親族。も。饒。一。出。て。宿所。へ。還。ね。そ。ま。

よりも猶急ぐ。兎の逆徒有種を討隊の一。今日穂北へ。緝捕使。馭蘭二
 汝と谷中二を。兩頭人と。穴栗專作を。軍監と。せ。逞兵。三百名。を。從。之。早。く
 穂北へ。打向。一人。も。漏。ま。し。擲捕。り。ね。時。後。れ。逃。れ。亡。る。ん。と。く。せ。よ。と。い。そ。を。馭
 蘭二。の。首。を。退。り。て。有。司。と。相。共。ふ。谷。中。二。專。作。們。を。召。よ。む。舊。罪。赦。免。の
 恩。命。と。有。種。を。討。隊。の。頭。人。と。す。と。ある。君。命。を。云。渡。せ。谷。中。二。專。作。隊。の。兵
 迨。天。へ。も。升。る。心。地。一。く。肩。を。尖。り。脛。を。張。り。俱。小。專。作。が。宿。所。集。合。て。先
 武。具。を。を。敷。正。け。る。余。程。不。其。田。馭。蘭。二。の。猛。可。不。士。五。百。名。を。召。聚。へ。人
 中。飽。ま。し。戰。飯。を。喫。せ。馬。の。豆。草。を。飼。く。谷。中。二。專。作。等。と。俱。小
 是。を。領。く。五。十。子。の。城。を。半。の。辰。牌。の。初。刻。を。連。り。路。次。を。承。り。ど。も
 五。十。子。より。穂。北。迄。阪。東。路。三。四。十。里。一。助。の。程。を。既。小。己。の。五。刻。に。至。り。時。候
 稍。十。住。河。を。渡。り。程。不。忽。地。穂。北。の。方。下。り。黒。烟。天。を。沖。り。猛。火。燔。々

と燃升るを。馭蘭二谷中二專作等と俱も前も遙も瞻も仰も。原来も逆徒もの
 自燒して逃も亡もるをもあもんもむも捕もる漏もしも兵も母もと喚もりも馬も拍もれも。其も直もの
 走もりも。穗も北もの莊もをも見もれも。一も聚も落もの白も屋も幾もとももも。皆も火もの被もるも隈もの
 わもねも。輒もくもらもちも入もれも。半も分も燒も落も後もの士も卒もと找もすも。俱も小も打も入もて檢もすもふ
 自燒もの屍も骸も一も箇もももちも。只も近も村もの莊も客も等もの火もと滅も禁もんとも。還も途もより走も
 て聚もりもを馭も蘭も二谷も中も二專も作も等も有も種もが支も黨もをもんもとも。或も斫も伏もせも。敵も倒もすも。矢も場もふ
 索もと被もる者も二も三も名もありも。餘もの怕もれて逃も去もりもけも。天もの舉もや定も正も里も見もを怨もとも。
 つもいも。まもりもくも。水も陸も西も路もの大も軍もと起もりも。是も其も事もの張も本も教も分も教もありも。蠻も觸も戰も場も異も
 魏も似も蝸も牛も角も上も誰も祈も風も。乱もれも蘆もへも治もれる江ものもかもらも。角も中もも渡もせも。兩も國もの
 橋もの詩も詞もの意もをも知もすも。欲もせも。下も回もより次も々も。解も分もるを聽もねもかも。
 南總里見八犬傳第九輯卷之三十一終

南總里見八犬傳第九輯卷之三十二

東都 曲亭主人編次

第百五十回 憲重憲儀聚兵使を同くす 行包在村 忠奸諫と異ふ

復説箕田馭蘭二根角谷中二元栗專作們の近村より來りも。莊も客もとも。斫も
 仆も。或も擗も捕もまるも。有も種も並も穗も北もの里も人もの往も方もも知もるも。一も日もの功もるもを
 怕もれて隊もの兵も母も下も知もりも。既も死も。近も村も見も五も六も名もとも。尚も燃も殘もる火もの中も一も箇も一
 箇ももも。思もひもの隨も焼も。其も首もとも。皆も斫も會もすも。其も頭も一も口もの刀もの燔
 刃もちもけも。是も究も竟もの東も西もとも。首も級もとも。共も小も會も持もすも。勝も開も之も聲も揚もすも。當も晚
 五も鼓もの左も側も五も十も子もの城もかもらも。あもけも。隨も即も步も上もるも。臣ももも。御も高も路もをも急もぎも。穗
 北も推も寄もすも。有も種も並も那も里も人も們も。世も智も人もが擗も捕もれも。をも知もりも。免もれも。一もとも。

思ひけり。里の家毎小自焼して逃亡する力及至。逃後れる奴毎と搦捕らひ。其
 中亦有種の家焼跡。自滅の屍骸五六個あり。又その中一人腹を斫る。是
 必有種る。思ひけり。生拘の逆徒。見せしめ。皆燔熾り。いへ。分明き。と
 宣せし。其亡骸の邊。灰に埋れる。大刀を。と。猜し。い。大。是。有。種。の。い。
 人。因。御。実。檢。を。ね。た。し。り。の。と。実。事。一。登。る。不。哄。へ。有。司。其。五。六。級。の。首。と。燔。る。
 刃。と。邊。與。け。り。あ。れ。も。燔。首。ま。れ。い。実。檢。史。及。び。れ。を。信。而。次。の。日。根。角。谷。中。二。箕
 田。取。蘭。二。と。俱。小。主。君。定。正。お。見。參。を。定。正。則。谷。中。二。今。番。の。功。を。答。さ。す。且
 恩。命。あり。今。より。忍。岡。の。城。小。退。り。故。の。如。く。城。の。頭。人。さ。べ。因。て。穴。栗。專。作。を。谷
 中。二。の。も。小。隸。て。他。を。忍。岡。遣。入。間。常。士。卒。と。敬。言。め。宜。く。非。常。小。備。へ。但
 去。逆。徒。有。種。も。首。級。の。虚。実。分。明。さ。す。故。小。權。且。鼻。首。の。美。及。び。然。世。智
 介。と。利。木。八。自。餘。の。逆。徒。も。刑。罰。と。さ。す。異。日。倘。有。種。小。似。る。者。と。搦。捕。ら。る。

わ。他。等。も。誰。う。よ。真。と。雁。買。と。知。る。者。あ。ら。當。城。の。穂。北。へ。遠。り。則。件。の。罪。人
 們。谷。中。二。汝。預。け。て。忍。岡。の。城。へ。領。て。仍。那。里。の。牢。金。只。閉。籠。措。て。猶。餘
 類。と。穿。鑿。金。せ。と。言。町。寧。小。課。ま。れ。谷。中。二。欣。然。と。言。兼。と。退。り。隨。即。穴。栗
 專。作。の。館。の。仰。箇。様。々。と。宣。示。一。准。備。と。い。を。せ。却。獄。吏。より。世。智。介。並。利。木。八。夫
 婦。と。自。餘。の。生。拘。兒。們。を。皆。受。令。と。故。の。忍。岡。隸。を。走。卒。取。隸。小。牽。せ。俱。五
 十。子。の。城。を。退。り。忍。岡。へ。程。小。妻。恋。阪。の。頭。を。來。け。る。時。前。面。より。人。連。立。て。三
 十。這。方。へ。來。り。是。則。別。人。を。那。穂。北。の。近。邨。身。莊。客。の。御。向。取。蘭。二。谷。中
 二。們。が。與。小。或。斫。殺。され。或。結。榎。ら。れ。て。五。十。子。の。城。へ。牽。れ。者。の。宅。眷。の。逃。る。者。邑
 人。小。事。任。と。と。知。り。且。哀。し。且。然。堪。ざ。れ。俱。五。十。子。の。城。へ。參。上。り。事。は。冤。枉。を
 訴。て。生。拘。れ。る。良。人。弟。兄。と。極。合。と。商。量。さ。る。其。訴。訟。見。二。十。名。村。正。と。先。の
 立て。者。谷。中。二。們。小。逢。ひ。件。の。邑。人。の。宅。眷。毎。良。人。弟。兄。叔。侄。の。面。と。駭。示。く

縛られて相牽るゝと見るゝの堪ぢ。ある何故を。なる不其妻兒子の前後も。こゝに携
 へ粘々啼哭へ。其餘の谷中二門の去向を塞死寛と叫びて。俱云云。訴るを谷中
 二も耳中。被け。眼も。瞪る。聲苛々。這奴們甚大胆。法度を怕れ。上と。茂
 まで。這罪人等。中途。奪取。多欲。其の問でも。ある種。支黨。多疑。ひ
 る。搦捕。ねと。喚れ。従。走。卒。奴。隸。多。美。り。ぬ。と。答。も。果。勢。以。悍。走。り。鬼。て。我
 蹴。仆。毆。死。伏。せ。囚。索。被。る。升。か。中。の。余。者。我。作。刀。と。拔。是。め。り。て。敵。の
 見。と。罵。懲。と。權。威。小。勝。り。も。る。壯。伎。の。脚。疾。忽。地。潑。と。逃。去。て。非。理。非。法。の。不
 遇。の。只。老。と。婦。幼。の。結。ね。た。泣。叫。ぶ。追。立。々。新。舊。共。忍。圍。の。城。へ。牽
 り。て。死。囚。牢。中。入。れ。ら。け。任。而。根。角。谷。中。二。の。次。の。日。元。栗。專。作。と。五。十。子。の
 城。へ。も。り。せ。昨。日。又。中。途。で。有。種。が。支。黨。と。言。く。搦。捕。ひ。を。其。交。名。を。注。進。を。皆
 是。筋。を。証。言。る。と。定。正。法。く。て。竟。亦。悟。を。連。り。功。あり。と。譽。て。猶。去。の。後。心。を

屬。追。捕。ゆ。く。懈。る。べ。う。と。旋。て。專。作。に。還。され。然。り。件。の。邑。人。們。一。ひ。を。二
 へ。非。法。の。緝。捕。の。良。人。を。殺。され。弟。兄。牢。舎。に。敷。系。れ。る。と。怨。を。其。冤。と。又。訴。さ。く
 欲。され。も。先。度。不。懲。り。て。果。し。ぬ。陰。謀。叛。く。心。も。足。夫。中。て。東。八。州。の。管。領。小。盾。衛。く
 術。の。あ。ら。れ。打。歡。の。猶。餘。缺。の。這。一。御。係。り。ぬ。幸。え。け。り。と。さ。る。不。思。返。り。て。黙。止
 け。現。世。と。い。ひ。さ。う。上。の。法。の。守。る。下。の。怨。の。遣。る。方。今。尚。あ。り。孔。子。の。又。春
 秋。を。為。る。ん。欲。と。識。者。の。嗟。嘆。不。堪。ぢ。け。り。介。程。小。扇。谷。修。理。大。夫。定。正。憎。思。ひ
 道。節。信。乃。毛。野。第。の。八。犬。土。の。存。所。及。河。鯉。の。政。木。孝。嗣。の。ゆ。ま。も。今。番。詳。し。知
 了。い。々。怨。の。堪。され。左。さ。右。さ。の。尋。思。を。多。く。稍。思。ゆ。る。あ。れ。素。より。當。家。は。屬。城
 ち。ける。大。塚。へ。使。者。と。遣。り。て。城。主。大。石。見。守。憲。重。其。子。源。左。衛。門。尉。憲。儀。父。子。と
 五。十。子。の。城。へ。招。け。よ。せ。閑。室。で。面。談。を。當。時。扇。谷。山。内。兩。管。領。小。四。個。の。大。夫
 ち。り。長。尾。大。石。小。幡。白。石。是。之。を。管。領。の。家。の。四。老。と。言。又。持。資。入。道。道。灌。あ

長尾景春と共に扇谷の大夫之因て長尾御田田作を内管領と唱ふの中
 小幡白石の山内顯定の家臣も長尾も素是山内の家の元老なり一景春
 年来顯定と不和の故に遂に定正に屬すれども又叛じて獨立の志あり定正これを
 後悔して君臣の和順既成るの如く景春の今も尚上野白井の在城して五
 十子を出仕せし又持資入道道の文武の達人當家の軍師忠誠稀る良臣るれ
 定正の仍所所多く道違ふの故に屢是を諫る野水舟横りて言竟言空容らざる
 諺者の為身亦危く位子足目が眼を東門門に掛け屈原漢父の辭を為り心小
 似る時やあれ竟病着假托托其子新六郎助友と俱相摸摸の糟谷の城小
 在の忠魂義胆移るあわねど執執力力かかかの如如ああれ久く出仕せざらけり間話休
 題然然又定正日大石憲重憲儀宿恨の方方る事事の顛末と告告ては
 豫豫あるゆゆれ如如那那道道節節信信乃乃毛毛野野們們の八八犬犬氏氏の當家當の怨敵怨刑餘刑の乱賊乱罪死罪

容容ざる者者多多里見義成是を扶持扶持て敢隣國の好好と思思ふ又我我舊臣舊河鯉河孝嗣孝の怨
 言不忠の罪ありとて置置死刑死の刑なりとと折折亦亦那那惡惡犬犬氏氏の一人一も大江親大兵衛兵仁と
 喚喚做做を兇少年兇が神出鬼没神の幻術幻とて其日其の実實檢檢使使根角根谷谷中中二二麗麗廉廉等等と思ふ
 考考則則孝孝嗣嗣とおて上上總總走走り里見里の與與小小戰戰功功也也其其後後孝孝嗣嗣ハ結結城城也也早早滿滿の川川
 陥陥り死死ららしも也也或或の恙恙ありもいいららずも日日穗穗北北の郷郷士士洛洛鮎鮎餘餘之之七七有有種種が
 老僕老世世知知自自と喚喚做做を奴奴と擲擲捕捕りける并が招招て事事發發覺覺れ且且有有種種也也亦亦惡惡八八犬犬此
 支支當當黒黒ららりやすや緝緝捕捕の士士卒卒と遣遣せし穂穂北北の賊賊民民皆皆自自燒燒て逃逃亡亡る欲死
 去去る欲宗宗後後の屍屍骸骸ありといいへも燔燔首首を分明明るを約約莫莫かかの如如に惡惡黨黨の我
 封封内内不不横横行行を隙隙と現ひ虚と施す年來來里見里の間者者小小做做りて我我不不冠冠せし暴暴行行機
 變變は皆皆義義成成を使使す所問問ぎて知知るを死死の抑義義成成の父父里見里義義実実の素素是是吉吉嘉嘉吉吉の亡
 人人多多一一小小安安房房へ流流寓寓ららしり山下山定定包包を討討滅滅して神神餘餘の迹迹を横横領領満満呂呂安

當家の躬方へ又下總の千葉孝胤及結城成朝常陸の左武高久鹿嶋又濟我の
 御所成氏主上野の長尾景春へ源在衛門儀廻勤して合戦の義と談ま。願定合體を
 たんぬ。詩我の御所も恨と思ひて必や従れん。又越後片貝の船大刀自女流乳も義
 勇あり且故夫人蟹目前の母多ふ。告まれば恨まれ片貝並白井其田駒蘭
 二遣えの義を先よりあるて。言送も宜示せ。憲重憲儀言義して俱ふ
 大塚の城へ退りける。徳而の次の日大石石見守憲重の伴當より從へ鎌倉へ赴
 程。只一宿して第二日の朝巳牌時候山内。管領願定の郎不造りて那家此權
 臣。齋藤友兵衛佐高実の對面を請て那議を云と告て。官寡君の情
 願別義あり。一族不和。家門の恥。當館と合體あり。今より兵を合。力。勤
 志俱小里見と討滅して。且悪八土と虜め。其宿怨を復せ。安房上總と等分。分。分。
 送。小數郡を加領せん。の義。御同意。さる。近國諸侯の大軍と合して。征伐をいそぐ。

修理大夫の意東。如く。宜く。仰上。は。の。詞を低く。利。論。詳。り。
 然。高実。都。て。ある。て。躬。退。り。て。與。對。則。主。の。願。定。小。扇。谷。殿。の。使。者。大。石
 憲。重。が。口。狀。固。様。と。と。那。意。を。具。告。願。定。是。を。先。高。実。の。意。見。を
 向。索。高。実。答。て。然。小。扇。谷。殿。當。家。の。叛。逆。の。由。軍。威。振。を。諸。侯。離。して。只
 管。領。の。名。あり。の。管。領。の。威。勢。を。然。小。里。見。を。恨。る。為。干。戈。を。動。す。欲。され。も。自
 力。及。び。し。けれ。ば。詞。を。低。く。一。礼。を。篤。く。て。當。家。の。資。助。の。馮。ら。ま。其。利。の。及。び。當
 家。の。存。の。今。其。和。睦。を。饒。一。合。戦。して。俱。小。里。見。を。滅。し。兵。權。愈。當。家。の。歸。り。
 起。ま。ん。と。臥。させ。ん。と。館。の。隨。意。を。げ。れ。ん。と。吉。事。多。く。早。く。脚。和。睦。あ。れ。か。と。
 且。其。況。且。虜。れ。願。定。連。り。ち。點。頭。て。其。議。我。思。所。と。相。同。然。小。憲。重。の。對。面
 せん。先。其。准。備。を。い。そ。ね。と。高。実。飲。み。養。て。又。客。房。へ。赴。け。り。苟。早。て。願。定。の。禮。服。を
 装。ひ。近。習。を。從。て。正。廳。お。か。て。來。躬。て。上。坐。着。せ。り。老。黨。弱。黨。齊。々。と。左。右。二。側。に



侍り。登時齋藤左兵衛佐高実の大石石見守憲重は案内をせりて主君の見
参入れり。頭定則坐を賜ふ。憲重亦答る。既高実をりて出られ。修理殿
定正の来意別議多し。両家和睦の爲に我願ふ所。且里見義成と征伐の事。其謂
西家合體。且近國の諸侯と率て俱小里見と討滅さ。遂北條長氏も免
脱て陣門の降る。去る。八州平治して永く同宗の親と失る。欽此。是は優
んや。我近死日。六御まで出陣して那川の上まで俱不誓て異論さ。則五十子の城小
入て諸隊の軍配と定む。罷歸りて是等の美を宜く修理殿不傳て。大義我
そと。勞ふ。親名刀一口を憲重に取ら。其後御食饌を薦め。伴の士卒亦至
る。ち。山海の珍味とりて。酒飯の儲ふ。干らぬ。め。ければ。憲重主僕欽びて。俱小拜
謝し。歌舎も退りて。次の日。歸路を赴く程。又一宿中。第二日。早く。五十子城小
か。る。隨即。主君。定正。不見。参りて。山内殿の心。答。箇。様。々。と。和睦。同意。の

事及両家合體の旗旌と。諸侯を連ねて水陸より里見義成を伐んと云會盟
夏。の。餘。の。所。要。も。儘。々。と。漏。ま。ま。反。命。を。語。次。不。然。も。那。里。の。款。待。の。の。盾。子。ら。り。と。り
之。告。て。首。尾。の。宜。し。を。祝。せ。り。定。正。滿。面。う。ち。笑。れ。る。其。然。の。の。う。ち。も。あ。る。則。憲
重。を。勞。ひ。大。塚。の。城。へ。返。り。其。後。又。石。濱。の。千。葉。下。總。の。千。葉。宗。我。の。城。氏。結。城。の
成。朝。へ。大。石。源。左。衛。門。尉。憲。儀。を。使。者。と。て。里。見。征。伐。の。義。を。御。知。さ。り。定。正。頭
定。西。管。領。の。連。署。と。て。軍。兵。を。催。促。ま。又。常。陸。の。左。武。鹿。嶋。白。井。の。長。尾。糟
谷。の。御。田。片。貝。の。服。へ。箕。田。取。蘭。二。と。有。功。の。老。黨。を。使。と。さ。り。出。陣。を。促。さ。り
甚。急。を。中。小。長。尾。御。田。服。大。刀。自。の。扇。谷。不。從。事。の。大。夫。或。は。定。正。の。故。夫。人。蟹
目。前。の。母。を。違。背。あ。る。も。あ。る。又。石。濱。の。千。葉。自。胤。の。封。内。廣。く。且。扇。谷。の
管。領。小。附。庸。の。小。諸。侯。も。大。阪。毛。野。大。田。小。文。吾。の。あ。れ。今。那。虎。の。威。を。借。り
舊。羞。を。雪。ん。と。思。ひ。け。れ。欽。び。て。其。催。促。不。從。ひ。け。り。又。甲。斐。の。武。田。信。昌。相。模。の。三。浦

上杉右京亮
高足多
去の成氏
菅領の執

義同へ顕定より相徇らる。然れども這面諸侯の北條長氏の壓を城と離さく。遠く來會せざる。或は嫡子或は親族の武功ある者と大将として士卒を進ませ。と制度せしめける。單高我の足利成氏王の扇谷山内の両管領不舊怨あり。嘉吉のむら。結城落城の後成氏の兩兄春王君安王君の擒とる。無井の金蓮寺を害せしめける。成氏之を恙る。忠義の舊臣不拍養せられて世と潜ひて在せし。長尾入道尚賢の地が執立まらせむ。鎌倉小居なり。京都將軍願ひ京。則成氏を關東の管領と仰せしめける。成氏父兄の怨不堪。惜地不近臣と謀て。上杉憲忠と較捕り。上杉の族起り立て成氏と攻て。鎌倉を追はれ。且成氏の乱政を室町殿政。不惣高宗まふ。則成氏を解官。上杉房顯の父を關東の管領。成されし。是より成氏高我の城小在り。屢面上板。戰て。鎌倉小居。かろ入らむ。欲されども勢ひ微小。て。竟果果。刺文明四年小至り。顯定緊

成氏を攻伐す。高我の城を拔け。成氏則千葉小走りて千葉陸奥守康澄を。憑て居り。徳而文明九年。信乃現八組打の前年。成氏文明。顯定と和睦して。陽中周秦の差別あり。似れども。迷不怨を解く。由るは。定正亦成氏と快らむ。俱小胡越の思ひを做して。事訪ふ。もあふ。けり。然る大石憲儀。是等の事の顛末。よく知り。れ。陪。今番の一。幾い。あんと。心許る。思。あ。却已。成氏。あ。れ。伴當。多く。従へ。則高我。不。封。那。御所の權臣と。や。え。る。横堀史。在村。對面を請ふ。里見を征伐の一議を。止。り。小。定正の宿怨。箇様々。と。八。大。士。の。事。落。船。有。種。の。事。及。河。鯉。考。嗣。の。事。ま。都。り。里。見。を。非。理。と。誣。て。且。誘。ふ。小。利。を。以。て。其。言。果。て。又。い。や。る。の。美。御。所。も。御。同。意。を。俱。小。御。旗。と。找。め。ぬ。摠。大。將。小。仰。せ。ま。る。て。凱。旋。の。後。鎌。倉。へ。返。り。居。ち。や。う。ん。の。美。定。正。が。心。單。を。敢。約。東。仕。る。小。あ。ら。ん。

意実ハ
上杉憲
基の上
杉安房
是又清
方を憲
實の弟
杉安房
實の弟
杉安房
實の弟

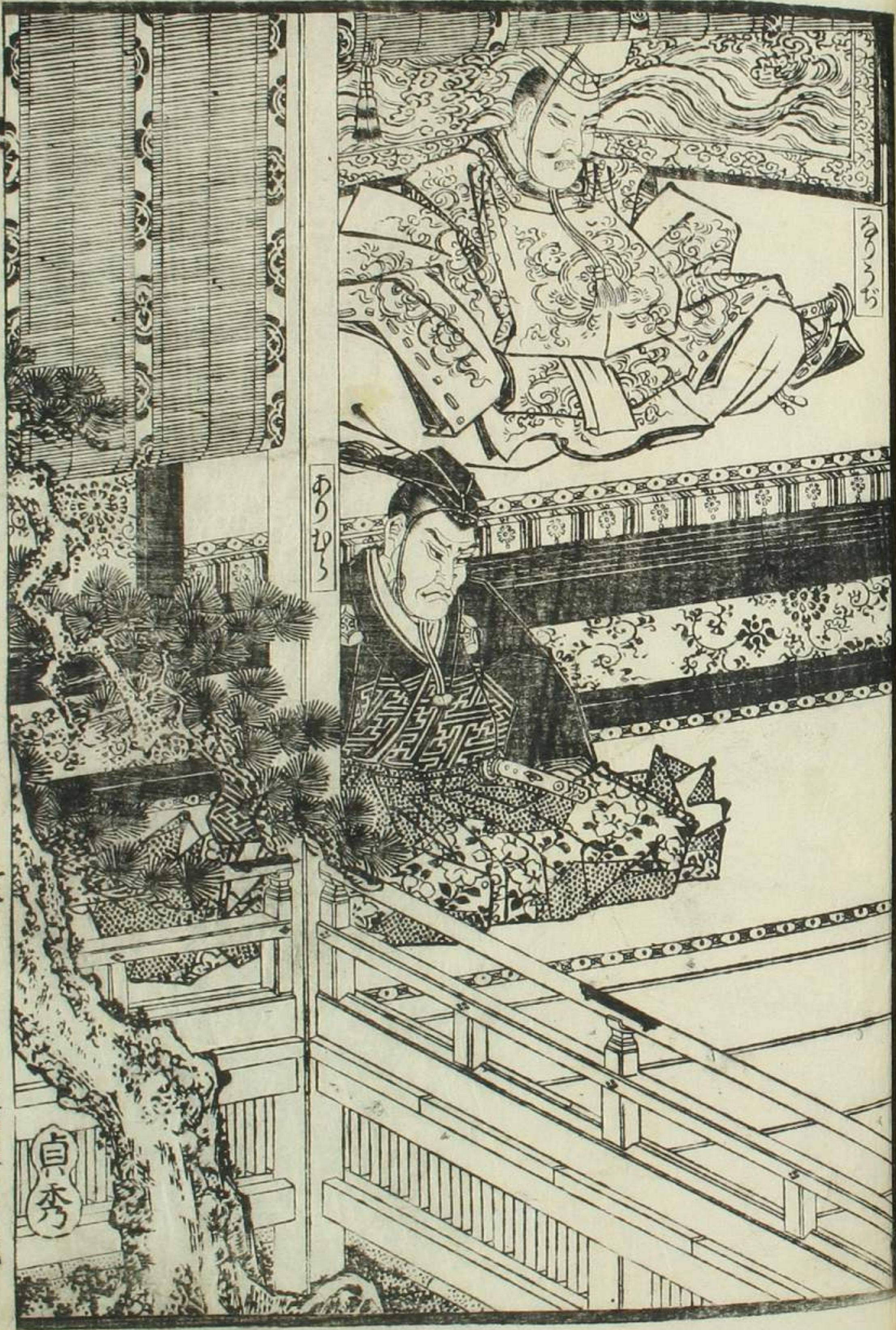
落城の日小戦致さる。忠義ハ今小美談と云其子義實安房へ走りて遂小基と申
此より以来今義成の時までも年始の必使者とまわらせり。父祖の昔昔義を失はせ
然り今故る不寛家と帮助て昔昔義の里見と代ゆぐもいなき倘已と云ぬぬむと
安房へ加勢の軍兵を遣さるゆゆと憚る所も諫るを在村と急不推林とて主君不
朝へ上京を申す目今行包の意見の如く其理あるは似ていとも臣も愚意意同く
先君時永亨小御滅亡させり恐れ余る自業自得と上杉氏の罪あはせ又嘉
吉の役の京都將軍の御下知悉憲実清方の本立意あはせり長尾尚賢
君と立て鎌倉の主御なり一則是昔昔と憤んとする小君の義を思ひ
及て憲忠と害いぬ小君臣亦復讐言とて今日に至る一正正里見を憎むの所
以不則頭定と和睦合體して君を請ふて惣大将御做なす共侶小里見と討ま
欲し身は是當家の大幸へ今自他の勢ひとて其雌雄と計り小義成愚將

年持城へ
計り大將
本持義
同小詳
定正の情
方の子
と從父兄
尚賢又
尚賢小
作

滅亡の期小在り。今定正頭定小荷擔まり。俱小里見を滅し。當
家の大利則云。其第一正正頭定先約われ。必君と鎌倉へ還し入れ。大
職と譲り。其第二當家の士卒。戦功あり。其恩賞。安房四郡とて
御領御做さんと仰き。定正も其折小辭ひ。其第三六給已前
犬塚信乃と喚做。鷹見村雨丸の大刀とて。當家舊臣の兒孫と云。證據あり
仕と願ひ。推參参り。其村雨の贖物。其奴實ハ振舞陽。相似る。敵の刺客
さられ。捕捕ま欲せ。小思小倍する。煖煉。找む力士と砍伏。芳流。關へ逃
登り。往方。知悉。約莫。當時の爲。体。君の知。召。召。又當家。獄吏
る。大飼見八。素是。走卒。見兵衛。蛭蛉。見。小。擊。劍。白。打。緝。捕。の。被。せ
と做。とて。御。執。立。る。獄。吏。御。做。され。小。那。奴。其。職。と。嫌。ひ。京。上。て。久。く。わ。る。ま。る。と

勤不就也。刺誹謗の戲言と吐くと雪をうらぐ捕へ牢舎に在りて大塚信乃を
 緝捕の與に一日罪を饒されて芳流閣上へ登せし及て信乃を擲り捕を俱に
 命して往方を知し其後信乃の行徳の客店に病臥て在りと雪をうらぐ折
 討隊の頭人を奉りける新織帆太夫明風が親兵を領て那地へおたれ信乃が
 首捕てかへる事も実檢入れひひたの義も亦君の知召を所とあり信乃の猶死
 るも亦那大飼見八名火家の夕人七八名皆大をのて氏と做し者と俱に里見
 義成の仕を罷用せしと云ふの義は今番大石憲儀が口状を摩して少智
 のひた然に定正主が里見を憎も征伐の事の始に今茲の春那信乃見八名の
 悪八犬氏が五十子の城へ乱入せ折定正の内室の刃伏に怨み由れ是を
 情由のへ君扇谷殿と共侶義成を討滅し玉いて信乃見八名の悪八犬氏を
 皆生拘を罪と糾き誠り鼻て世の人を示し賞罰正しく最愉快の事

るに那兩大将感謝の堪む俱に恩義を拜戴して復讐の八洲の連帥と仰せ
 なるん然れが這の大利の介を仍包ぐとも思ふ生仁義を感せぬひり里
 見加勢もゆるる當家の士卒勇も不勇も信乃見八名の悪八犬氏と肩を
 比下風をたれて世の胡慮あるん義成當家も冠せをといへも連年の闘
 戦一度も援兵をまわむ荒年の中兵糧を調りしひを信乃他を伐
 たまふも誰り君を不義とく何で當家を容る者ひんや當家の興廢まの
 舉ふ在り義成脚加勢の物体るるといふれと便佞巧小説薦れ成氏遂に
 ら慈ひて敢是非の再議及ぶ然る憲儀對面して同意のよし示さんそ
 次の日憲儀を召さむ成氏則對面の折在村をりて答るも扇谷山内兩所よ
 り言来され里見義成征伐の事我も亦大塚信乃をも憎と思ふより素
 より欲する所委曲の五十子の城へ造るの目面談を聲えんと同意の外異議



るる一六憲儀の歎び兼々來會の日を契りて退き結城へ赴けり成朝の思ふよりやありけん封内不治の事ありと辭々催促に従ふる他千葉宗胤も近首老母世を去り猶喪中在る故に出陣克ふべからざるとも亦催促に従ふ又常陸の左武高久鹿島の同意の答あるを期不逮びて來會せざる其志人の下風立んと恥る然れども義成の良將たるを以て事の成敗量難く各只その封疆を守りて遙く勝負を覘ふも山の里も附ざりけり有徳れども定正の躬方の軍兵數萬あり戰飯も亦匿し不參の諸侯を物とも思ふ近日諸將の集合を待て諸隊の攻口を定んと老黨有司士卒下知るとその準備をせしめせしめ

第百五十四回 大命を聴く善巧方便

却説その日里見の間諜兒が武藏より父の來て注進の言の顛末を如く詳やく且盡せり其大要はついでに義成是を以てその忠告の壺を言町寧の答を以て恩賞の異日あり且相共休息して亦復那地におかれん恩命はついでにのりければ間諜兒は歎び拜して庭門より退出ける當下義成王の次の間侍りる辰相清澄を召させその議及びの程御曹司の權野も還らせり然とす義成王うち合笑みそ便宜の事をも義成通の疲労する歎對面といそあねども但七個の武士等目今急所要ら獵衣裳の供るるも聊の厭くも皆疾召ねといそあね近習を走らせり姑且して信乃毛野道節莊介大角小文吾現八等早く衣裳を更衣杉倉直元と共侶の義通君も從ふ見參入り義通の恭く父君の朝に額を衝て恙なきを祝ひ義成王の愛を以て歡の詞を以て是へとむる躬侍を却七

犬士と直元等も人馬の調煉稍果て目今かゝる來おけるも休らざるもせほ速く面
 談不及へる疲勞を思ひざるも似たりとも。這里より方僅豫武藏の方遣はる間謀
 見せり。五十子も歸來す。注進の軍情も。この事を告ぐ思ふをも急ぎて招き
 たる敵地の動靜を尋ねて飲と問ひて小文吾先答へ然し。日暮るも京上より。那市
 河より大江屋依介。注進の美あるより。快船に乗走ると。昨日妙真許來て。臣等と諸
 いふ。おのれ。此の皆共侶不徳々の地方在りと。知らず。馳て獵所を尋來り。信乃現公
 六個の義兄弟も對面を。情地を告げる。扇谷管領の事の趣諸候を連ね。水
 陸より當家と伐す。欲をいふ。其言極く具そ疑ふ。もいぬ。折も。人馬調
 煉の競獵も。昨日まも果へ。依介も猶御用もあらん。妙真許止宿を。海
 汰を待たし。示して留め。いひ。と告げ。信乃現公。亦の事。那依介。臣等。行徳。旅
 宿。比。の相識れる。老實。見。を。い。ふ。と。も。毛野。道。節。莊。小。大。角。等。と。商。量。は。り

いひ。小。則。毛野。が。一。策。あり。聞。召。る。う。の。や。と。薦。言。せ。義。成。王。然。も。と。點。頭。て
 原來。定。正。の。謀。る。所。を。各。既。も。知。る。然。も。詞。を。費。ま。及。び。毛野。の。何。等。の。業
 計。の。具。の。教。の。妙。ま。ほ。と。問。ひ。て。毛野。の。阿。と。心。を。找。し。出。聲。と。低。う。と。否。思。意。の
 別。議。の。い。を。定。正。王。海。陸。も。當。家。と。攻。伐。す。欲。を。奉。ふ。必。す。く。船。と。徴。也。水。戰。の
 船。も。陸。戰。の。馬。も。勝。れ。り。敵。の。船。と。合。し。ぬ。以。前。も。早。く。依。介。の。仰。付。を。せ。ぬ。と。
 武藏。下。總。府。在。る。処。の。小。船。と。買。合。せ。御。領。の。海。岸。に。維。持。措。え。敵。の。與。の
 不便。也。時。に。莅。て。御。方。の。利。也。或。亦。市。河。邊。に。其。船。を。沈。め。隠。置。く。後。の。用。を。と
 け。願。の。早。く。依。介。の。船。の。價。を。賜。り。て。の。美。を。い。ふ。と。請。ふ。と。義。成。王。も。ち
 け。現。も。急。ぎ。て。良。策。に。六。郎。兵。庫。助。且。退。り。て。有。司。下。知。り。て。船。の。價。を。小。文。吾
 ち。渡。與。え。り。の。餘。も。所。要。の。猶。も。と。當。國。並。上。總。下。總。各。城。王。諸。頭。人
 也。汝。も。連。署。の。急。遞。脚。を。も。那。敵。必。寄。來。る。事。由。を。御。示。し。て。の。海。濱。の

成りと固く走し。その中堀内雑魚太郎小森但一郎浦安牛助登桐山八郎田税力
助も水陸の軍陣も孰も熟者者多れ別不用所あり。各今守る所の廳南千代九椎
津館山の諸城の權且次將小讓り衛らそ。那身の皆稻村へ参りねと下知まし。あ
餘ハ明日の制度あらん。急ぐ只這二椿事の。詞委多課まれば辰相清澄
る果く却七犬士を勞ひら。船の價の寡いも後向んと契らら。連立退出
は。登時又義成主の七犬士多らち向いて目今毛野が算計の我既不用。その他亦
良策あり。教と受ん甚麼と。詞も訖らぬ程の道即找と出上票を言
傳聞ふ。今番扇谷定正ま。當家と恨も水陸の大軍を起す其濫觴の
今茲正月廿一日の臣等が五十子の城と攻落して。先主先父の讎言復あは。那人
憎と且差度で事今ある既果と云依介が忠告を以て。夙其のるを。是臣
ら故の恨と隣國不結せ。其禍を君の徒を罪免るべ。然其義兄弟も

と相共骨を折り身と粉ふるを。水大敵と殺論ゆ陸寄隊を。上我兩館の洪恩報ひ。下房總二州の民塗炭を極ん。素より臣
等が職分也。他譲らる所なれども。人各ゆると。夫謀と帷幕の内
旋りて。勝を千里の外決ま。智ありを。又堅を推し鏡を折。勝を
未然決せ。戦へ必勝。且大敵と怕れ。士卒と勇の像く。是大勇の
あ。胆の敢ひ易く。願ふ今の算計の毛野。問せ。臣等六名。其計。据て
ゆ。敵を破る。何の脚疑ひ。と憚る。論。莊外大角小文吾現。公
共。の議を好。毛野を軍師。做。と詞。齊。請。稟。毛野。の
推。禁。ゆ。開。何。を。兵。法。七。書。の。各。も。又。学。の。足。る。者。も。一。夫。愚。中。て。用
いら。ん。と。好。賤。く。て。專。せ。ま。く。欲。ま。り。聖。者。の。誠。る。所。我。玉。智。字。を。以。れ。も。然
なる。智。者。の。徳。わ。今。も。亦。各。と。進。退。を。俱。せ。ん。一。人。任。ま。る。と。辭。を。信。乃。

と云強面答答をう。信れが別人を用ひん然と問うと毛野の夢あま否御説で
 へども那師父と大角をその拙策を仍ひて其故の箇様々々信々ふと言詳ふ
 耳は生れ義成王欽ひて又使を遣して促し迫て迎ん然否那師父の木
 訥る事ふとの君命も従ざる所あり殺生戦争即是之臣等御使とて今
 大角と共に延命寺へ赴きて説く兼服仕らん猶幸ひ多し那師父久し病
 着きて鬚も頭髮も長く伸て面瘦ててしめぬ。あつて敵を計るふ妙大角の
 拙策を既示し早く準備仕りぬ身の暇をぬる敵の大兵五十子へ集
 合す前師父と共に夜に紛れて快船に乗せ敵地へ遣す。籠襲の玉を
 賜ふと急迫し請へ大角も毛野が計策を好と稱て俱に約んと稟まを
 義成則ち其説を儘して籠襲の玉を渡與さんとその美を清澄小尋ぬ
 清澄答て然し此の件奇玉の裏に大江親兵衛が稟まを授ふも臣も預

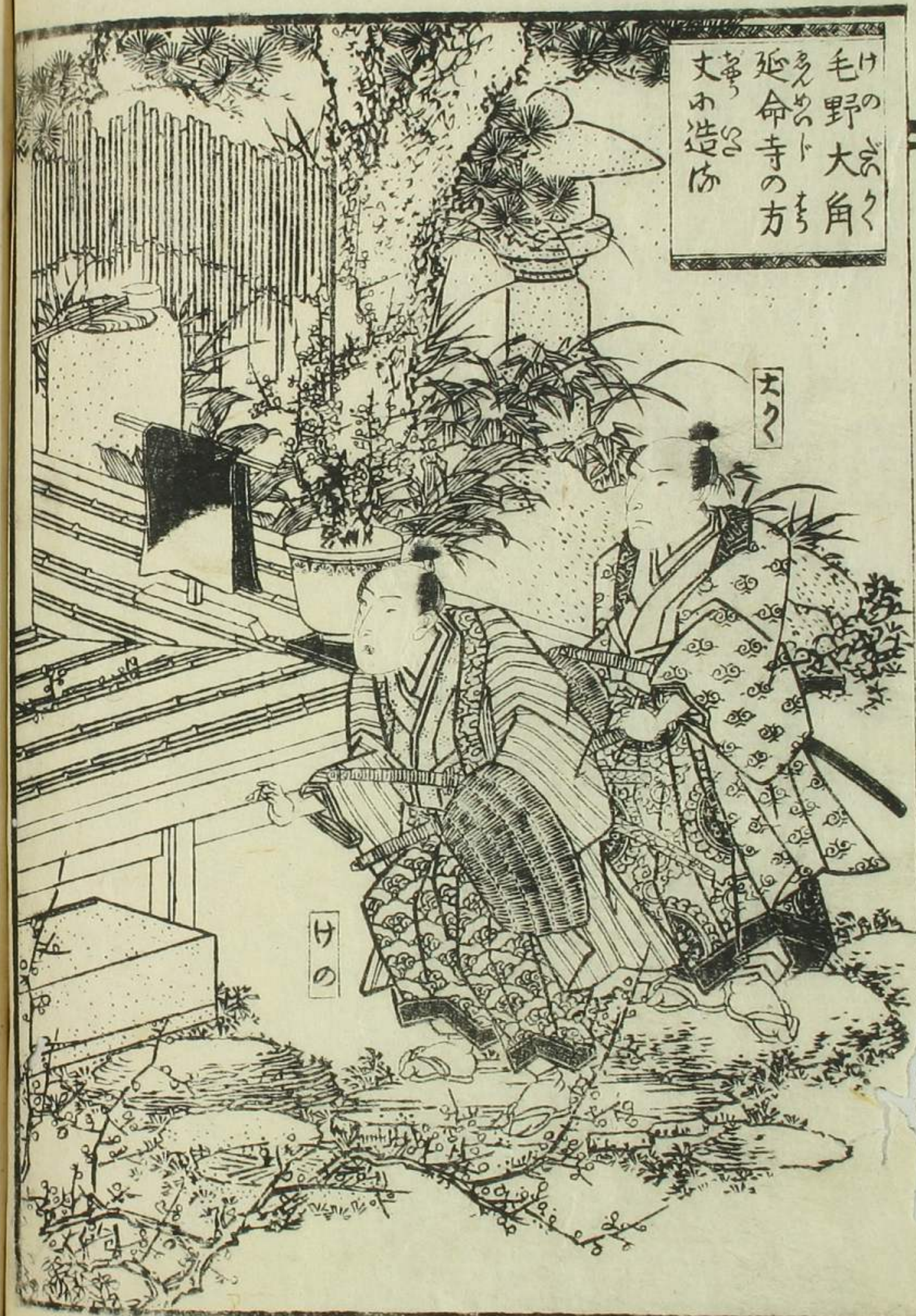
すなり一と二とゆえに寶おゆれば大士も那八箇の靈王を振へて且失のゆらん
 為にお母は腰お吊てゆへ今もあふゆといひ躬て腰を撈りて表裏を解き進
 らまれば義成受命より見えてを隨毛野お渡りぬ毛野のち戴は懐
 楚と交ぬ大角と共に退り立んとて辰相急お喚け大阪生御使
 あり延命寺へ赴き伴當の準備をさせん騎馬を路次をいそぐるんと心づ
 けのこゝろ思ふよゆへ伴當より反てたり騎馬をまいて情地おゆんと
 いひ此下退れて却君侯と義成兄弟お別を生て大角と俱に延命寺へと
 立おけり姑且して辰相の清澄お尋ぬ。定お大士の奇才も今ゆりの言ゆり
 せこれと就中大阪が八百八人に至妙も但今番の水戦を唐山三國の時吳
 魏赤壁の故轍お據り風と火をり謀るとも敵も亦然なるの利害の前
 より知れるべし。あつて思ひぬと問へ清澄沈吟して然し咱も疑ひあ

とも那^{かのひとぬり}人脱^{だつ}落^{らく}あ^るべ^ももあ^まを^ま館^のの^し知^ちせ^ああ^るん^とを^を義^ぎ成^{じやう}主^{しゆ}の^ます^か。否^{いな}
 とよ那^{かのせだへま}赤^{あか}壁^{かき}の^ま閉^ふ戦^{せん}の^ま周^{しゆ}瑜^ゆの^ま敵^{てき}の^ま船^{ふね}を^を焼^やけ^るの^ま曹^{そう}操^{そう}が^ま救^{きう}ふ^ま冬^{ふゆ}月^{げつ}の^ま東^{とう}南^{なん}の^ま
 風^{かぜ}稀^まへ^まと思^{おも}ひ^ま故^{ゆゑ}に^ま然^{しか}る^まを^を孔^{こう}明^{めい}が^ま風^{かぜ}を^を禱^{いた}り^ま死^しと^ま羅^ら賈^が貫^{くわん}中^{ちゆう}の^ま演^{えん}義^ぎの^ま戴^{たい}れ^まる^ま
 陳^{ちん}壽^{じゆう}が^ま三^{さん}國^{こく}志^しの^ま風^{かぜ}を^を禱^{いた}る^まの^ま事^{こと}を^を恐^{おそ}る^ま那^{かの}風^{かぜ}の^ま偶^ぐ然^{ぜん}と^ま入^いり^ま左^さま^まれ^ま右^{みぎ}
 も^もあ^まれ^ま毛^{もう}野^のの^ま必^{かならず}胎^{たい}と^ま奪^{うば}ひ^ま骨^{ほね}を^を換^かへ^まる^ま奇^き計^{けい}あ^まる^ま落^{らく}成^{じやう}を^を見^みる^ま如^{ごと}く^まと^まあ^まら^まと^ま論^{ろん}
 あ^あの^ま辰^{ちん}相^{さう}清^{せい}澄^{じやう}あ^ある^まと^ま信^{しん}乃^の道^{だう}節^{せつ}莊^{じやう}人^{じん}現^{げん}八^{はち}小^{せう}文^{ぶん}吾^ご等^{とう}と^ま俱^{とも}に^ま餘^よ談^{だん}の^ま
 暨^{おと}び^まけ^まり^ま介^{かい}程^{じやう}の^ま大^{だい}阪^{はん}毛^{もう}野^の胤^{いん}智^ち大^{だい}村^{むら}大^{だい}角^{かく}礼^{らい}儀^ぎの^ま俱^{とも}に^ま野^の服^{ふく}を^を編^あみ^まを^を深^{ふか}く^ま
 伴^{とも}當^あ才^{さい}二^に名^なを^をて^ま情^{せい}地^ぢの^ま白^{はく}濱^{ひん}の^ま延^{えん}命^{めい}寺^じへ^ま赴^すけ^まの^ま時^{とき}大^{だい}法^{ぽう}師^しの^ま風^{かぜ}
 寒^{さむ}の^ま欠^か安^{あん}稍^{しやう}瘡^{そう}る^まの^ま猶^{なほ}屏^{びん}坐^ざて^ま方^{かた}丈^{ぢやう}在^{ざい}り^ま毛^{もう}野^の大^{だい}角^{かく}の^ま館^の御^ご使^しを^を奉^{ほう}
 了^{りやう}く^まあ^あれ^まけ^まり^まと^ま言^いふ^ま己^{おのれ}と^まの^ま沙^さ弥^や念^{ねん}成^{じやう}を^をて^ま方^{かた}丈^{ぢやう}へ^ま迎^{むか}ひ^ま入^いり^まと^ま并^なぐ^ま儘^{まま}あ^あら^ま
 對^{たい}面^{めん}を^を登^{のぼ}り^ま毛^{もう}野^のの^ま大^{だい}角^{かく}と^ま俱^{とも}に^ま上^{かみ}坐^ざあ^あり^ま着^きて^まあ^あら^ま師^しの^ま責^{せき}を^を平^{へい}安^{あん}と^ます^ま後^ご昨^{そつ}日^{じつ}の^ま

軍^{ぐん}旅^{りょ}の^ま事^{こと}に^ま就^つて^ま館^のの^ま口^{くち}を^をめ^めり^ま師^し父^ふの^ま云^いふ^まと^ま難^{なん}義^ぎを^を舒^{ゆる}て^まは^まる^まの^ま
 猶^{なほ}善^{ぜん}命^{めい}を^を傳^{たづ}ね^まる^ま我^{われ}們^の御^ご使^しを^を參^まり^ま一^{いっ}重^{じゆう}毒^{どく}時^{とき}左^さ右^{みぎ}を^を遠^{とほ}ざ^まけ^まぬ^まと^まい^まを^を
 大^{だい}の^まう^まち^まで^ま然^{しか}に^ま出^で家^け人^{にん}に^ま相^あ心^{しん}し^まる^ま軍^{ぐん}陣^{ぢん}の^ま事^{こと}を^を再^{また}命^{めい}も^も兼^かふ^ま及^{およ}ぶ^ま
 且^{かつ}左^さ右^{みぎ}の^ま人^{にん}あ^あら^まも^も只^{ただ}這^こ念^{ねん}成^{じやう}の^ま他^たの^ま腹^{はら}心^{こころ}の^ま徒^{ただ}弟^{てい}り^ま侍^{さむらい}の^まも^もけ^まら^まあ^あら^まと^ま登^{のぼ}
 茶^{ちや}を^をま^まあ^あら^ませ^まとい^いを^をせ^ま念^{ねん}成^{じやう}の^ま厨^くの^ま方^{かた}へ^まを^を退^ひり^ま姑^{なほ}且^{かつ}大^{だい}角^{かく}の^まい^まや^ま
 師^し父^ふの^ま未^ま少^{せう}知^ちぬ^まを^を那^{かの}扇^{せん}谷^やの^ま管^{くわん}領^{りやう}が^ま我^{われ}們^のを^を憎^{にく}む^まの^ま故^{ゆゑ}今^{いま}番^{ばん}山^{さん}内^{ない}頭^{だう}定^{じやう}
 主^{しゆ}と^ま和^わ睦^{ぼく}あ^あら^ま且^{かつ}諸^{しよ}侯^{こう}を^を連^{れん}じ^ま大^{だい}軍^{ぐん}の^ま水^{すい}陸^{りく}より^ま當^あ家^けを^を伐^たち^まま^ま實^{じつ}は^ま足^た
 危^{あや}か^ま窮^{きゆう}存^{ぞん}亡^{ぼう}の^ま秋^{あき}の^ま館^のの^ま宵^{せう}衣^い野^の食^{じき}軍^{ぐん}議^ぎの^ま暇^{あひだ}を^をま^まあ^あら^ませ^ま則^{すなは}ち^ま大^{だい}
 阪^{はん}を^を軍^{ぐん}師^しあ^あら^ませ^ま大^{だい}塚^{づか}以^{もつ}下^げ我^{われ}們^のを^を使^し使^し不^ふ做^ぞされ^まる^ま且^{かつ}師^し父^ふを^を請^こめて^ま謀^{ぼう}計^{けい}を^を示^し
 せ^ま欲^ほし^ま御^ご身^みの^ま欠^か安^{あん}の^ま瘡^{そう}を^を澁^{しやく}く^ま參^まり^まぬ^ま柳^{りゆう}泰^{たい}れる^ま後^ご將^{しやう}行^{ぎやう}は^まる^ま
 欲^ほし^ま家^け人^{にん}を^をと^まも^も其^{その}國^{こく}に^ま居^いて^ま其^{その}國^{こく}の^ま亡^なる^まを^を外^{とほ}見^みが^ま不^ふ忠^{ちゆう}不^ふ義^ぎの^ま罪^{つみ}免^{まぬ}



けのま
野大角
多め
延命寺の方
丈の造
造依



大く

サの

るべくぞ。開も亦釋迦の教を欲と詰ると、大いゆあむ。然之我の庸常る。出家
 人と同トかま。命の御恩をうま。而館の御為。毎々眞福と祈ると我職令と
 へべけれ。當は潘編小といと雖賢臣勇士不匿。く取不。這回は何ぞ人死如く軍
 旅の事。要るる。出家人を然。席へ召きて何ふきせん。薦る者。の死に思
 いもけぬ事。ふとと。辭ふを毛野の推林。師父いと憚りある言。身は只
 其一と知。其二と知。敵の水戦を上。と。數百艘の艦艦と連
 ね渡して伐。欲ま。の既。其敵船と扱。風と火。者あむ
 然。敵の與。風を起。這。計を仍。者。今師父。外。人。夫甲由。日。を
 身。探。馬。跨。り。舞。て。敵。と。伐。と。課。出。家。人。似。は。る。と。推。辭。の
 ふも。理。り。む。口。君。の。為。民。の。為。不。貌。と。殊。名。と。隱。敵。と。欺。て。風。と。祈。ふ。是
 善。巧。方。便。也。妄。語。の。一。戒。と。破。る。あ。む。の。美。を。思。ひ。あ。り。と。説。れて。大。沈。吟

去て。然。情。由。あ。べ。けれ。も。風。を。起。て。其。風。所。以。船。を。焼。て。敵。を。亡。す。親
 人。と。殺。す。同。ト。非。如。頭。顱。を。削。ら。む。も。然。殺。生。と。せ。ん。や。と。の。固。辭。と。听。さ。り
 去。を。大。角。徐。論。考。す。師。父。の。主。意。何。ぞ。不。省。其。風。と。て。敵。と。破。る。と。殺。生
 と。て。嫌。ひ。の。大。敵。利。を。得。て。渡。り。來。て。城。を。拔。け。人。を。屠。り。然。師。父。の。心。軍。の。く
 自家。の。士。卒。千。萬。名。と。自。殺。一。の。同。ト。利。害。損。益。の。舉。お。於。て。何。の。道。も
 免。る。べ。く。ぞ。憊。れ。敵。を。害。さ。ると。御。方。の。戦。い。を。助。助。と。其。功。徳。孰。を。其。風。を
 起。ま。の。故。敵。を。殺。ま。の。嫌。い。あ。ら。凱。旋。の。後。水。陸。道。場。り。敵。の。菩。提。を。吊
 ひ。の。び。飲。ひ。て。皆。清。果。を。得。ん。夫。生。ある。者。ハ。必。死。あ。り。死。て。活。佛。の。引。道。守。を。受。ん。と。い
 かな。る。べ。疎。死。の。千。慮。の。一。失。歎。と。理。り。逼。る。兩。才。子。の。意。見。あ。大。困。果。と。黙
 然。ら。る。と。半。晌。許。思。ひ。復。ら。ら。ち。領。死。と。志。ら。ん。あ。是。非。及。む。我。其。計。を。從。て
 左。も。右。も。を。べ。けれ。も。我。法。力。の。て。い。ふ。く。風。を。起。ま。支。を。よ。く。せん。あ。の。毛。什。麼。と。詰。り

問へ毛野の咲々懐より。雍龍襲の玉と。裏の伏ふ出でて、大示しくひやう。師父先
 是を見ぬひひ。ある裏の妙椿狸児が。風を起さし奇貨也。那雍龍襲の玉即是
 る。然る是をりて招く。死の東西南北思ひの随ふ劫風を起さし。投する索を引く
 より易る。故に館を乞まらりて。推乃來て。師父の所用と毛。我謀る所は箇様々々。恁
 恁よひと。具に説示して。又ひやう。師父の今宵烏夜は紛れて。悄地大角と共信の
 柴濱に推渡り。權且谷山に躲れ住りて。異日件の算計を以て。勿論當山の衆
 徒の寄隊を調伏の祈禱の爲に。三七日富山の品山屋に籠ると。立て立必ひ。あの
 餘の準備の箇様々々とある。ゆゑに。雍龍襲の玉を遞與せし。又大角の俱額を
 哀めり。密談の目を消しけり。畢竟あの夜、大角が悄地快船から乗て俱の
 武藏の柴濱に推渡りて。後の話説甚麼を。開下回不解分るを。聴かし。
 南總里見八犬傳卷之三十二終

○八犬傳第九輯下帙下中編乙號上分卷五冊書画割刷目次

出像

柳川重信畫



補助画 卷之三十二末ヨリ

歌川貞秀

浄書

谷川金

卷之二十九

澤金次郎

卷之三十一

朝倉伊八

彫工

卷之三十一上

常盤園

卷之三十一下

澤金次郎

○曲亭翁新舊著編畧目

書林 文溪堂藏版

八犬傳第九輯下帙下乙號下編

分卷十冊當冬推續出版 全部九十冊大團圓に至りし

お花新書

中本第一編第二編各三冊○翁の中本の作文化以来久しきこと 本房強て乞求ゆてうらふあ初編三冊引續近日出版仕

開卷敬馬奇俠客傳第五輯

作者年々八犬傳の著編之餘筆暇多きの 書中絶の処近日稿成り出版遠く存なうらむ

